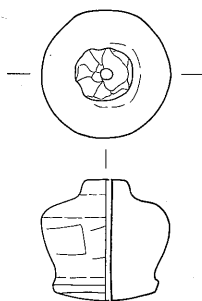


大宰府条坊跡 XVIII

—地区道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



条212SD015出土土製品

2 0 0 1

太宰府市教育委員会
玉川文化財研究所

大宰府条坊跡 XVIII

－地区道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2 0 0 1

太宰府市教育委員会
玉川文化財研究所

序

本書は、平成12年度に発掘調査を実施致しました大宰府条坊跡第212次調査の報告書です。

地区道路整備事業に伴う調査で調査地は大宰府条坊内でも中央大路に面し、北側には菅原道真の御旅所として著名な榎社があるなど、重要な位置にあります。

調査の結果、中央大路の一画や東西路にあたる条路が発見され、さらに木枠で作られた井戸が多数見つかるなど、大宰府条坊を考える上で貴重な成果を得ることができました。

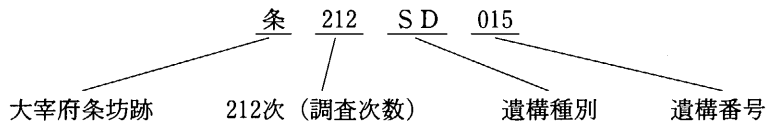
本書が学術研究はもとより、文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。最後になりましたが、調査に際しまして御理解、御協力いただきました周辺住民の皆様、調査および整理に関係された諸機関に、心よりお礼申し上げます。

太宰府市教育委員会

教 育 長 關 敏 治

例 言

1. 本書は、大宰府条坊跡第212次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査地点は大宰府市朱雀3丁目2584-1に所在し、調査対象面積は791.89㎡、調査面積は425.23㎡、調査期間は平成12年8月17日から10月23日にかけて実施された。
3. 発掘調査は、大宰府市教育委員会の指導のもとに（株）玉川文化財研究所（所長 戸田哲也）が行った。
4. 遺構の実測図作成及び写真撮影は、高橋勝広・香川達郎・牧口直孝が行い、調査地の空中写真は（有）空中写真企画が行った。
5. 遺構実測の基準点は、国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。よって報告書に示す方位はすべて座標北（G.N）を指している。なお、現地周辺の磁北は座標北から6°30′西偏する。
6. 本書に掲載した遺構番号は以下の要領で理解できる。なお、本書中では遺構略称の「条」を基本的に省略している。



7. 本書に掲載した遺物の実測図番号と写真図版番号は対応関係にあるが、写真図版のみの資料に関してはR（遺物）番号を表記した。
8. 本書に使用した土器の分類は『大宰府条坊跡Ⅱ』付編、舶載陶磁器の分類は『大宰府条坊跡XV』によっている。その他の遺物に関しては巻末に掲載した。
9. 本書の執筆は、戸田哲也の指導のもとに香川達郎が行った。出土陶磁器については中島恒次郎氏の教示を得た。なお、Ⅲ－（3）5）13石器は中山 豊が分担執筆した。自然科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その報告を本書巻末に掲載した。
10. 本文及び写真図版と表は付属のCD－ROMに収容している。詳細はCD－ROM内のテキストデータ「はじめにお読み下さい」を参照のこと。
11. 報告書作成業務は、（株）玉川文化財研究所において行った。
12. 発掘調査及び報告書作成に当たり、次の諸氏、諸機関より御教示を賜った。ここに記して感謝する次第である。（敬称略、順不同）
横田賢次郎（九州歴史資料館）、山中 章（三重大学人文学部）、筑紫野市教育委員会
13. 出土遺物及び図面、写真等の記録類は大宰府市教育委員会が保管し、公開・活用していく予定である。

調 査 組 織

太宰府市教育委員会調査組織

(平成12／2000年度)

総括	教 育 長	長 野 治 己 (～12月24日)
		關 敏 治 (12月25日～)
庶務	教 育 部 長	白 石 純 一
	文 化 財 課 長	津 田 秀 司 (～3月31日)
		木 村 和 美 (4月1日～)
	文化財保護係長	和 田 敏 信
	文化財調査係長	山 本 信 夫 (～10月23日)
		神 原 稔 (11月1日～)
	主 任 主 事	藤 井 泰 人
		野 寄 美 希
	嘱 託	鈴 木 弘 江
調査	技 術 主 査	城 戸 康 利
	主 任 技 師	山 村 信 榮
		中 島 恒 次 郎
		井 上 信 正
		高 橋 学
		宮 崎 亮 一
	技 師 (嘱 託)	下 川 可 容 子
		森 田 レ イ 子
		佐 藤 道 文

(株) 玉川文化財研究所調査組織

所 長	戸 田 哲 也	日本考古学協会会員
調査研究部長	河 合 英 夫	日本考古学協会会員
主任研究員	高 橋 勝 広	日本考古学協会会員
主任研究員	小 山 裕 之	日本考古学協会会員
研 究 員	香 川 達 郎	

目 次

I. はじめに	1
II. 調査経過	2
III. 調査の概要	6
(1) 層位について	6
(2) 検出遺構	6
1) 道 路	7
2) 溝	9
3) 井 戸	11
4) 土 坑	18
5) その他の遺構	24
(3) 出土遺物	25
1) 道路出土遺物	25
2) 井戸出土遺物	28
3) 土坑出土遺物	44
4) 包含層出土遺物	56
5) 調査区内出土遺物	59
IV. 小 結	60
V. 出土遺物の付着物に関する自然科学分析	63
遺構番号台帳	69
出土遺物一覧表	70
遺物計測表	78
報告書抄録	巻末

I. はじめに

大宰府条坊跡は福岡県太宰府市に位置しており、推定される範囲は隣接する筑紫野市にまで展開する古代の都市遺跡である。当地は福岡平野の南深部、西から背振山地、東からは三郡山地が迫る狭隘な二日市構造谷の低位段丘にあたり、福岡平野と筑後平野を結ぶ地峡地帯となっている。山地より源を発する諸河川は筑紫野市二日市付近を分水嶺として両平野を潤しており、高所より見下ろすと回廊といえる地形的景観を見せる。今回報告する大宰府条坊跡第212次調査はこの狭隘な谷の中、福岡平野へと流下する御笠川と鷺田川に挟まれた氾濫低地に立地している。現地表面での標高は約32 mを測る。

大宰府条坊跡の存在は1968年、鏡山猛による条坊復元案の発表によって世に知られるところとなり、発掘調査による条坊跡の確認作業は昭和43（1968）年の大宰府史跡の発掘調査以来、福岡県教育委員会、九州歴史資料館、太宰府市教育委員会、筑紫野市教育委員会によって実施され、数々の成果と問題点が提起されてきた。調査は今回で212次を数える。

今回の調査地では事前に太宰府市教育委員会によって試掘調査が実施され、平安時代の土坑等が確認されていた。また、周辺遺跡の調査事例や条坊復元案から朱雀大路及び右郭十条・十一條の東西路の発見が期待された。さらに調査地北側に隣接する榎社は、延喜元年（901）菅原道真が大宰権帥として配流された地（南館）と伝承されており、古代の邸宅に係る遺構が発見される可能性が高いことが指摘された。

調査の結果、奈良時代後期から平安時代後期の井戸、土坑、平安時代の条路側溝、朱雀大路と有機的な関係にあると考えられる遺構などが検出された。これらの遺構は、後世の攪乱により遺構が消滅している可能性が危惧された中であって、削平等は受けていたもの予想外に良好な状態で発見された。今回の調査によって大宰府条坊の復元に新たな資料を加えられたことは大きな成果であったと考えられる。

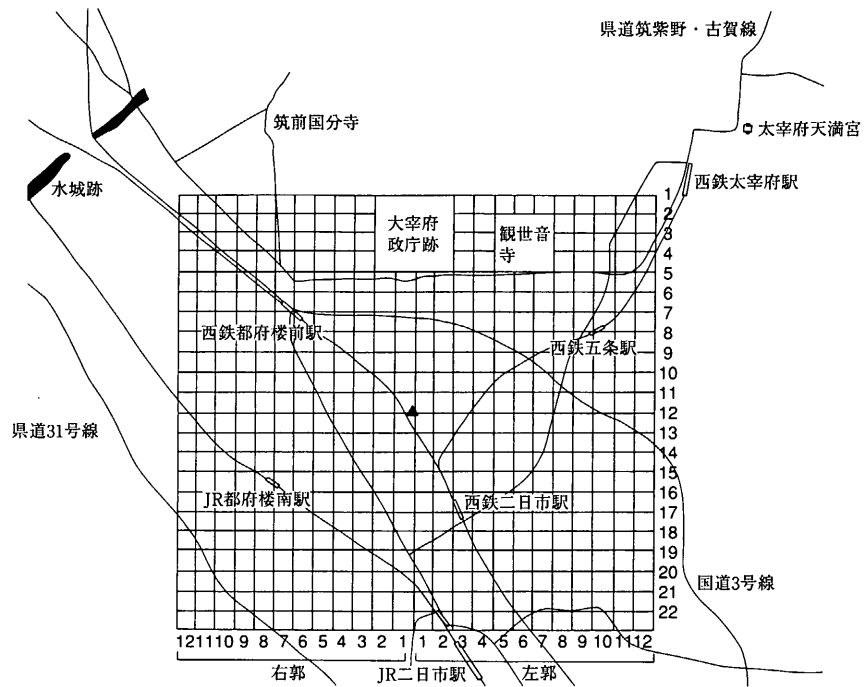
Ⅱ．調査経過

調査地は太宰府市朱雀3丁目2584-1に所在する。平成12年度、当該地において地区道路整備事業が計画された。市教育委員会では、大宰府条坊跡内に当たることから、発掘調査を行うこととなった。調査にあたっては「太宰府市埋蔵文化財調査指針」に則って行った。現地調査は平成12年8月17日に開始し、10月23日までの約2か月を要した。

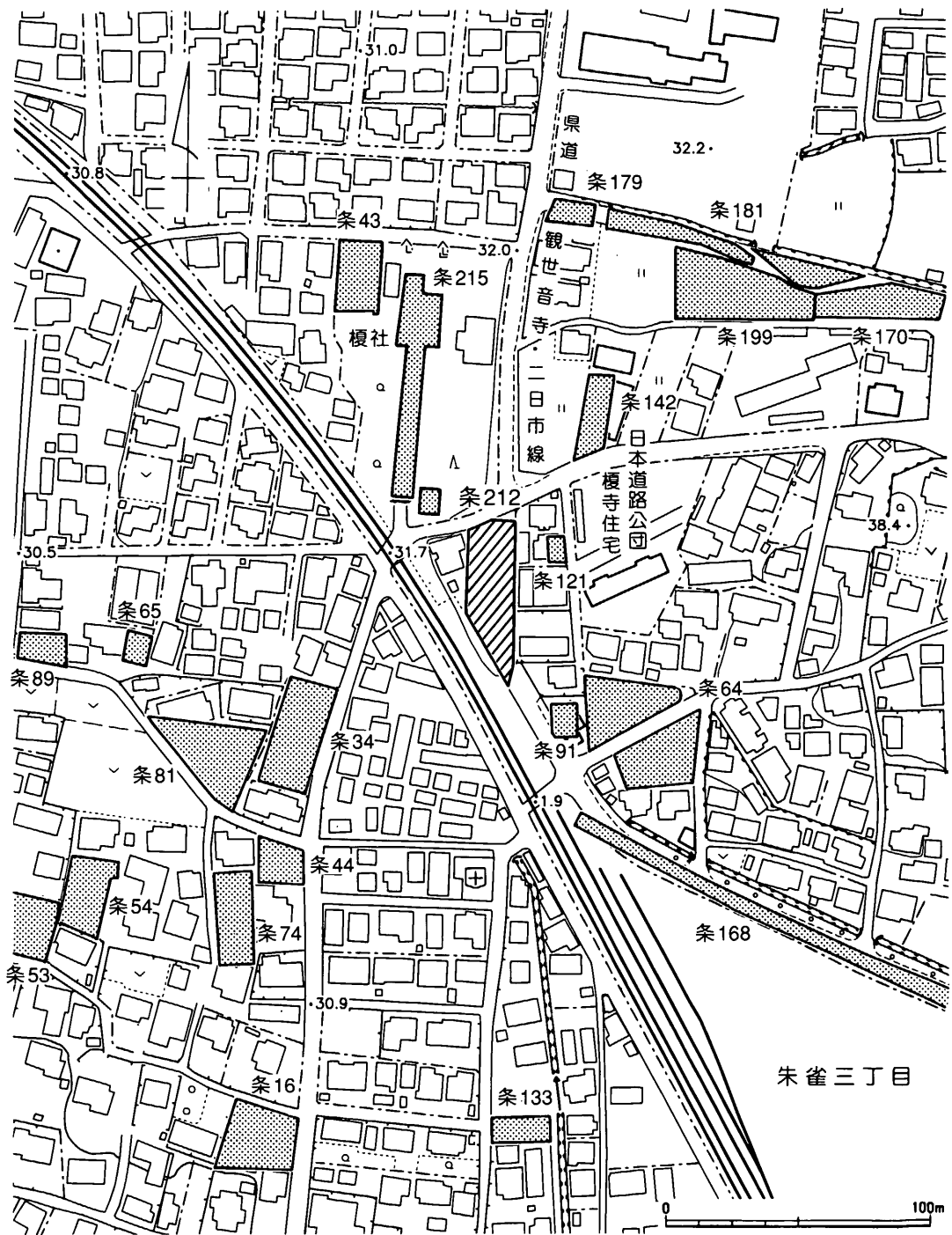
遺跡の調査対象面積は791.89㎡であるが、調査地の南側には西鉄大牟田線が走り、東側には下水溝が埋設され住宅も近接するなど隣接地の状況を考慮し、セットバックを充分にとり、調査壁に角度をつけ崩落を防止するなど適宜安全策を取ったため、遺構面での調査面積は最終的に425.23㎡であった。

調査の手順としてはまず、作業効率化の観点から遺構確認面まで重機を用いることとし、平成12年8月17日に搬入し、同日中に作業を開始した。遺構確認面までは層厚1.9mほどであった。また、旧市営住宅の基礎パイルが多数（径0.3m×62本）残存しており、これらも遺構を配慮しながら重機で粉碎しつつ鉄筋を切断していった。この際に発生した土砂はすべて搬出している。重機での作業が一定の範囲まで進行した8月22日に遺構の検出作業を人力にて開始した。その後遺構確認作業に移行し、並行して調査区内に国家座標を基準とした測量杭を3m方眼で打設してグリッドを設定し、検出した遺構について縮尺100分の1の略測図を作成して遺構番号を与えていった。略測図記載済みの遺構から順次、掘削調査を開始し、出土遺物は土層ごとに取り上げを行った。遺構完掘後に写真撮影及び20分の1遺構図を作成したが、実測図は遺構の状況によって適宜縮尺20分の1及び10分の1の個別図も作成している。

9月初旬の時点で発見した遺構は、奈良時代～平安時代の井戸10基、土坑6基、平安時代の道路（条路）側溝2条、段状遺構1条である。近隣で並行して調査が行われていた条坊跡第209次調査では坊路及び条路との交差点が発見されており、これらの成果から、9月21日両遺跡の報道機関への公開が行われ、同30日に近隣住民への遺跡見学会が催された。10月16日、空中からの全体写真撮影を行い。翌日より搬出した土砂をもって埋め戻し作業を開始し10月23日現状に復したが、この間、調査区の東側と北側の3箇所について、拡張調査を行い遺構を追求した。また、埋め戻しの初期段階に遺構保護の観点から遺構確認面上約30cmの高さまで真砂土による被覆を行っている。



第1図 調査地点概念図（1/30,000 ▲調査地）

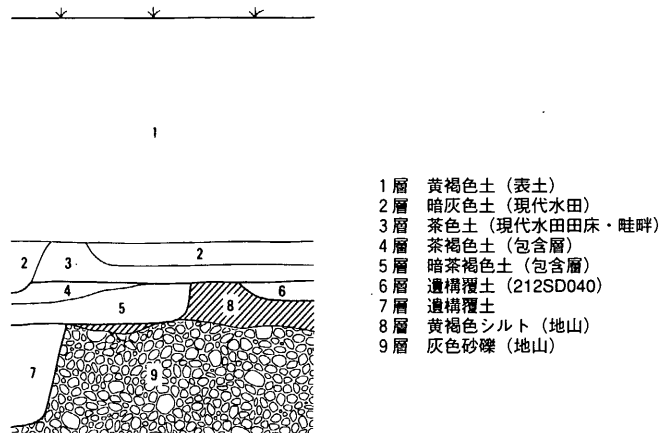


第2図 大宰府条坊跡第212次調査地点位置図 (1/2,500)

Ⅲ．調査の概要

(1) 層位について (第4図)

市営住宅建設時に埋め立てられた層厚1.5mほどの黄褐色土(1層)を除去すると、1960年代末まで耕作が行われていた水田層が現れる。田床及び畦畔を含めると層厚20cmを測る土層(2・3層)である。その下層は色調が漸移的に変化しており、土色から2層に分けられ、上層から茶褐色土(4層)、暗茶褐色土(5層)となる。龍泉窯及び同安窯青磁碗・皿を包含している。この遺物包含層を除去すると、鷺田川の氾濫に起因する黄褐色シルト層(8層)及び灰色砂礫層(9層)が現れ、本層上面を遺構検出面とした。なお、本層上面は微妙な凹凸があり、部分的に黄褐色土や灰褐色土が凹地に遺存しており、遺物を包含している。堆積について、表土から遺構検出面までを通観すると茶褐色土と暗茶褐色土以外の層界は不整合であることから、各期において土層の人的あるいは自然の削平・流出入作用がはたらいたものと観察される。



第4図 212次調査土層堆積模式図

(2) 検出遺構

今回の調査では溝5条、井戸12基、土坑16基、その他に段条遺構を1段を検出した。調査区内には旧市営住宅の基礎パイルが多数(62本)打設されており、これによって遺構が破壊されている箇所もあり、調査に少なからず影響を与えた。

1) 道 路

調査区の北側で溝3条と土坑2基を検出した。これらの遺構はその配置から大宰府条坊の東西路（条路）にあたると考えられた。各遺構の呼称と位置は、南側側溝が212S D010、北側側溝は212S D015と212S D028、そして212S D028の西側延長線上に連なる土坑SK029・SK033である。なお、両側溝間の空閑地については路面に関わる施設を想定して精査を行ったが、後世の削平等の作用によってすでに失われたものと推定される。両側溝心々間の距離は212S D010と212S D015間は7～8.5m、212S D010と212S D028間は約6mを測る。

212S D010（第5図、図版2）

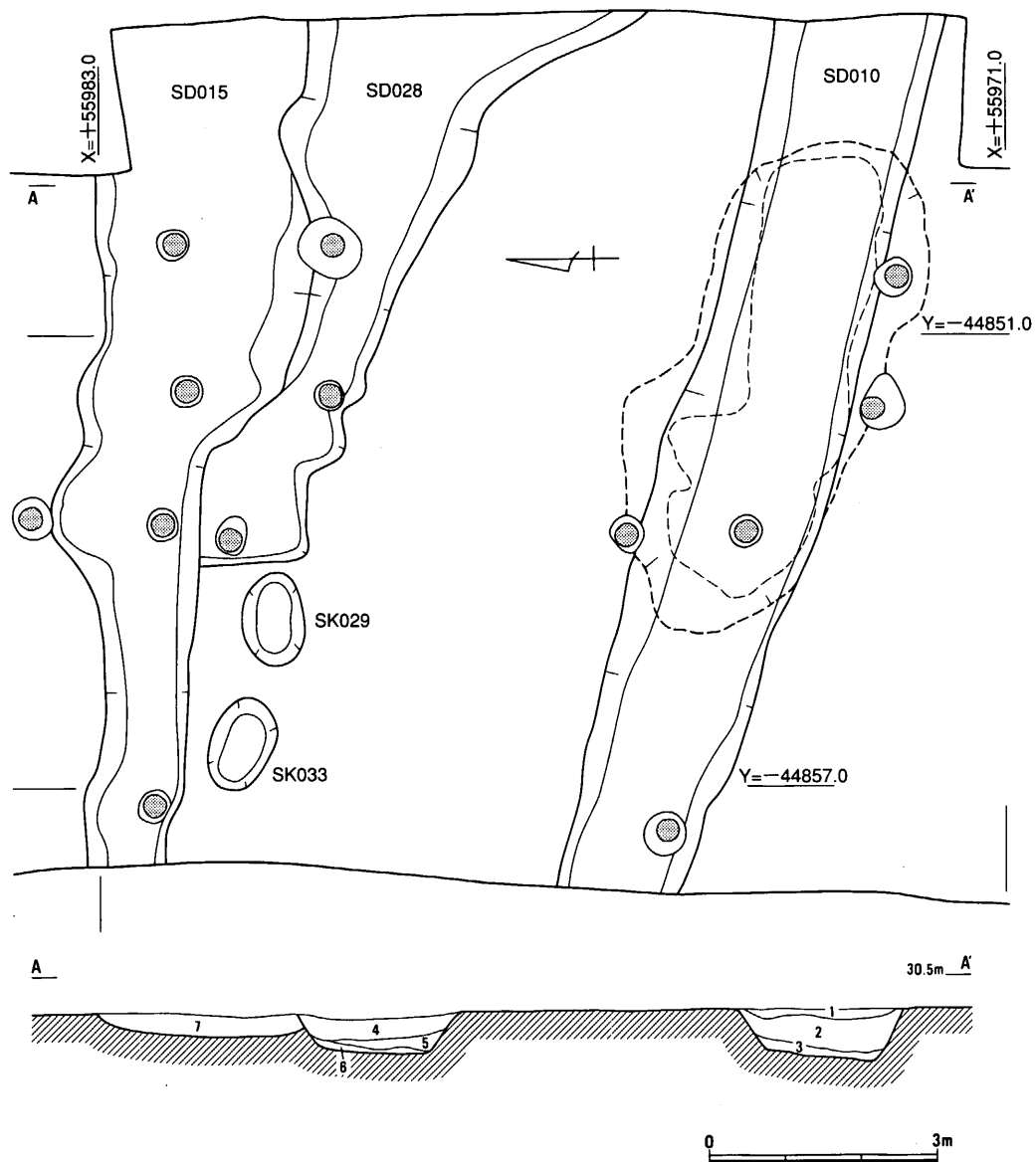
調査区内のやや北側、N3からO6区にわたって東西に走る溝である。幅は1.6～2.2m、長さ12.1mの規模を有し、走向は中軸線でN-105°-Eを指向する。溝の中軸線と政庁南門中心点との距離は732.58～735.88m（平均値734.23m）を計測する。覆土は暗灰色土の薄層（層厚2～12cm）で流水性の堆積を示す砂層が入る。遺構底面（中軸線上）の標高は調査区西端で29.9m、東端では29.6mを測り、一部に凹凸が認められるものの、おおむね東側へ傾斜している。暗灰色土を除去すると、N3区からO5区の範囲で土坑を検出した。この土坑は調査時から上層溝と同一の遺構として取り扱っている。幅3m、長さ7m、深さ0.4～0.8mの規模を有し、主軸方位は上層溝と同方向である。覆土は人為的埋め土と考えられる暗黄褐色土（黄褐色粘土ブロックと暗褐色土ブロックからなる）と、下層の自然堆積と考えられる暗褐色砂で構成される。遺構の壁は部分的にオーバー・ハングしており、上記埋め土が充填されていた。遺物は各土層ともにⅢ期を主体とする。

212S D015（第5図、図版2）

212S D010に対する北側側溝にあたる。遺構確認時は1条の溝と判断したが、調査中に重複関係にある2条の溝であることが判明した。本遺構は溝212S D028に切られる。規模は幅1～2.8m、長さ12.1m、深度は20～30cmを有し、走向は中軸線でN-95°-Eを指向する。溝の中軸線と政庁南門中心点との距離は726.08～735.90m（平均値726.49m）を計測する。遺構底面（中軸線上）の標高は調査区西端で29.75m、中央部で29.52m、東端では29.55mを測り、調査区中央部が若干低いものの、おおむね東側へ傾斜している。覆土は暗黄褐色土の単層で出土した遺物はⅢ期を主体とする。

212S D028（第5図、図版2）

調査区北側で検出した溝であり、溝212S D015を壊して構築される。遺構の西側はQ5区



- | | | |
|----------|-------------|----------|
| 212SD010 | 212SD028 | 212SD015 |
| 1層 暗灰色土 | 4層 黄褐色ブロック土 | 7層 暗黄褐色土 |
| 2層 暗黄褐色土 | 5層 黒褐色土 | |
| 3層 暗褐色砂 | 6層 暗灰色土 | |

第5図 212SK029・033・SD010・015・028実測図（1/100）

付近で収束し、その先は土坑212 S K 029と212 S K 033が連なっている。一方調査区東側では遺構南壁が南に向かって大きく湾曲する。検出部分での規模は幅1.4～4.5 m、長さ7.2 m、深度は約50 cmを有し、走向は中軸線でN - 108° - Eを指向する。溝の中軸線と政庁南門中心点との距離は727.83～730.18 m（平均値729.005 m）を計測する。遺構底面（中軸線上）は東側へ傾斜している。遺物はⅫ期～ⅩⅢ期を主体とする。

212 S K 029（第5図）

調査区の北側、Q 5区での発見である。平面プランは主軸方位をほぼ東西に持つ長楕円形を呈し、長軸1.3 m、短軸0.8 m、深度0.1 mを測る。覆土は黒褐色土の単層であり、出土した遺物はⅫ期を主体とする。

212 S K 033（第5図）

調査区の北側、Q 6区での発見である。平面プランは主軸方位をN - 65° - Wに持つ長楕円形を呈しており、長軸1.25 m、短軸0.8 m、深度0.1 mを測る。本遺構の平面形・規模は212 S K 029に近似する。覆土は暗灰色土、暗褐色土からなり、遺物はⅥ期を主体とする。

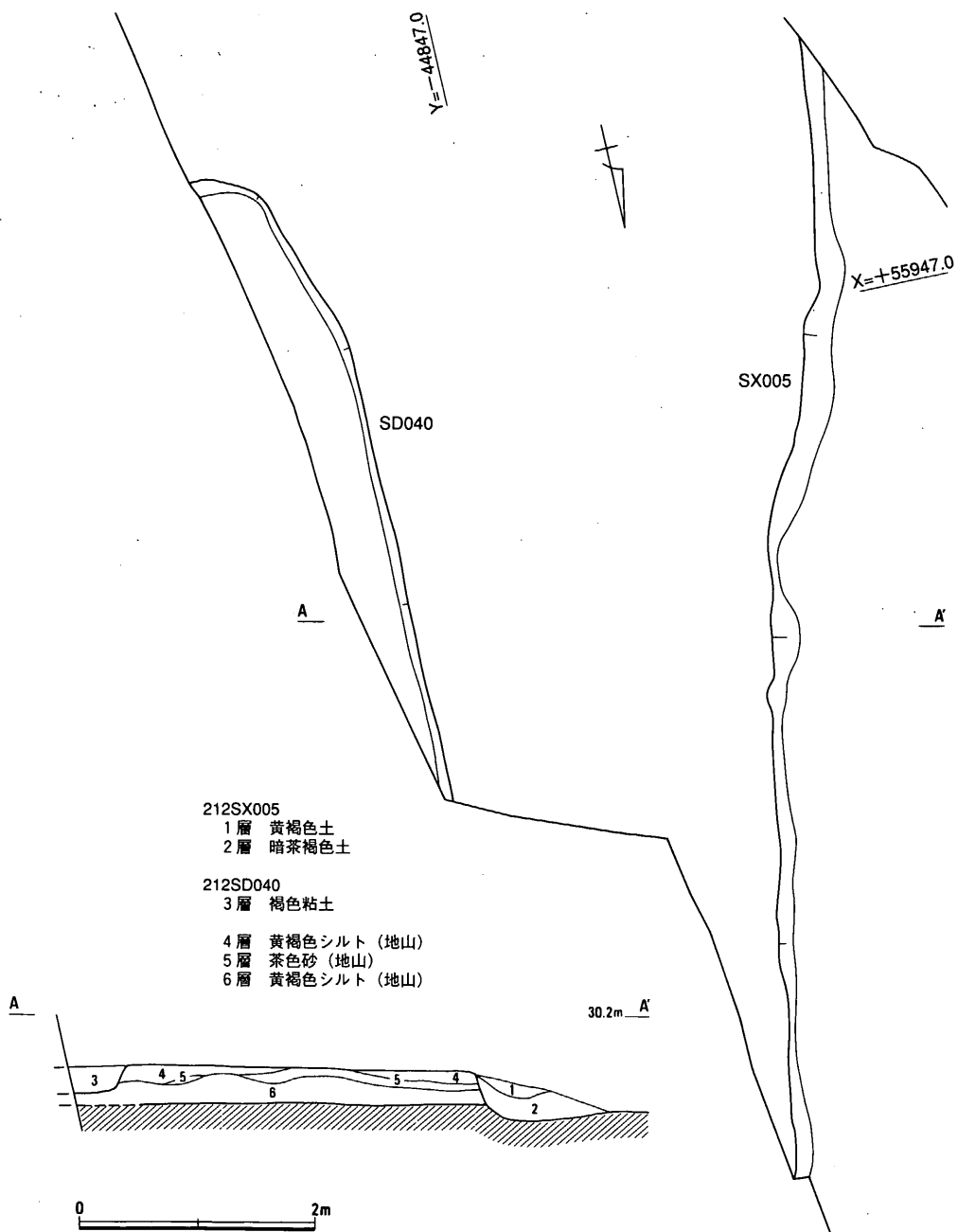
2) 溝

212 S D 031（図版3）

調査区北端のT 4からS 6区にかけて検出された溝である。井戸212 S E 035に切られており、遺構の東西はいずれも調査区外へと延びている。方向はやや蛇行しつつもほぼ東西に走行している。また、溝の中軸線と政庁南門中心点との距離は719.98 mを計測する。遺構の幅は0.6 m、深度は0.4 mを測り、溝の断面形は逆台形を呈する。覆土は暗灰色土の単層である。遺物はⅫ期を主体とする。

212 S D 040（第6図、図版3）

調査区南側のE～F 2区に位置し、拡張調査を行った際に検出をした。遺構南側はE 2区内で収束している。また、遺構東側及び北側は調査区外に延びており全容は不明であるが、主軸方位は遺構西肩で座標北を指す。溝の任意中点と政庁南門中心点との距離は760.93 mを計測する。また、溝の西肩と政庁中軸線との距離は15.25 mを測る。現代の水田によって削平され、掘り込みは浅く0.2 mを計測する。覆土は滞水を示す褐色粘土の単層である。遺物は平安時代の土師器・須恵器の細片を微量検出している。本遺構は検出された位置並びに方向から朱雀大路に関わる施設の可能性が考えられる。



第 6 図 212SD040・SX005実測図 (1/60)

3) 井戸

212S E001 (第7図)

調査区南側H4区で検出された。遺構の上半は旧市営住宅の浄化槽によって破壊されており、遺存状態は悪い。さらに浄化槽基礎の厚いコンクリートに阻まれ、井戸底面まで調査を行うことができなかった。確認し得た深度は0.9mである。遺構は直径1.4mの規模を有する円形の井戸と考えられ、土層は上層より褐色土、明灰褐色土が堆積していた。出土した遺物は細片のみであり、時期決定資料に乏しいが、おおむね平安時代中期頃の所産と考えられる。

212S E003 (第7図)

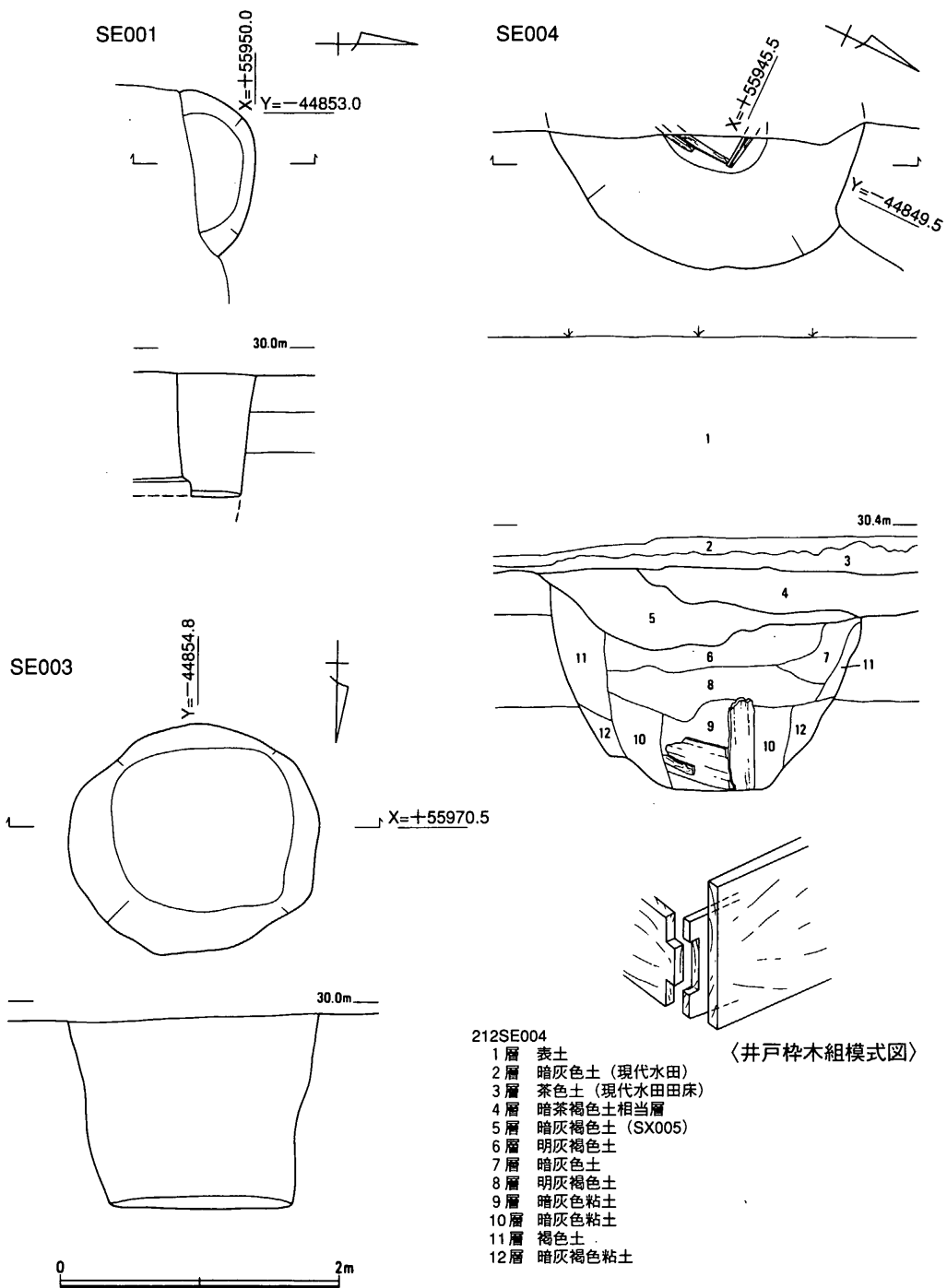
調査区中央やや北側のM5区で検出したもので井戸212S E008を切っている。掘り方の平面プランは東西1.8m、南北1.6mの不整円形を呈しており、深度1.4mを測る。土層は上層から黄褐色ブロック土、暗褐色土が堆積しており、これを除去すると方形の井戸枠痕が検出されたが、枠材は遺存していなかった。井戸枠内覆土は上層より黒色土、黒褐色土が堆積している。暗褐色土から出土した遺物はⅫ期を主体とする。

212S E004 (第7図、図版4)

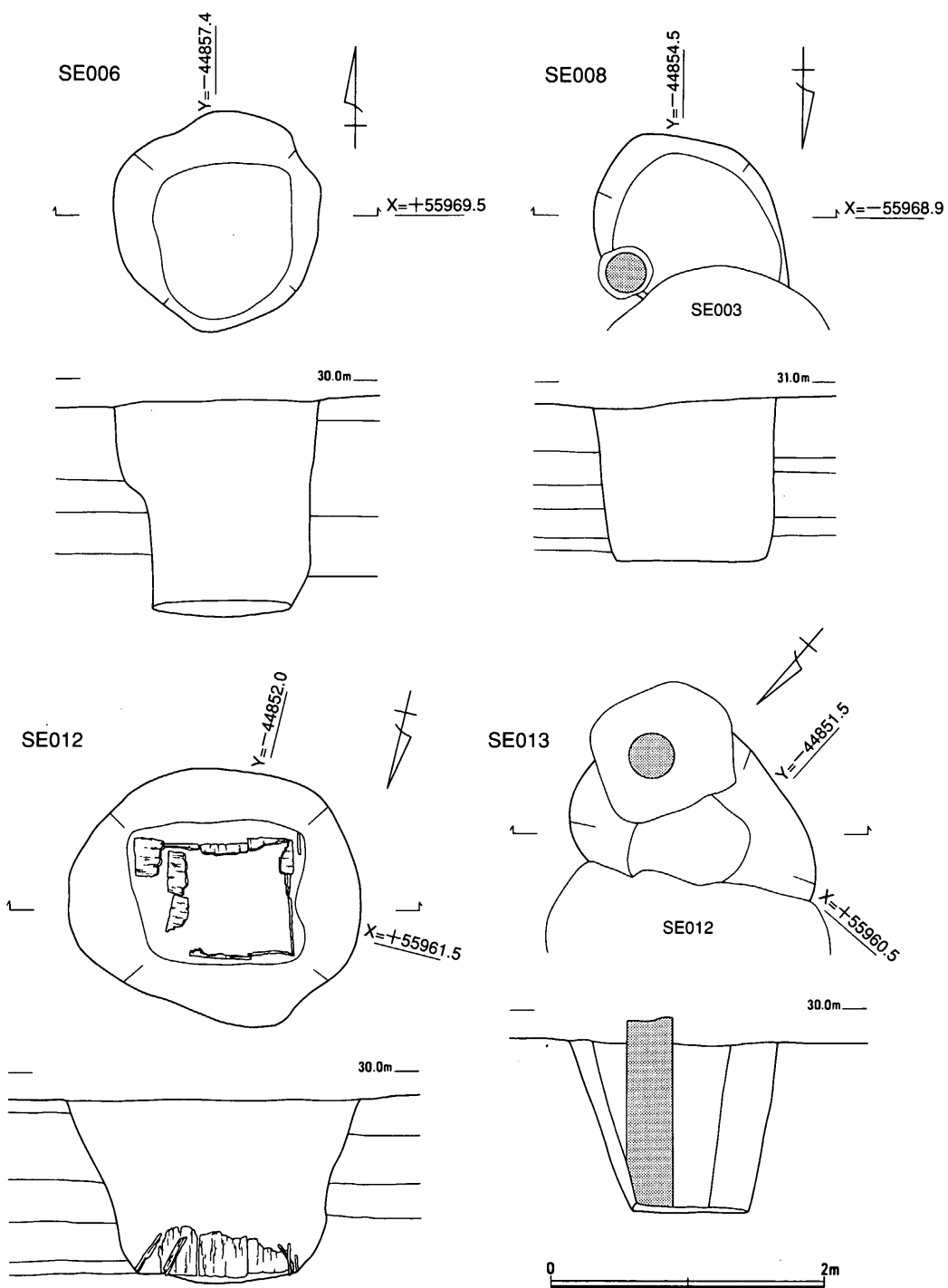
調査区の南側E3区で検出されたものである。遺構の半分以上が調査区外にあるものと推定され、且つ上部は段状遺構SX005に切られており、全容は明かでないが、大略直径2.5mの規模を有する円形の井戸であったと想像される。明灰褐色土、暗灰色土及び裏込の褐色土を除去すると板材を組み合わせた方形の井戸枠の内2辺を検出した。井戸枠の主軸方位は座標北を指す。井戸枠の組み方は模式図に示したとおりであり、井戸枠内の覆土は暗灰色粘質土の単層であった。明灰褐色土から出土した遺物はⅨ期を主体とする。

212S E006 (第8図)

調査区中央の西端にあたるM6区内で検出した井戸であり、土坑212S K007を切って構築されている。掘り方の平面プランは東西1.5m、南北1.6mの不整円形を呈しており、深度は1.5mを測る。土層は上層より灰褐色土、暗褐色土が堆積しており、これを除去すると方形の井戸枠と推定される土色差が確認され、西側から枠材の一部と考えられる炭化材が検出されている。井戸枠内覆土は暗褐色砂礫である。1辺0.8mあまりの規模であったが、湧水のため記録にまで至らなかった。暗褐色砂礫から出土した遺物はⅫ期を主体とする。



第7図 212SE001・003・004実測図 (1/50)



第 8 図 212SE006・008・012・013 実測図 (1/50)

212S E008 (第8図)

調査区中央部付近M5区での検出である。基礎パイルと井戸212S E003に北側が壊されているがほぼ円形と解される形状である。平面プランは東西1.4m、南北1mの規模を有し、深さは1.2mを測る。覆土は上層より暗褐色土、灰褐色土の順で堆積していた。本址からは井戸枠等の施設は検出されなかった。灰褐色土から出土した遺物はⅫ期を主体とする。

212S E012 (第8図、図版5)

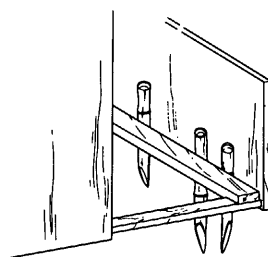
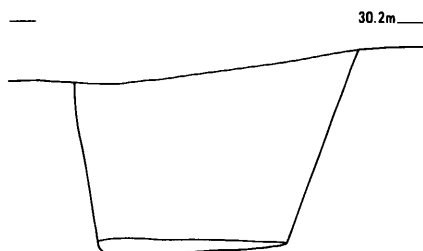
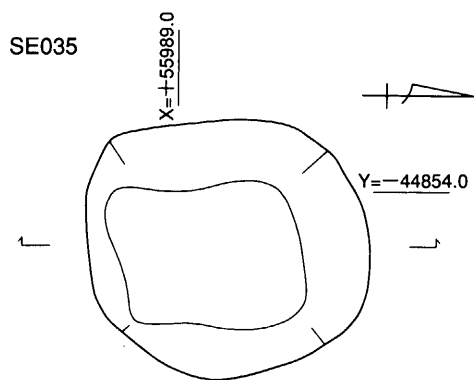
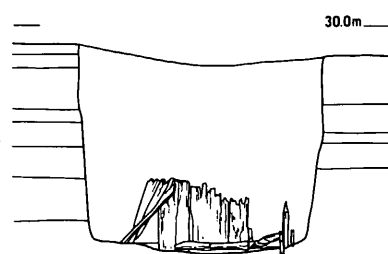
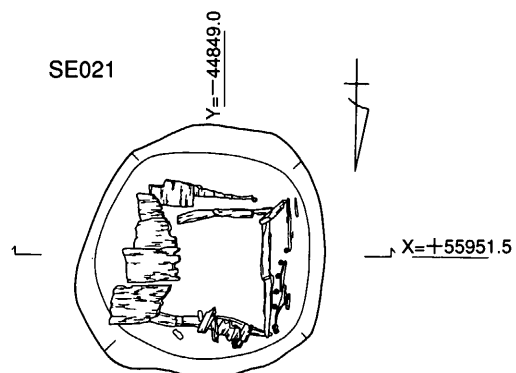
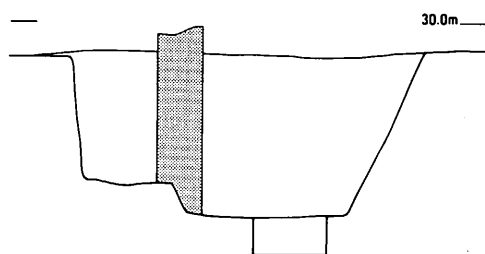
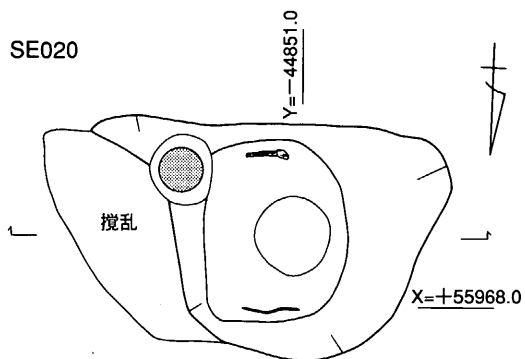
調査区の中央部やや南側J4区での検出で、平面プランは東西にやや長い略円形である。東西2.15m、南北1.8～1.9mの平面プランを有し、深さは1.3mの規模を有する。上層より暗褐色土と裏込めの明褐色土を除去すると板材を用いた方形の井戸枠が検出された。枠は底辺20～50cmを測る柱目板材を立てただけの単純な構造である。井戸枠内覆土は上層より灰色粘土・暗褐色粘土の順で堆積している。暗褐色土から出土した遺物はⅩ期を主体とする。

212S E013 (第8図)

J4区で検出した井戸212S E012に北側を切られる井戸である。さらに南東部を基礎パイルが破壊しており、遺存状態は悪い。本遺構は当初、2基の重複関係を持つ井戸という認識のもと、S-13とS-14の遺構名を付与し調査を行ったが、その後の検討の結果、同一の遺構として取り扱うこととした。S-14(暗褐色土)は212S E012の裏込め土と考える。平面形態は南北約1.8mを測る円形を呈していたと推察される。深さは1.25mを測り、覆土は上層より灰褐色土、暗褐色土、暗灰色土が堆積していた。これらの覆土を除去し底面に至ったが井戸枠等の施設は遺存していなかった。遺物はⅤ期を主体とする。

212S E020 (第9図、図版6・7)

調査区の中央部L4区に位置する井戸であり、東側を基礎パイルによって大きく壊されている。平面プランは東西1.8m、南北1.6mの不整円形を呈し、深度は1.35mを測る。覆土は上層より暗褐色土、暗灰褐色土が堆積しており、これを除去すると方形の掘り方底面があらわれ、井戸枠の残存と考えられる木片が西側を除いて遺存していたが、取り上げ時に損なわれた。また、底面中央部やや西側からは直径0.5mほどを測る円形の水澄しを検出したが、材は遺存していなかった。覆土は暗褐色土、暗灰褐色土、暗灰色粘土である。出土した遺物はⅩ期を主体とする。



〈井戸枠木組模式図〉



第9図 212SE020・021・035実測図 (1/50)

212S E021 (第9図、図版6)

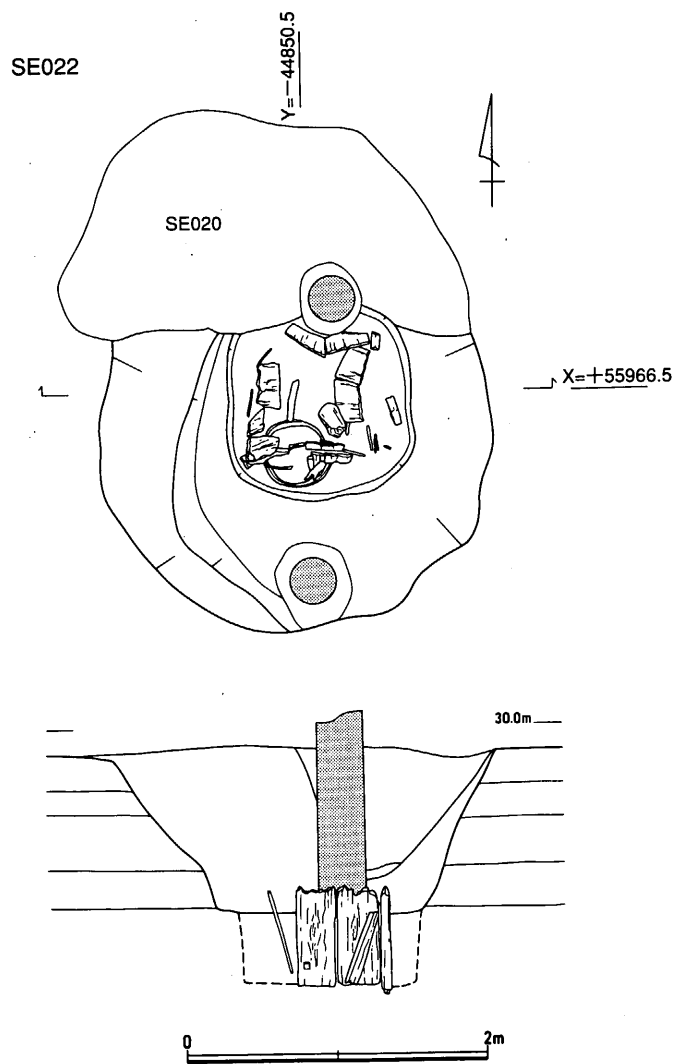
調査区南側のG3区で検出した井戸であり、平面プランは直径1.6mのやや歪んだ円形を呈し、深度は1.3mを測る。覆土は井戸枠が検出されるまで黒褐色土が堆積していた。井戸枠は1辺0.9m～1mの方形を呈しており、主軸方位は座標北を示している。板材は基本的に底面に掛け渡した横桟によって固定されているが、井戸枠西側は横桟と板材の間に直径4cm程度の竹杭を6本打ち込んで枠材の固定を図っていた(模式図参照)。井戸枠内覆土は上層より黒灰色土、灰色粘土が堆積していた。裏込めは黄褐色土が堆積する。黒灰色土から出土した遺物はⅢ期を主体とする。

212S E022 (第10図、図版7)

調査区中央部やや南側のL3・4区に位置する井戸である。北側は井戸212S E020と基礎パイルに切れ、南側も基礎パイルに一部破壊されているが、本来は直径2.5m程の円形を呈していたものと解される。深度は1.6mを測る。覆土は上層より暗褐色土、暗灰色土、灰色粘土及び裏込めの暗黄褐色土が堆積しており、これらを除去すると方形の井戸枠が検出された。井戸枠は四辺に板材を立て、四隅に杭を打ち込み固定していたものと考えられる。井戸底面には径47cmほどの曲物を利用して水澄しが設置されていた。覆土は上層より灰色砂礫、暗灰色砂礫が堆積していた。遺物はⅣ期を主体とする。

212S E035 (第9図)

調査区の北端S・T5区で検出した井戸であり、溝212S D031を壊して構築される。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は東西1.7m、南北1.9mを測る。深度は1.3mである。覆土は上層より黄褐色ブロック土、暗褐色土が堆積していた。遺物はⅥB期を主体とするが、周辺遺構からの混入と考えられる。



第10図 212SE022実測図 (1/50)

4) 土 坑

212SK002 (第11図)

調査区の南側G 4 区で検出した土坑であるが、遺構の北側約1/2は旧市営住宅の浄化槽によって破壊されており、遺存状態は悪い。確認時の平面プランから本来は直径1.2mほどの円形を呈していたものと理解される。深度は0.7mを測り、断面形は漏斗状を呈する。覆土は黒褐色土の単層である。出土した遺物が細片のため時期決定に乏しいが、おおむね平安後期の所産と考えられる。

212SK007 (第11図)

調査区中央の西端にあたるL・M 6 区で検出した土坑で、遺構南東側を井戸212SK006に切られ、西側は調査区外に延びている。平面プランは長楕円形を呈していたものと解され、遺存状態の良好な南東－北西方向では2mを測る。深度は0.47mを測り、断面形は楕円状を呈する。覆土は上層より黒褐色土、黄褐色土が堆積していた。遺物はⅫ期を主体とする。

212SK016 (第11図)

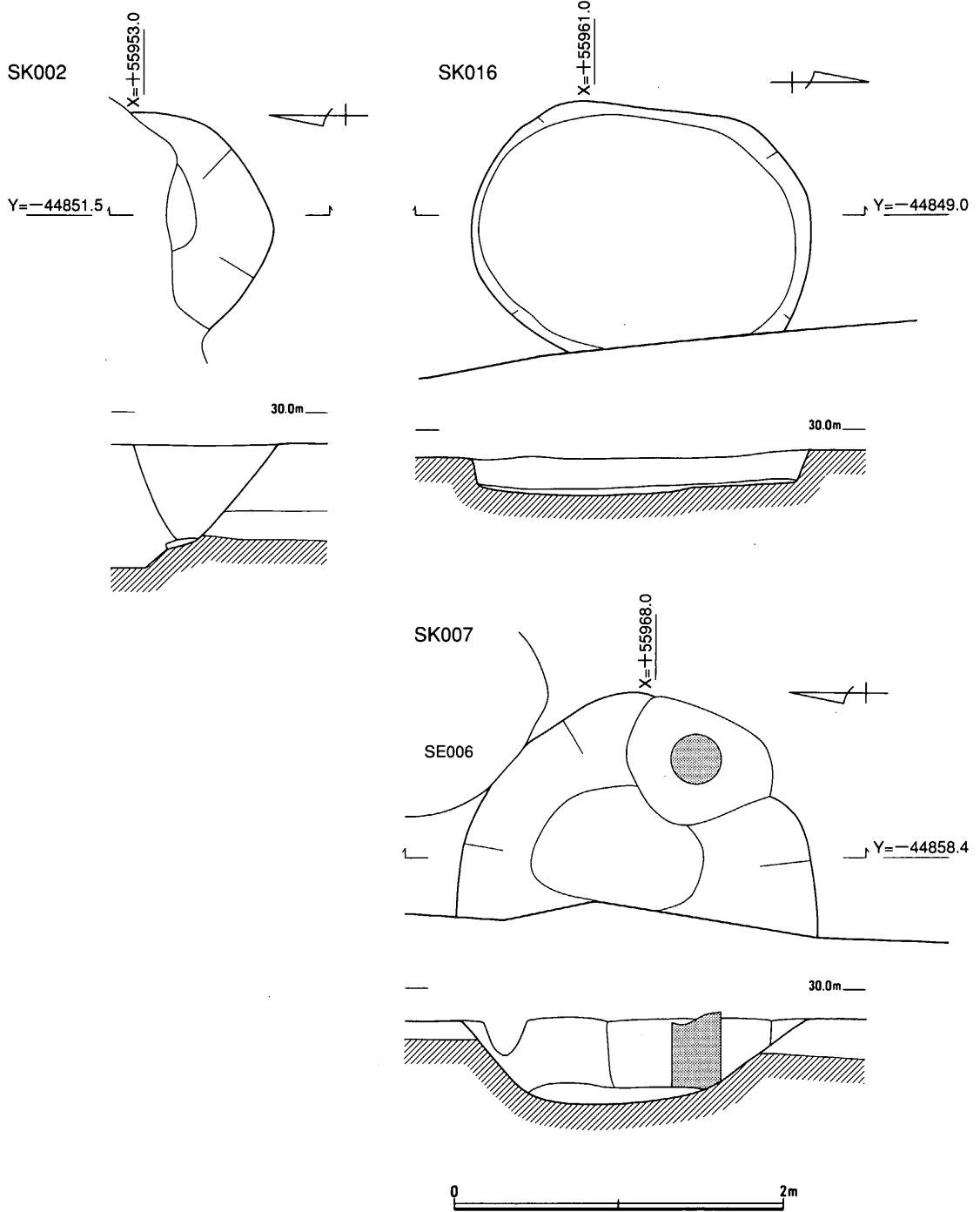
調査区南側東端のJ 3 区で検出した土坑で、遺構の東側は調査区外に延びているが、ほぼ全容は把握可能である。平面プランは南北にやや長い不整形円形を呈しており、南北2m、東西1.5mを測る。深度は浅く0.2mで、覆土は暗褐色土の単層である。出土した遺物はⅫ期を主体とする。

212SK017 (第12図)

調査区中央部のP 4 区で検出した。道路南側側溝212SD010と北側側溝212SD015及び212SD028に挟まれた空閑地（道路面）上に位置し、平面プランは主軸方位が南北を指す長楕円形を呈する。長軸2.3m、短軸（東西）1.7m、深度0.7mを測り、覆土は黒褐色土、黄褐色粘土からなる。出土した遺物はⅫ期を主体とする。

212SK018 (第12図)

調査区の中央部北側M 4 区で検出した土坑で、平面プランは長楕円形を呈する。主軸方位はN-50°-Eを指し、規模は長軸1.5m、短軸は1mを測る。深度は0.2mである。覆土は暗褐色土の単層である。出土した遺物はⅦ期を主体とする。



第11図 212SK002・007・016実測図（1/40）

212S K019 (第12図)

調査区のやや南側K 4・5区で検出された土坑で、平面プランは東西に主軸を持つ長楕円形を呈する。規模は長軸1 m、短軸で0.8 mを測る。深度は0.7 mである。覆土は上層より暗褐色土、暗灰褐色土からなり、暗褐色土中には廃棄に伴う礫、瓦、陶磁器等が数多く含まれる。これらの遺物はXIV期を主体とする。

212S K023 (第12図)

調査区北側R・S 6区で検出した小規模な土坑である。平面プランは直径0.9 mほどのほぼ円形を呈しており、深度は浅く6 cmほどとなる。覆土は明褐色土の単層である。遺物は土師器の供膳具と煮炊具の細片や須恵器細片を検出したが、これらはおおむね平安時代後期以降の所産と考えられる。

212S K024 (第12図)

前述の土坑212S K023の東側S 5・6区に位置する。平面プランは主軸方位N-82°-Eを指す長楕円形を呈し、長軸1.6 m、短軸0.6 mを測る。深度は浅く16 cmであり、覆土は明褐色土の単層である。遺物はXII~XIII期を主体とする。

212S K025 (第13図、図版8)

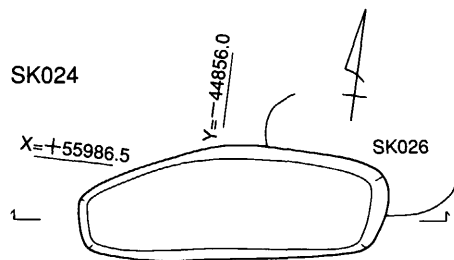
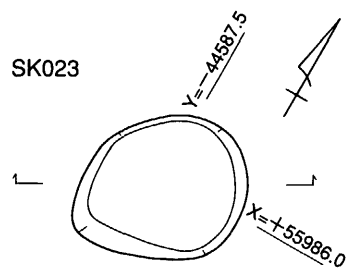
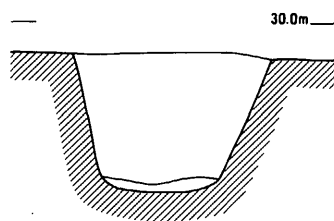
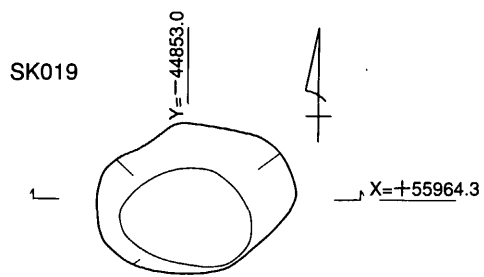
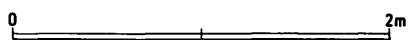
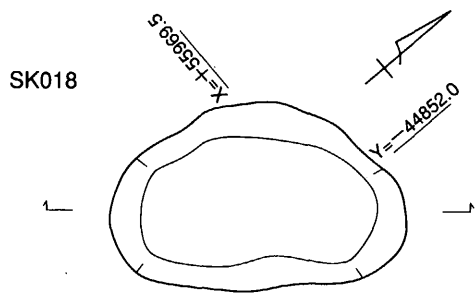
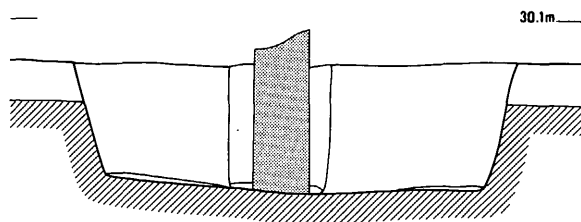
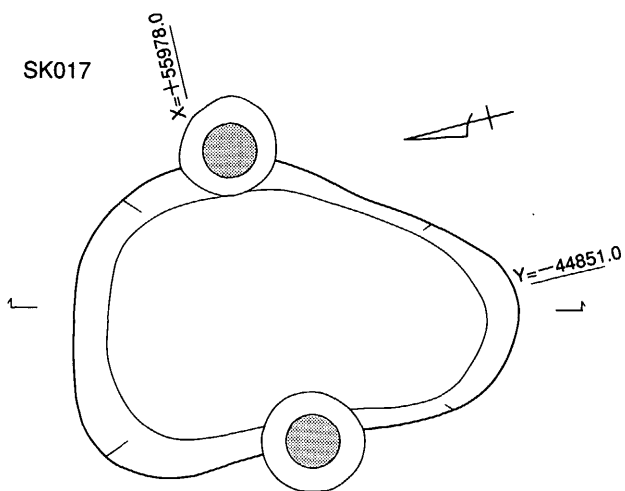
調査区北側のR・S 3・4区で発見した比較的規模の大きな土坑である。遺構の南側を溝212S D015が切っており、また遺構の大部分が調査区の東側に存在すると考えられ、全容は明らかでない。検出部分についての規模を概観すると、東西3.1 m、南北6 m、深度は0.9 mを測り、遺構の南側立ち上がりはなだらかに立ち上がる。覆土は黄褐色ブロック土からなる人為的埋土で構成される。遺物はV~VI A期を主体とする。

212S K026 (第13図)

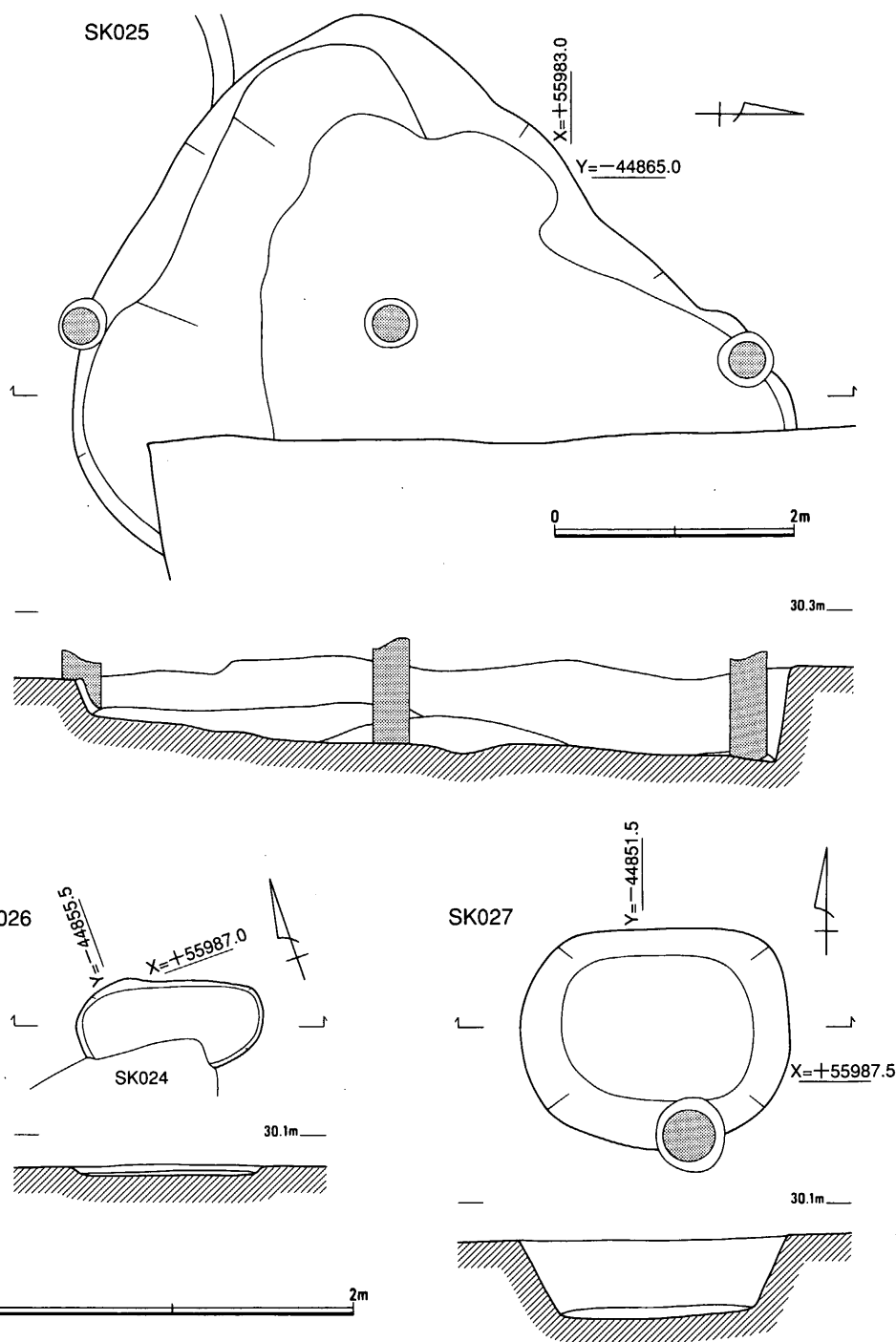
調査区北側のS 5区で検出した土坑である。遺構北西側を土坑212S K024によって切られているが、遺構の全容は把握可能である。平面プランは主軸方位N-110°-Eを指す長楕円形を呈し、長軸1 m、短軸0.5 m、深度6 cmを測る。本遺構は形態・規模ともに212S K024と近似している。覆土は黄褐色ブロック土の単層からなる。遺物はXII期を主体とする。

212S K027 (第13図、図版8)

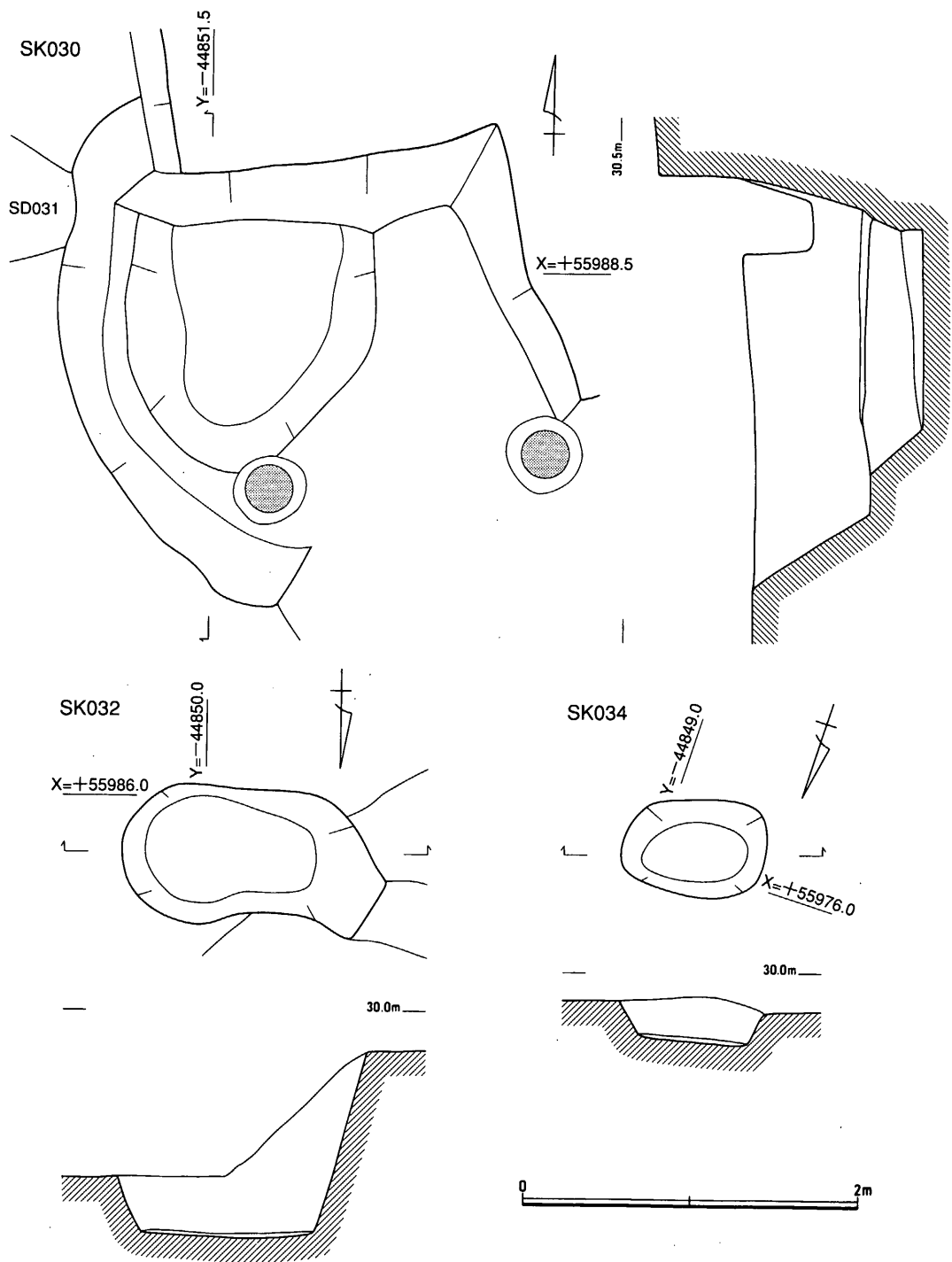
調査区の北側S 3・4区での発見である。平面プランは南北1.2 m・東西1.5 mの円形、断



第12図 212SK017~019・023・024実測図 (1/40)



第13図 212SK025～027実測図（1/40・1/60）



第14図 212SK030・032・034実測図（1/40）

面形は楕円状を呈している。深度は0.4mを測る。覆土は上層より黒褐色土、暗褐色土からなり、廃棄に伴う遺物を多量に包含している。これらの遺物はⅥB期を主体とする。

212S K030 (第14図、図版8)

調査区北側S3・4区での検出である。遺構は土坑212S K025及び212S K032、溝212S、D031、212S K027に切られている。したがって平面形は明らかでない。深度は1mを測る。覆土は上層より灰褐色土、暗灰褐色土で構成されている。遺物はⅤ期を主体とする。

212S K032 (第14図)

調査区北側S4区での検出である。遺構南側を土坑212S K025に切られている。平面プランはN-96°-Eに主軸を持つ長方形を呈しており、長軸は1.5m、短軸0.8m、深度は比較的深く、1.2mを測る。覆土は上層より黄褐色ブロック土と暗灰色土からなる。遺物はⅥA期を主体とする。

212S K034 (第14図)

調査区中央部東側のO3区での検出である。前述の土坑212S K017同様、道路側溝間に位置する。平面プランは東西に主軸方位を持つ長楕円形を呈しており、長軸は0.9m、短軸0.6m、深度0.2mを測る。覆土は暗褐色土の単層である。遺物は土師器、須恵器の供膳具を主体とする細片が微量検出された。これらはおおむね奈良時代後期以降の所産と考えられる。

5) その他の遺構

212S X005 (第6図、図版9)

調査区南側E～G3区で発見した段状を呈する遺構である。遺構南側は井戸212S E004を切って構築している。検出された長さは15.5mを測り、主軸方位はN-13°-Eを指す。段の任意中点と政庁南門中心点との距離は759.43mを計測する。また、政庁中軸線との距離は18.14mを測る。東側の高位部は後世の削平を受け平坦になっており、この高位部と西側地山面（灰色砂礫）との高低差は0.3mを測る。段を被覆していた土層は包含層暗茶褐色土を主体としており、高位部は黄褐色シルト砂礫の自然堆積土で構成される。平坦面上を精査したが、拡張部分の調査において溝212S D040を確認した。これは段から東へ約2.5mの距離である。遺物は暗茶褐色土から出土しておりⅣ期以降が主体を占める。本遺構は朱雀大路と有機的に関係する施設と推定される。

(3) 出土遺物

1) 道路出土遺物

212S D010出土遺物 (第15図、図版10)

遺物は暗灰色土層、暗黄褐色土層、暗褐色砂層の4層に分けて取り上げた。以下、各層ごとに報告する。

暗灰色土層

緑釉陶器

碗(1) 高台と体部の一部を残す破片資料。現存高は1.4cmを測り、高台径は9.6cmで復元される。胎土は灰白色から淡黄色を呈し、やや軟質の焼成である。釉は緑色を呈するが光沢が失われ、剥落も著しい。黒笹K90号窯式併行の製品と考えられる。

碗または皿(2) 体部の破片資料で碗か皿か峻別しがたい。胎土は浅黄色を呈して軟質の焼成である。釉は薄緑色を呈するが、剥落が顕著で一部にしか残存しない。猿投窯の製品と考えられる。

青磁

皿(3) 高台径が7.3cmで復元される底部破片資料。高台は低く、外面は垂直に、内面は斜めに削る。胎土は灰色を呈するが部分的に酸化焰焼成気味となり橙色に発色し、やや軟質である。また、胎土中には黒色微粒子を含む。釉は透明で半光沢の灰オリーブ色を呈し、細かな貫入が入る。施釉は残存部全面に施されるが高台畳付部分は剥落している。目跡が見込みに1箇所、高台内に2箇所残る。越州窯系青磁皿Ⅲ類と考えられる。

石製品

平玉石(4) 全体によく磨かれ偏平な円形に加工している。石材は泥岩質で小豆色を呈しており、2.1×2cm、厚さ0.9cmを測る。

暗黄褐色土層

緑釉陶器

皿(5、6) 5は口縁部、6は底部の破片資料。6は円盤高台に仕上げられる。胎土は両者とも淡黄色を呈し、釉は5が薄緑色、6が緑色に発色するが器面の剥落が顕著である。両資料は京都産と考えられる。

灰釉陶器

碗(7) 口径16.2cm、器高5.1cm、底径7.8cmに復元される。器内外面に回転ナデが行われる。見込みに直径6.8cmを測る円形の重ね焼き痕、高台下端には他器種の釉が溶着する。高台は形骸化が進んでいる。また、外面には降灰が観察される。東山H105窯式の製品。

壺（８） 高台径9.9cmに復元される。内面は回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、底部は回転ヘラケズリ後に幅広の高台を貼り付ける。灰色を呈し、石英を含んだ胎土で焼成は良好である。内面には灰オリーブ色を呈する自然釉が厚く降り掛かる。猿投窯の製品。

白磁

皿（９） 口縁部の破片資料。焼成不良により、口唇部の胎土が弾けて器形が歪んでいる。胎土は淡黄色を呈しやや軟質である。釉は浅黄色を呈し不透明で光沢が無い。Ⅲ－１類。

青磁

碗（１０） 高台径6.6cmに復元される越州窯系青磁の底部破片である。内面見込みに沈線一条巡らし、釉は胎土中に含まれる内容物の弾けによるピンホール状の剥離が見られる。Ⅲ－１類。

金属製品（１１） 銅製の飾り鋳の完形品。身部は断面四角形に鍛造して、先端を鋭利に造りだす。頭部は薄く打ち延ばし六角形に整形し、各対辺を結ぶ打刻が放射状に施され、花卉の意匠とする。頭部径1.1cm、長さ1.8cmを測る。

暗褐色砂層

土師器

皿（１２） 京都系土師器皿の口縁部破片。胎土は淡橙色を呈し、全面をナデ調整で仕上げる。口縁端部を短く内折する。

212 S D015出土遺物（第15図、図版11）

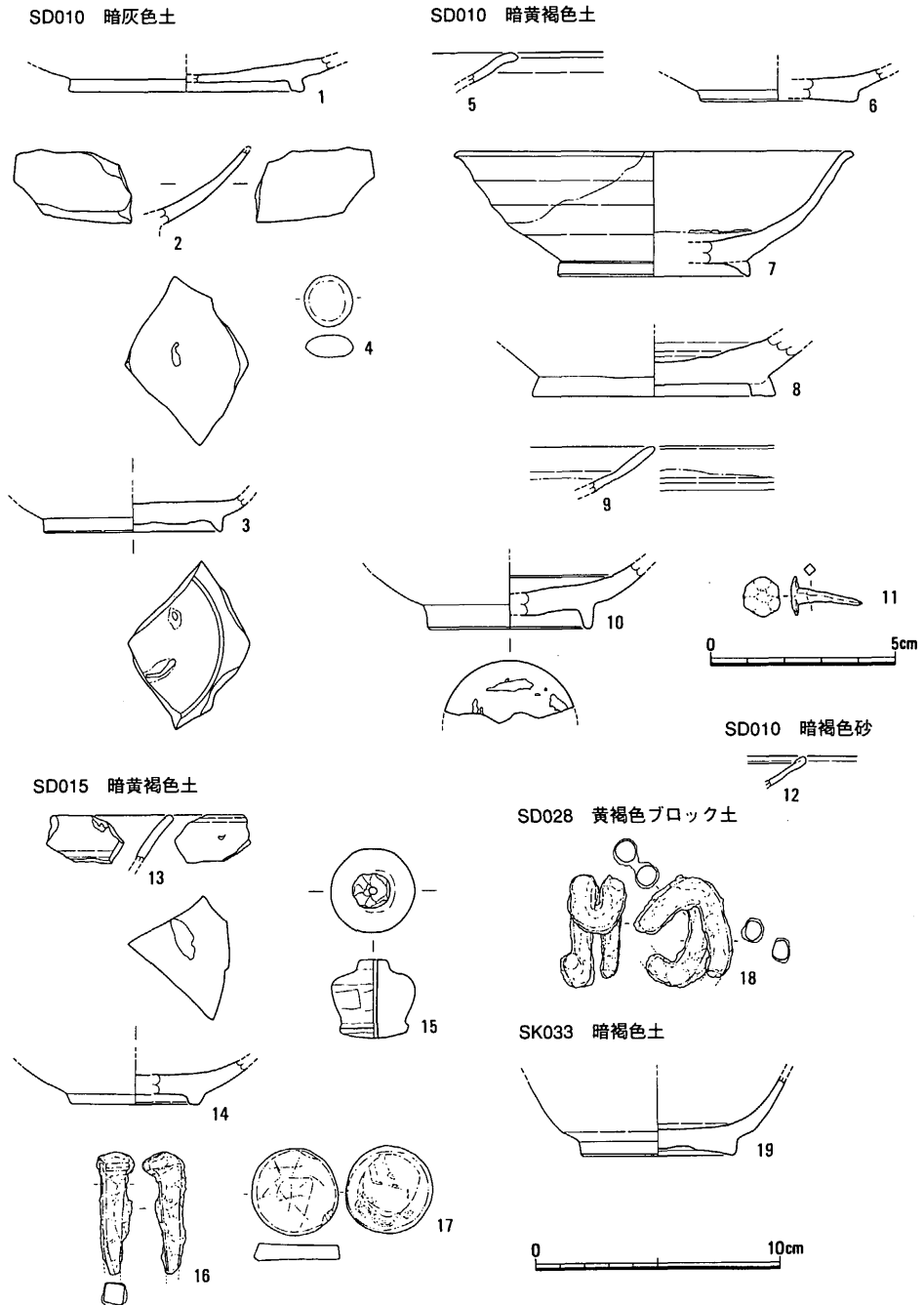
暗黄褐色土層

二彩陶器

碗（１３） 口縁部破片であり、胎土は浅橙色を呈し、軟質な焼成である。水平方向のミガキ後、光沢を持ち橙色に発色する釉と斑点状の緑釉が内外面に施釉される。釉には細かな貫入が入る。

青磁

碗（１４） 底径5.2cmに復元される越州窯系青磁の底部破片。胎土は灰色を呈し、白色粒子や黒色粒子を微量含む。釉はオリーブ灰色を呈し、高台畳付を除き比較的厚く施釉される。釉中には灰白色の物質が含まれ、やや発泡している。重ね焼き痕は見込みに１箇所残り、高台畳付内面際には離砂と思われる白色粒子が一つ付着する。未分類資料である。



第15図 212SD010・015・028・SK033出土遺物実測図（1/2・1/3）

土製品

不明土製品 (15) 土師質で胎土中に角閃石を微量含む完形品。胴部中位をヘラケズリした後に、全体にナデ調整を行い壺形の器形を作り出す。中心には直径 3 mm の孔が貫通する。

胴部最大径 3.4 cm、底径 2.8 cm、器高は 3.2 cm、重量は 30.20 g を測る。用途不明品。

金属製品

釘 (16) 鉄釘。先端部は欠損しており、現存長 5 cm を測るが、錆化が進んでいる。

円板 (17) 鉛製の鋳物と考えられる。全体に錆化し、乳白色を呈する。表裏面には線刻が施され、表面は「菊」であろうか、細かな刻線が不定方向に引かれる。裏面には径 2.3 cm の円が描かれる。直径 3.5 cm、厚さ 0.6 cm、重量は 61.32 g を測る。用途は不明である。

212 S D028 出土遺物 (第15図、図版11)

遺物は黄褐色ブロック土層、黒褐色土層、暗灰色土層の 3 層に分けて取り上げた。この内黄褐色ブロック土層出土遺物を報告する。

金属製品

鎖 (18) 径 8 mm 程度の鉄材を折り曲げた兵具 (兵庫) 鎖の一部であり、引きちぎられたように広がり、端部は欠損している。太刀の帯取としてはやや大きすぎ、おそらく馬具の一部と考えられる。

212 S K033 出土遺物 (第15図、図版11)

暗褐色土層

緑釉陶器

碗 (19) 体部下半から底部にかけて遺存する資料。幅広の高台を持ち、光沢を持つ緑色の釉を全体に施すが濃淡がある。胎土は須恵質である。現存高は 3.2 cm、口径は 6.2 cm に復元される。京都洛西の製品。

2) 井戸出土遺物

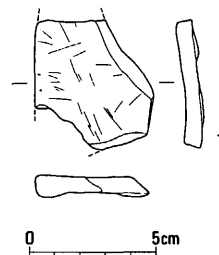
212 S E001 出土遺物 (第16図、図版11)

石製品

砥石 (1) 細粒花崗岩系の石材で、表面と両側面が研磨されており、裏面には自然面が残る。

全体に火熱を受けており、一部が赤変している。

現存長 5.1 cm、幅 4.7 cm、厚さ 0.5 ~ 0.9 cm を測る。



第16図 212SE001 出土遺物
実測図 (1/3)

212S E003出土遺物（第17図、図版11・12）

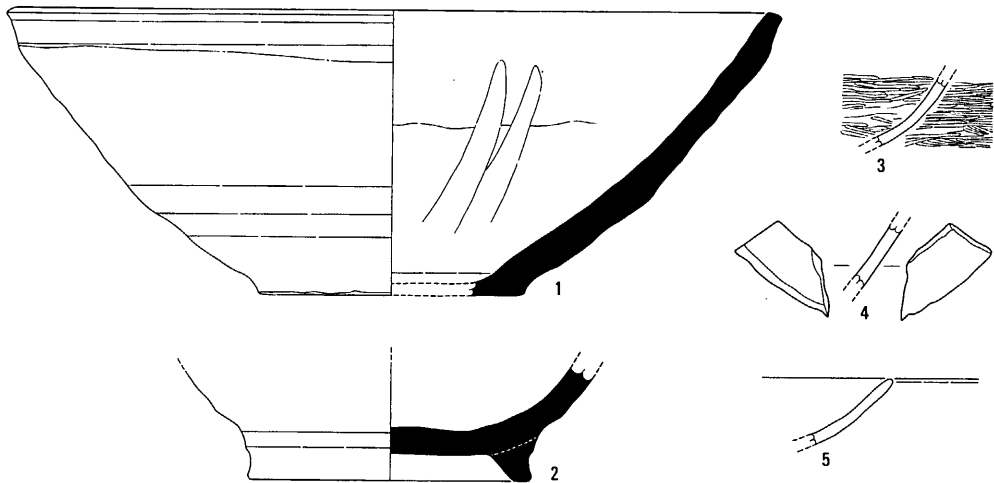
遺物は黄褐色ブロック土層、暗褐色土層、黒色土層、黒褐色土層の4層に分けて取り上げた。以下、各層ごとに報告する。

黄褐色ブロック土層

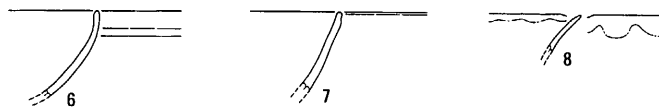
須恵質土器

捏鉢（1、2） 1は口縁から底部の資料で口径30.7cm、器高11.3cm、底径10.6cmに復元される。平底の底部から直線的に体部が立ち上がり、口縁端部は平坦に仕上げられる。底部は不定方向のナデ、体部内外面は回転ナデと縦位のナデ調整。胎土は灰色で石英粒を含み、焼成は良好。口縁部分は重ね焼きのため青灰色に発色する。体部内面中位以下の器面は使用に

黄褐色ブロック土



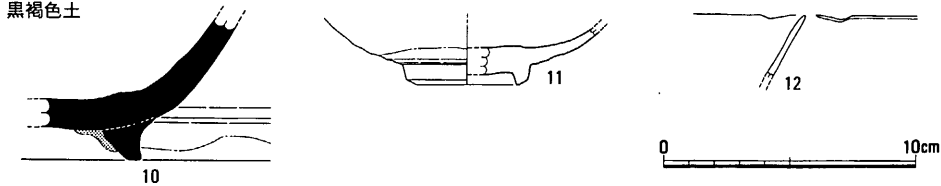
暗褐色土



黒色土



黒褐色土



第17図 212SE003出土遺物実測図（1/3）

よる磨耗が観察される。2は底部から体部下位の破片資料であり、高台径は11.2cmに復元される。器面をナデ調整した後に高台を接合し、内外を回転ナデ調整する。胎土は暗青灰色を呈し、焼成は良好。内面底部は使用による磨耗が認められる。

瓦器

碗（3） 体部の破片資料。内外面に丁寧で細かなヘラミガキを施す。胎土は明青灰色を呈し、軟質である。畿内系。

緑釉陶器

碗（4） 体部の破片資料。内外面に丁寧で細かなヘラミガキをした後、黄緑色に発色する釉を施す。胎土は灰色を呈する。猿投窯の製品と考えられる。

皿（5） 口縁から体部の破片資料。ミガキが施された器面に緑色の釉が薄く掛けられる。

土製品

焼土塊（R-006） 土師質を呈し、胎土中には石英粒とともに繊維質のスサを多量に含んでいる。器面は表面が橙色に発色し、裏面は黒変している。鍛冶炉等焼成施設の壁体と考えられる。

暗褐色土層

白磁

碗（6、7） 6、7ともに口縁部破片資料。6は内湾に立ち上がる器形を有し、体部外面口縁部以下はヘラケズリ、口縁部は横ナデを行う。胎土は灰白色で黒色微粒子を含み、白化粧は施されない。釉は黄白色に発色して光沢があり、細かな貫入が入る。Ⅱ-4a類。7は体部が直線的に立ち上がる器形と考えられ、胎土は乳白色を呈し、黒色微粒子を含んでいる。釉は明緑色に発色し、細かな貫入が入り、釉中に微小な気泡が観察される。本資料はXI類と考えられる未分類資料である。

皿（8） 外反気味に立ち上がる器形と考えられ、器厚は薄く口縁端部には輪花を有する。胎土は灰白色を呈する。釉は薄く白色に発色して光沢がある。口縁端部の内外面には釉垂れが見られ、この部分は黒色微粒子を含み青白色を呈する。未分類の資料である。

黒色土層

鉄製品

釘（9） 鉄釘。頭部は短く折り曲げられ、身部は屈曲変形し先端部は欠損する。錆化が進行している。現存長5cmを測る。

黒褐色土層

須恵質土器

捏鉢（10） 底部から体部下位の破片資料。器面をナデ調整した後に高台を接合し内外を回転ナデ調整する。胎土は暗青灰色を呈し焼成は良好。高台内外面は暗赤褐色に発色し、体部内面底部は使用による磨耗が認められる。

白磁

碗（11） 底部から体部下半にかけての破片資料で高台径4.8cmに復元される。胎土はやや灰色を帯び、体部下位まで施釉される。釉は白色不透明で大きな貫入が放物線状に入る。Ⅴ類あるいはⅥ類と考えられる。

青磁

碗（12） 口縁部の破片資料であり、口縁端部に輪花を有する。胎土は灰褐色を呈し、釉は薄く施釉され茶褐色に発色する。器面には細かな貫入が入る。越州窯系青磁Ⅲ－1b類と考えられる。

212S E004出土遺物（第18図、図版12・13）

遺物は7層に分層された土層の各層から出土したが、この内、明灰褐色土層、暗灰色土層、褐色土層から出土したものについて報告する。

明灰褐色土層

土師器

碗C 2（1） 口径14.6cm、器高6.3cm、底径8cmに復元される。体部外面中位以下はヘラケズリ調整が施され、器面には煤が付着する。やや古相の遺物である。

緑釉陶器

碗（2） 高台径6.2cm復元される破片資料で、幅広の高台は内側に向かって斜めにヘラケズリされ、橙色を呈する胎土に光沢のある緑釉を施釉する。京都系の製品と考えられる。

暗灰色土層

瓦類

平瓦（3） 文字瓦。「筑」の上半部が判読できる。Ⅵ－3類である。

褐色土層

須恵器

壺（４） 口径は16.2cmで復元される。頸部から口縁部内外面は回転ナデ、体部外面は平行タタキ、内面は指頭調整で仕上げられる。胎土は青灰色で堅緻。荒尾窯址群の製品と考えられる。

石製品

石鍋（５） 滑石製石鍋A群の耳を転用したもので、上面には径1.9cmの円形を呈する窪みが穿たれる。実測図正面には煤が付着する。用途不明品。

井戸枿材（第19図、図版14）

木製品

板材（11、12） 11は柾目に木取りされた板材の両端を鋸状工具によって凸形に切断したもので、片側側面は鋸状工具で直線的に製材される。表裏面は腐食し、表面にチョウナによる調整痕がわずかに認められる。長さ91.6cm、幅22.4cm、厚さ4cmを計測する。12は板目に木取りされた板材の両端を鋸状工具により凹形に切断したもので、11と組み合わされていた。表裏面とも腐食や剥がれがあるが、表面中央にはチョウナによる調整が観察される。裏面下位から側面には長さ14cmほどの炭化が残る。長さ90.6cm、幅23.2cm、厚さ2.4cmを計測する。11、12は両端部の作りに精粗の差がある。

角材（13） 横桟として上記11を外側から支えていた部材で、表面は腐食しており、調整は明らかでない。端部は凹形に切り込まれ、表面から側縁にかけ長さ4～5cmのホゾが2箇所穿たれる。長さ69.2cm、幅6cm、厚さ4.2～5.4cm測る。

212S E006出土遺物（第18図、図版13）

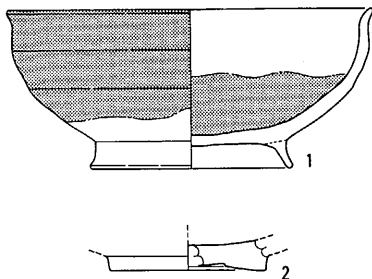
遺物は灰褐色土層、暗褐色土層、暗褐色砂礫層の3層に分けて取り上げたが、この内、暗褐色土層から出土したものについて報告する。

暗褐色土層

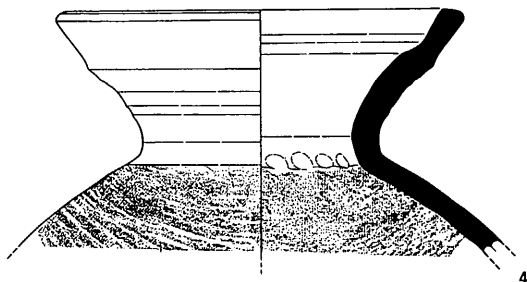
土師器

甕（６） 口径29cmに復元される。口縁部は折り返した後、内外面を横ナデする。外面はナデを行い。内面は口縁部直下に指頭圧痕を残し、下位はナデ後にハケ状工具で斜位のナデ調整が行われる。胎土は石英粒、小礫を多く含み橙色に発色する。

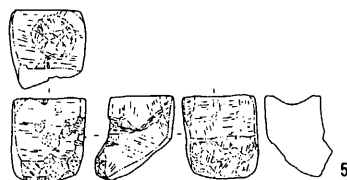
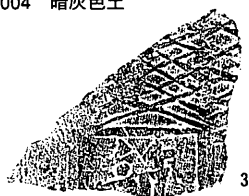
SE004 明灰褐色土



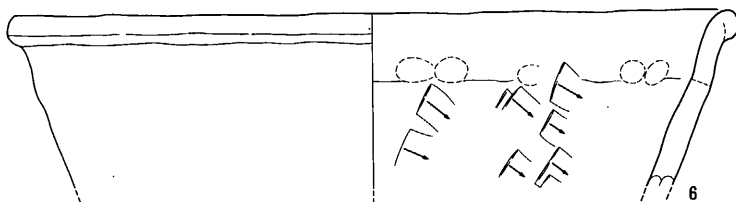
SE004 褐色土



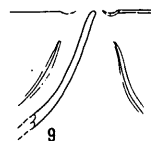
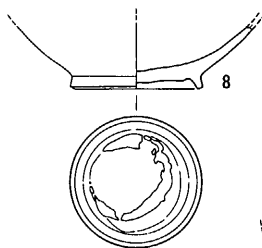
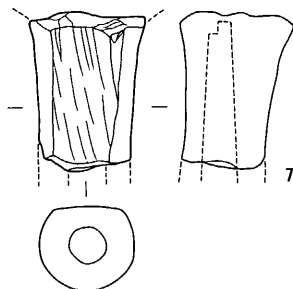
SE004 暗灰色土



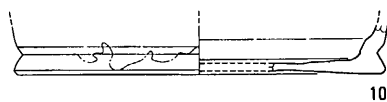
SE006 暗褐色土



SE008 暗褐色土

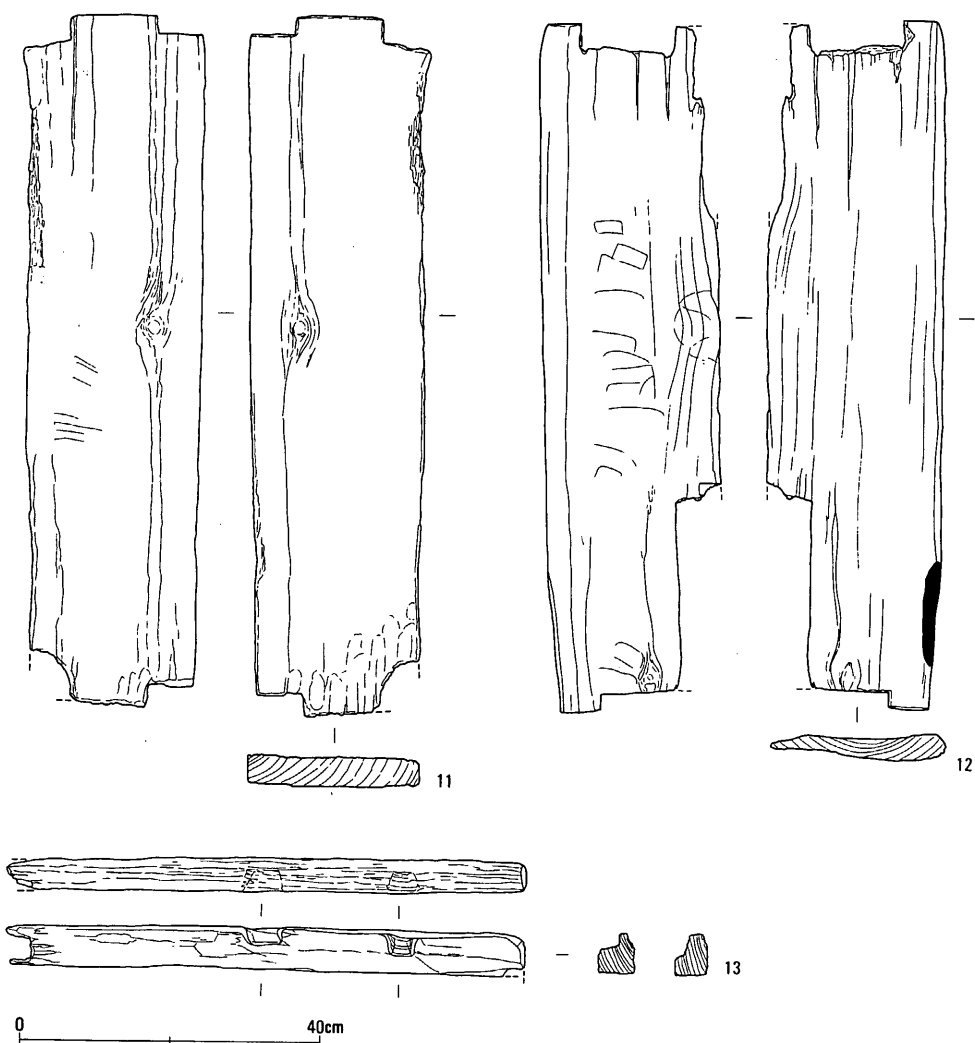


SE008 灰褐色土



0 10cm

第18図 212SE004・006・008出土遺物実測図 (1/3)



第19図 212SE004出土遺物実測図（1/10）

212SE008出土遺物（第18図、図版13）

遺物は暗褐色土層、灰褐色土層の2層に分けて取り上げた。以下、各層ごとに報告する。

暗褐色土層

土師器

高坏（7） 脚部上半が遺存する資料。砥石に転用が図られ、擦痕が顕著に残る平坦面が作出される。上部破断面から脚部にかけて薄く煤が付着する。

青磁

碗（8、9） いずれも越州窯系青磁であり、8は高台径5.2cmに復元される。胎土は灰色を呈し堅緻。釉は灰オリーブ色で全面に施釉される。高台内に目跡を残し、体部の内面には焼成時に胎土中の物質が膨張してできた膨らみが10数箇所観察される。Ⅲ－1類。9は口縁部から体部の破片で輪花が残る。Ⅲ－1b類。

灰褐色土層

青磁

水注（10） 底径14.7cmに復元される長沙窯系青磁の水注底部である。円盤状の底面はナデ調整、体部内外面は回転ナデで仕上げられ、浅黄色に発色する半光沢不透明の釉が体部下位まで掛けられ、部分的に釉垂れが見られる。

212S E012出土遺物（第20図、図版15）

遺物は暗褐色土層、明褐色土層、灰色粘土層、暗褐色粘土層の4層に分けて取り上げたが、この内、暗褐色土層、明褐色土層、灰色粘土層から出土したものについて報告する。

暗褐色土層

須恵器

甕（1） 口径52.0cmに復元される甕の口縁部から肩部にかけての資料である。口縁部は複合口縁を呈しており回転ナデ調整で仕上げられる。直下にはヘラ状工具による波状文が施される。口縁部直下から頸部外面は平行叩きの後斜位や横位のナデ調整が加わる。内面は指頭調整後に不定方向のナデ調整が行われる。肩部の外面は平行叩き、内面は同心円状の叩き具によって調整が図られる。胎土は青灰色に発生し焼成は堅緻である。

壺（2） 口径11.2cmに復元される。口縁部内面から外面胴部上半までは回転ナデ調整。頸部内面と胴部下半は回転ヘラケズリで仕上げられる。胎土は青灰色を呈し、器面は暗赤褐色に発色する。荒尾窯址群の製品と考えられる。

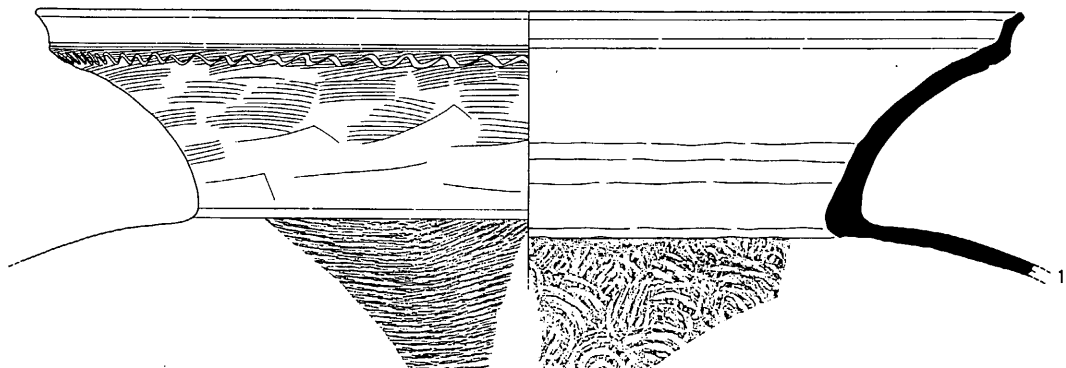
緑釉陶器

碗（3～5） 3は口径12.4cm、高台径6.2cm、器高4.5cmに復元される。器面に丁寧なナデ調整を行った後、オリーブ灰色を呈する釉を薄くハケ塗りする。胎土は青灰色を呈する。篠窯の製品。4は高台径7cmに復元される底部破片で、灰白色を呈する胎土に光沢のある黄緑色釉を施釉する。高台内と内面底部にトチンが残る。防長産と考えられる。5は口縁部破片資料。黒色粒子を含む浅黄色の胎土に水平方向のミガキが行われ、黄緑色を呈する釉を薄く施すが、器面からの剥落が顕著である。

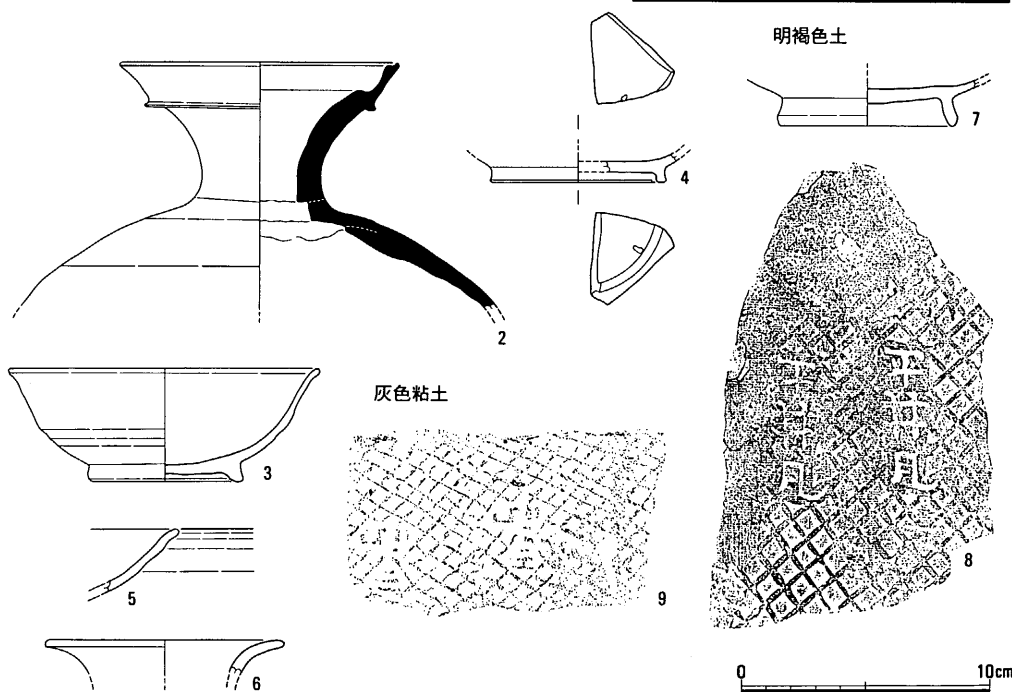
陶器

壺（6） 口径9.5cmに復元される口縁部破片。胎土は青灰色を呈し堅緻。釉は暗オリーブまたは暗オリーブ褐色に発色し、細かな貫入が入る。未分類資料である。

暗褐色土



0 20cm



明褐色土

灰色粘土

0 10cm

第20図 212SE012出土遺物実測図（1/3・1/4）

明褐色土層

灰釉陶器

碗（7） 高台径7cmに復元される。高い高台を持ち、体部内面に降灰が見られる。虎溪山1号窯式。

瓦類

平瓦（8） 文字瓦Ⅰ－2類である。平井瓦の印刻が2箇所残る。

灰色粘土層

瓦類

平瓦（9） 文字瓦Ⅲ類である。四王銘が二箇所残る。

212S E 013出土遺物（第21図、図版16）

遺物は灰褐色土層、暗褐色土層、暗灰色土層の3層に分けて取り上げたが、この内、灰褐色土層、暗灰色土層から出土したものについて報告する。

灰褐色土層

緑釉陶器

碗あるいは皿（1） 高台径5cmに復元される。円盤高台の底部は回転糸切り後未調整である。青灰色を呈する須恵質の胎土を持ち、暗緑色に発色する釉を底部を除いて薄くハケ塗りする。京都産の製品である。

暗灰色土層

須恵器

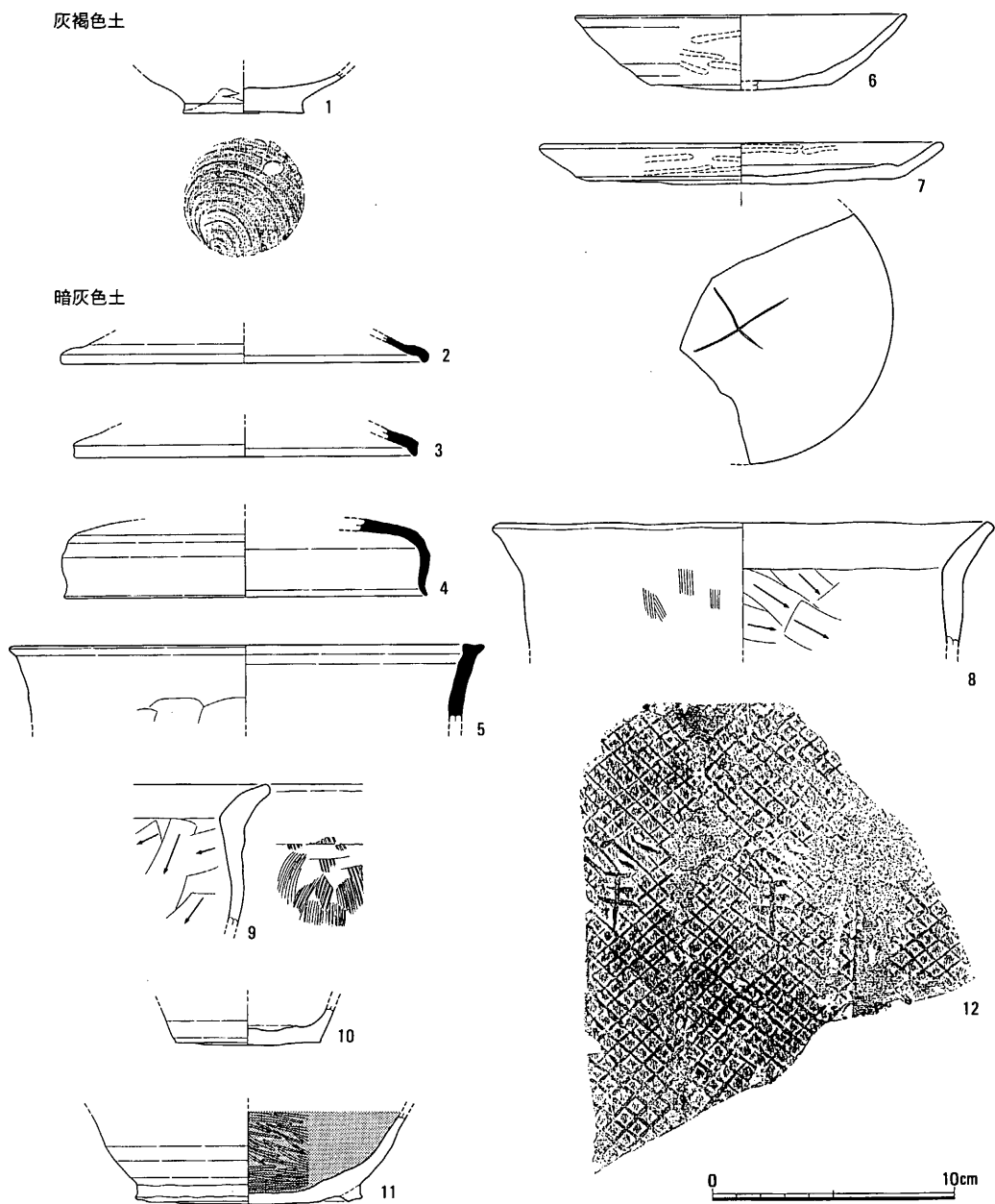
蓋3（2、3） 2は口径15.2cm、3は14.2cmに復元される破片資料であり。内外面は回転ナデ調整で仕上げられる。

壺蓋（4） 口径15cmに復元される破片資料であり、天上部から肩部にかけて回転ヘラケズリが行われる。肩部から下位に降灰がある。

鉢b（5） 口径19.6cmに復元される。口縁部及び内外面は回転ヨコナデをし、その後残存部下位にはタテヘラケズリが行われる。

土師器

坏d（6） 口径13.6cm、底径7.4cm、器高3.1cmに復元される。底部と体部の境は比較的明瞭で体部は直線的である。底部回転ヘラ切り離し、外面底部は回転ヘラケズリ、外面にはミガキaが施される。



第21図 212SE013出土遺物実測図 (1/3)

皿 a (7) 口径16.6cm、底径7.4cm、器高3.1cmに復元される。底部は回転ヘラ切り離して体部内外面にミガキ a が施される。底部には「×」印のヘラ記号を焼成前に刻む。

甕 a (8、9) 8は20.6cmに復元される。口縁部ヨコナデ、外面にはハケ調整の痕跡がわずかに残る。内面は斜位のケズリ調整である。9も8と同様の製作技法を採る。

小壺 (10) 底径は6cmに復元され、回転ヘラ切りされた平底から直線的に体部が立ち上がる。体部外面は回転ヘラケズリが施される。

黒色土器 A 類

碗 (11) 高台径は9.4cmに復元される。高台畳付より内面底部が突出しており、安定性を欠く。内面のミガキは丁寧に成される。高台内には煤が付着する。

瓦類

平瓦 (12) 文字瓦Ⅲ類であり、左字の八年銘が2箇所残る。

212 S E 020 出土遺物 (第22図、図版17)

遺物は暗褐色土層、暗灰褐色土層、暗灰色粘土層の3層に分けて取り上げたが、この内の暗褐色土層から出土したものについて報告する。

暗褐色土層

緑釉陶器

碗または皿 (1) 高台径6.5cmに復元される底部破片。灰白色の軟質な胎土を持ち薄緑色の釉が全面に施釉されるが、風化し光沢を失っている。東海系の可能性が高い。

灰釉陶器

碗または皿 (2) 高台径7.6cmに復元される。比較的高い高台を持ち、体部内面に降灰が見られ、重ね焼き部分は円形の露胎部分として残る。虎溪山1号窯式の製品。

212 S E 021 出土遺物 (第22図、図版17)

遺物は黒褐色土層、黒灰色土層、灰色粘土層、黄褐色土層の4層に分けて取り上げたが、この内の黒褐色土層と黒灰色土層から出土したものについて報告する。

黒褐色土層

石製品

丸柄 (3) 漆黒色を呈し、表面は微細な線条痕が多数入る。側面は良く研磨され半光沢を有する。裏面は仕上げの研磨が行われていない。2個1対の装着孔が2箇所残存するが、1箇所は欠損部にかかっている。石材はサヌカイトと考えられる。

黒灰色土層

金属製品

釘（４） 鉄釘である。頭部は折り曲げられ、残存長は3.1cmを測る。

212 S E 022出土遺物（第22～24図、図版17～19）

遺物は上層より、暗褐色土層、暗灰色土層、灰色粘土層、暗黄褐色土層、灰色砂礫層、暗灰色砂礫層の6層に分けて取り上げたが、この内の暗褐色土層、暗灰色土層、灰色粘土層、暗黄褐色土層から出土したものについて報告する。

暗褐色土層

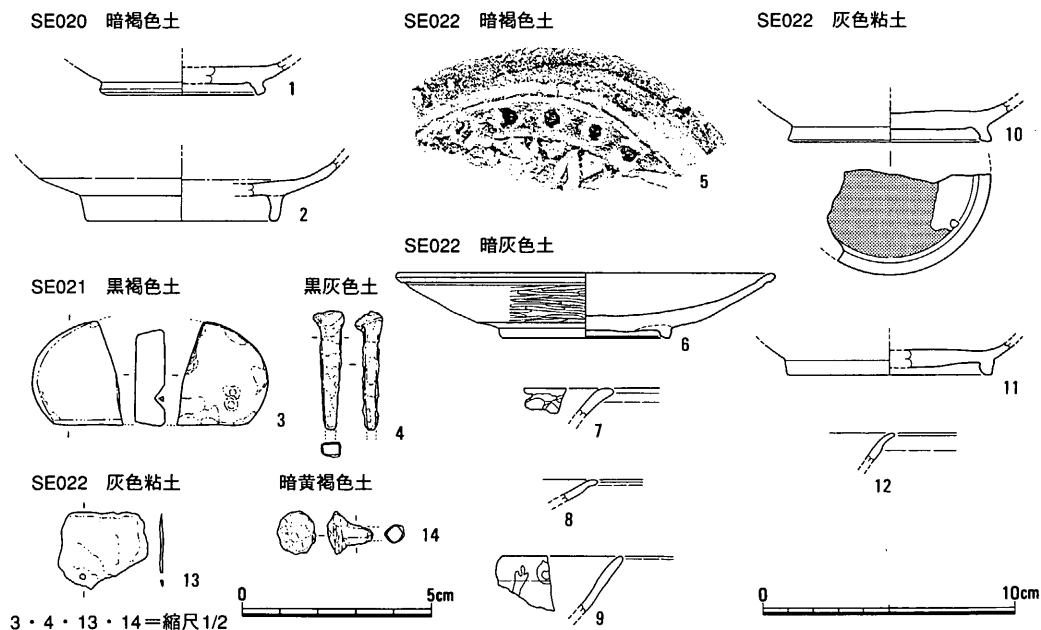
瓦類

瓦丸（５） 軒丸瓦瓦当の一部が残存する。鴻臚館式と考えられる。

暗灰色土層

土師器

坏（R-005） 胎土が橙色に発色する、坏もしくは皿と考えられる細片の内面に漆黒色の漆紙片が付着している。



第22図 212SE020～022出土遺物実測図（1/2・1/3）

緑釉陶器

皿（6） 口径15cm、器高2.6cm、高台径6.6cmに復元される。黒色微粒子を含む灰白色を呈する胎土に細かく丁寧なミガキ調整が行われる。施釉はされないが、器形、調整技法、胎土の特徴から猿投窯産の緑釉陶器と考えられる。

碗または皿（7、8） 7は灰白色を呈する比較的軟質な胎土に施釉するが内面は濃淡のムラがあり、二彩陶器の可能性もある。8は灰白色を呈する軟質な胎土にオリーブ黄色に発色する釉を厚めに施す。釉には透明感があり、細かな貫入が入る。

二彩陶器

碗（9） 口縁部破片資料。胎土は浅橙色を呈し、軟質である。水平方向のミガキ後に黄橙色を呈する釉を内外面に、緑釉を内面に一部施す。釉は半光沢で細かな貫入が入る。

灰色粘土層

緑釉陶器

碗（10、11、12） 10は高台径8cmに復元される底部破片。灰白色の胎土に浅黄色あるいは濃緑色に発色する釉を施し、高台内にはトチン跡が1箇所残る。底部には煤が付着している。近江産と考えられる。11は高台径8cmに復元される。灰白色を呈し、軟質な胎土に黄緑色の釉を施す。釉は器面全体に施釉され光沢があるが、ピンホール状の剥離が目立つ。猿投窯の製品と考えられる。12は口縁部の破片資料。胎土はやや黄色を帯びる灰白色を呈し、オリーブ黄色に発色する釉を施す。釉は光沢を持ち、細かな貫入が入る。

金属製品

板状製品（13） 銅製の板状製品で方形を呈していたものと想像される。径1mmの孔が1箇所穿たれる。2.4×2cm、厚さ1mmを測る。

暗黄褐色土層

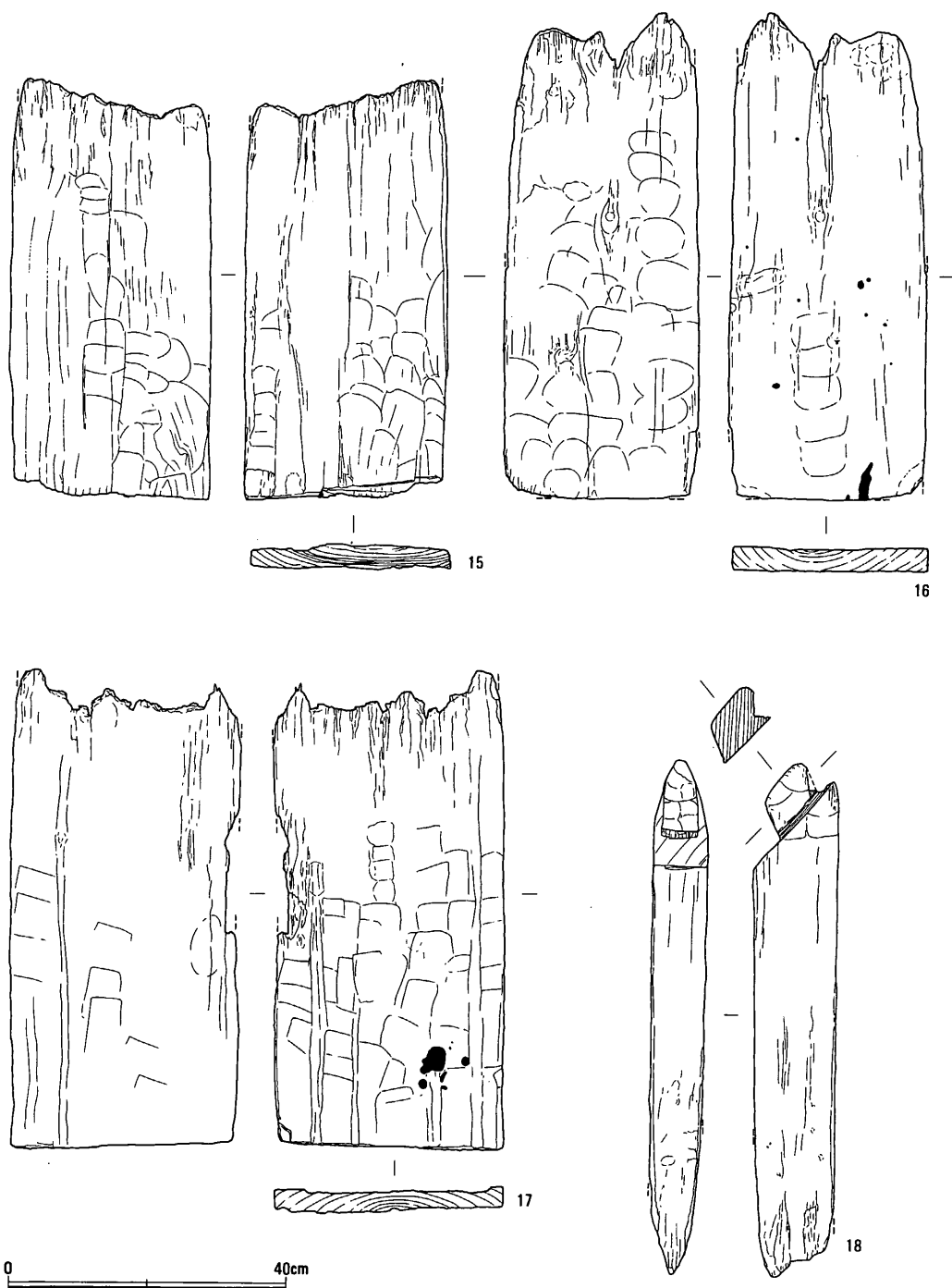
金属製品

釘（14） 鉄釘。頭部は楕円形を呈しており、断面方形の身はほとんどが失われている。頭部径1.2cm、残存長1.2cmを測る。

井戸枳材（第23・24図、図版18・19）

木製品

板材（15～17） 15は井戸枳南辺を構成していた板材であり、板目に木取りされる。下半は構築時より地中に埋め込まれていたと考えられ、腐朽を免れており、表裏面にはチョウナに



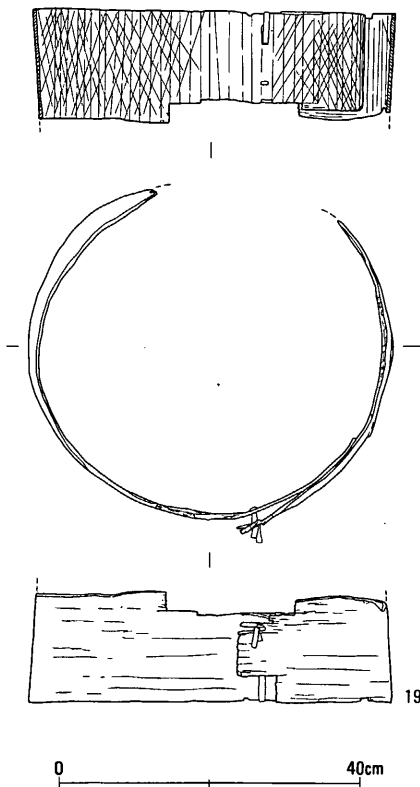
第23図 212SE022出土遺物実測図1 (1/10)

よる調整が明瞭に残る。調整方向は不定である。側面にもチョウナの調整が施され、下端は鉋状工具で切断されている。長さ58cm、幅28cm、厚さ2.6cmを計測する。16は井戸枠北辺を構成していた板材であり、板目に木取りされる。下端より60cmほどは構築時より地中に埋まっていたと考えられ、表裏面及び側面にはチョウナ痕が比較的明瞭に残存している。下端は鉋状工具で切断されている。裏面には飛び火を受け炭化した箇所が点状に残る。長さ68.6cm、幅27.8cm、厚さ2.6cmを計測する。17は井戸枠の北辺を構成していた板材。板目に木取りされる。下端より50cmほどは構築時より地中に埋まっていたと考えられ、表裏面及び側面にはチョウナ痕が明瞭に残存している。裏面下位には飛び火を受け炭化した箇所が残る。長さ68cm、幅31.8cm、厚さ2.4cmを計測する。

角材 (18) 井戸枠北東隅に打ち込まれていた杭であり、出土状態は実測図に掲げた状態とは逆位であった。実測図下端から30cmほどは地上に露出していたと考えられ、腐食が著しく先細りになっている。上位は鉋及びチョウナによる切削によって斜めに切られ、ホゾが造り

出される。ホゾはチョウナによる整形で断面台形に整形され、基部は鉋による数回の調整が行われる。建築部材の転用品と考えられる。規模は、長さ72.6cm、幅7.8cm、厚さ11.8cmを計測する。

曲物 (19) 井戸底の水澄しとして設置されていたもので、厚さ5mmほどの針葉樹の薄板を素材とする。薄板は幅0.9cmの桜あるいは樺系の樹皮製の紐を用いて側面の上下2箇所綴じ合わせられる。裏面にはケガキ線が縦位、斜位の順に刻まれる。径46.6cm、高さ14.2cmを計測する。



第24図 212SE022出土遺物実測図2 (1/10)

3) 土坑出土遺物

212SK007出土遺物 (第25図、図版19)

遺物は黒褐色土層、黄褐色土層の2層に分けて取り上げた。以下、各層ごとに報告する。

黒褐色土層

灰釉陶器

皿(1) 口縁部の破片資料である。口縁端部が外反する。灰色を呈する堅緻な胎土にオリーブ灰色に発色する釉が掛けられる。猿投窯の製品で黒笹K90号窯式の製品と考えられる。

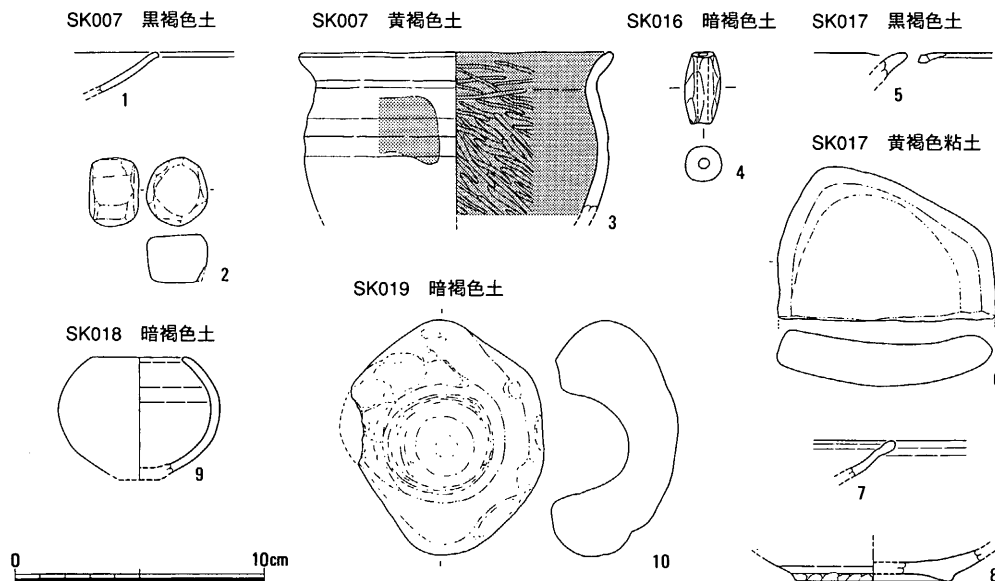
瓦類

瓦玉(2) 瓦を素材とし、上下面を平坦に擦り、側面は面取りが行われる。径2.7cm、高さ1.9cmを測る。

黄褐色土層

黒色土器A類

甕(3) 口径12.4cmに復元される。体部外面は回転ヨコナデ、体部内面は斜位、口縁部付近ではほぼ水平方向のミガキが施され黒色処理が行われる。体部外面の一部には煤が付着している。



第25図 212SK007・016～019出土遺物実測図(1/3)

212 S K016出土遺物（第24図、図版19）

暗褐色土層

土製品

土錘（4） 土師質で胎土は橙色に発色し、長さ2.7cm、最大径1.5cm、径4mmの穴が貫通する。重量は5.73gを測る。

212 S K017出土遺物（第25図、図版19）

遺物は黒褐色土層、黄褐色粘土層の2層に分けて取り上げた。以下、各層ごとに報告する。

黒褐色土層

青磁

碗（5） 越州窯系青磁の口縁部破片資料。端部に輪花が残り、胎土は青灰色で堅緻。灰オリブ色に発色する釉を施すが、風化しており光沢を失っている。I類系の製品。

金属製品

銅塊（R-002） 溶解した銅でハート形を呈する。重量は5.70gを測る。

黄褐色粘土層

須恵器

転用硯（6） 胎土が暗青灰色を呈する器壁の厚い甕あるいは壺を転用したもので、欠損品である。全体に滑らかで、緩やかに窪んだ硯面には墨が薄く付着している。8.5×6.1cm、厚みは1.7cmを測る。

土師器

皿（7） 口縁部破片で全体をナデ仕上げる。口縁端部は短く内折する。京都系。

緑釉陶器

皿（8） 高台径6.2cmに復元される。胎土は須恵質で青灰色を呈し、釉はオリブ灰色に発色するが、風化しており光沢を失う。円盤高台の外面は人為的に細かく打ち欠かれる。京都系と考えられ、器形は碗になる可能性もある。

212 S K018出土遺物（第25図、図版19）

暗褐色土層

青磁

小壺（9） 口径3.6cmに復元される。口縁から体部上半にかけて回転ナデ、体部下半はヘラケズリで仕上げられる。胎土は灰色を呈し、堅緻であり、碗I類と同質の胎土を有する。

釉はオリーブ灰色を呈し、光沢がある。体部下半には釉垂れが見られ、やや青味を帯びる。

212 S K019出土遺物（第25図、図版19）

遺物は暗褐色土層、暗灰褐色土層の内、上層の暗褐色土層から出土した。

暗褐色土層

石製品

凹石（10） 表面に凹凸の目立つ凝灰岩系の素材に径5cm、深さ3cm、断面形U字型の凹みを通じて使用する。凹みの開口部から底部近くまで横位の擦痕が観察される。不安定な形態であるが、左手に持つと収まりの良好な箇所があり、手持ちでの使用が想定される。9.3×7.6cm、厚さ5cmを計測する。

212 S K025出土遺物（第26図、図版20）

黄褐色ブロック土層

須恵器

蓋3（1、2） 1は口径17.2cmに復元され、天井部はケズリの後に回転ナデ、他は回転ナデ調整で仕上げられる。胎土は青灰色を呈する。2は口径19cmに復元され、残存部は回転ナデで仕上げられる。胎土は暗青灰色を呈し、口縁端部は摩滅している。

碗c（3、4） 3は高台径10cmに復元され、高台は丁寧になでられ、底部から体部へ緩やかに移行する器形を有し、内外面は回転ナデで仕上げられる。胎土は暗赤褐色を呈し、器面は黒色気味に発色する。4は高台から体部変換点までの幅が狭い。胎土は青灰色を呈しており、堅緻である。

皿a（5） 口径18.6cm、底径15.4cm、器高2.4cmに復元される。底部は回転ヘラ切り後にナデ、体部は回転ナデで仕上げられる。口縁部は暗青灰色に発色する。

高坏（6） 坏部の破片資料であり、口縁部をつまみ上げ、端部は平坦になでられる。内面は回転ナデ、外面柱付近は回転ヘラケズリ、他はナデで仕上げられる。

壺（7） 高台径8.6cmに復元される。器面は回転ナデで仕上げられ、内外面に煤が薄く付着する。胎土は青灰色に発色し、堅緻である。

鉢b（8） 口径18cmに復元される。器面は回転ナデで仕上げられ、胎土は青灰色を呈して堅緻であり、内面体部は漆黒色に発色する。

土師器

坏d（9） 底径8cmに復元される。底部と体部の境が明瞭な器形である。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整、体部外面下位はヘラケズリ、内面は回転ナデで仕上げられる。

皿 a (10) 口径13.2cm、底径9.6cm、器高1.4cmに復元される。体部が外反する器形を有する。器面には緑色を呈する碎屑物が全面に付着しており、調整は明瞭でない。

甕 a (11) 口径26cmに復元される。口縁部内外面は横ナデ、体部には縦位のハケ目がわずかに観察される。内面は横位のヘラケズリで仕上げられる。

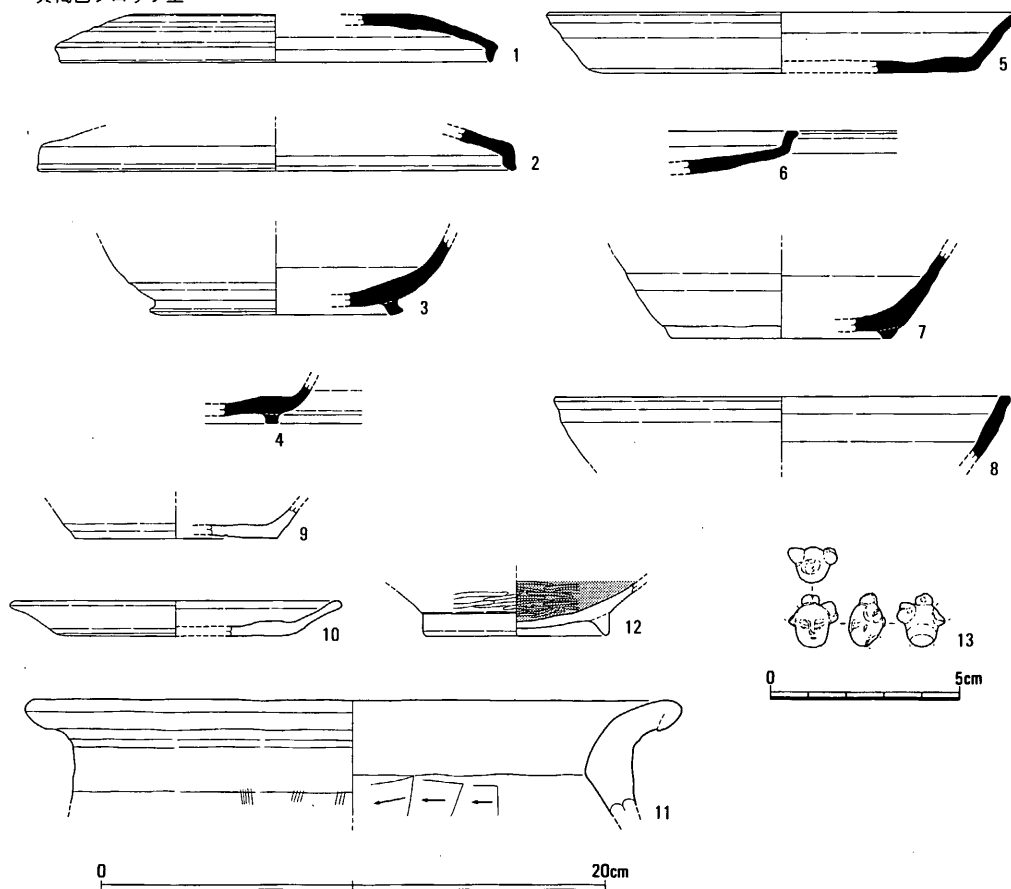
黒色土器A類

碗 c 1 (12) 高台径7.4cmに復元される。調整は、外面がナデ、内面はミガキ後黒色処理される。

白磁

塑像 (13) 人物の頭部破片であり、塑像あるいは器物のツマミと想像される。頭髮は短冊状の粘土小片を丸めて髻を表現しており、頭頂部に1箇所、側頭部に2箇所貼り付けるが、

黄褐色ブロック土



第26図 212SK025出土遺物実測図 (1/2・1/3)

この内、右側頭部は欠損している。目、鼻、口、耳はそれぞれ所定の位置にヘラ状工具を用いて巧みに刻み込まれている。頸部との接合部と考えられる円形の破断面がやや後方に位置しているのが観察される。塑像であれば身体よりも顔面を突き出しているか、上を向いた意匠かも知れない。胎土は白色で堅緻であり、白濁した半光沢の釉が掛けられる。本址確認時に発見したもので、混入の可能性が高い。

212SK027出土遺物（第27・28図、図版21～23）

遺物は黒褐色土層、暗褐色土層の2層に分けて取り上げた。以下、各層ごとに報告する。

黒褐色土層

須恵器

蓋3（1～3） 口径は13cm～16.4cmに復元され、回転ヘラケズリ後にナデが行われるが、1は粗いナデ、3の天井部は不定方向のナデが行われる。

蓋4（4） 口縁端部を下方へ引いた後、内外面を回転ナデ調整するが、外面には不定方向のナデが残る。

坏c（5、6） 高台外面から直接体部が立ち上がる器形を有する。5は口径13.6cm、高台径8cm、器高5.6cmに復元される。高台貼り付け後に回転ナデ調整で仕上げられる。胎土は暗灰色を呈するが、口縁内外面は灰白色に発色する。6は口径12.7cm、高台径7.5cm、器高5.2～5.4cmに復元され、底部ヘラ切り後高台を貼り付け、雑なナデ調整を行う。内面底部には円形の重ね焼き痕が残り、内面口縁部から外面体部にかけて降灰が襷状に掛かる。胎土は青灰色である。

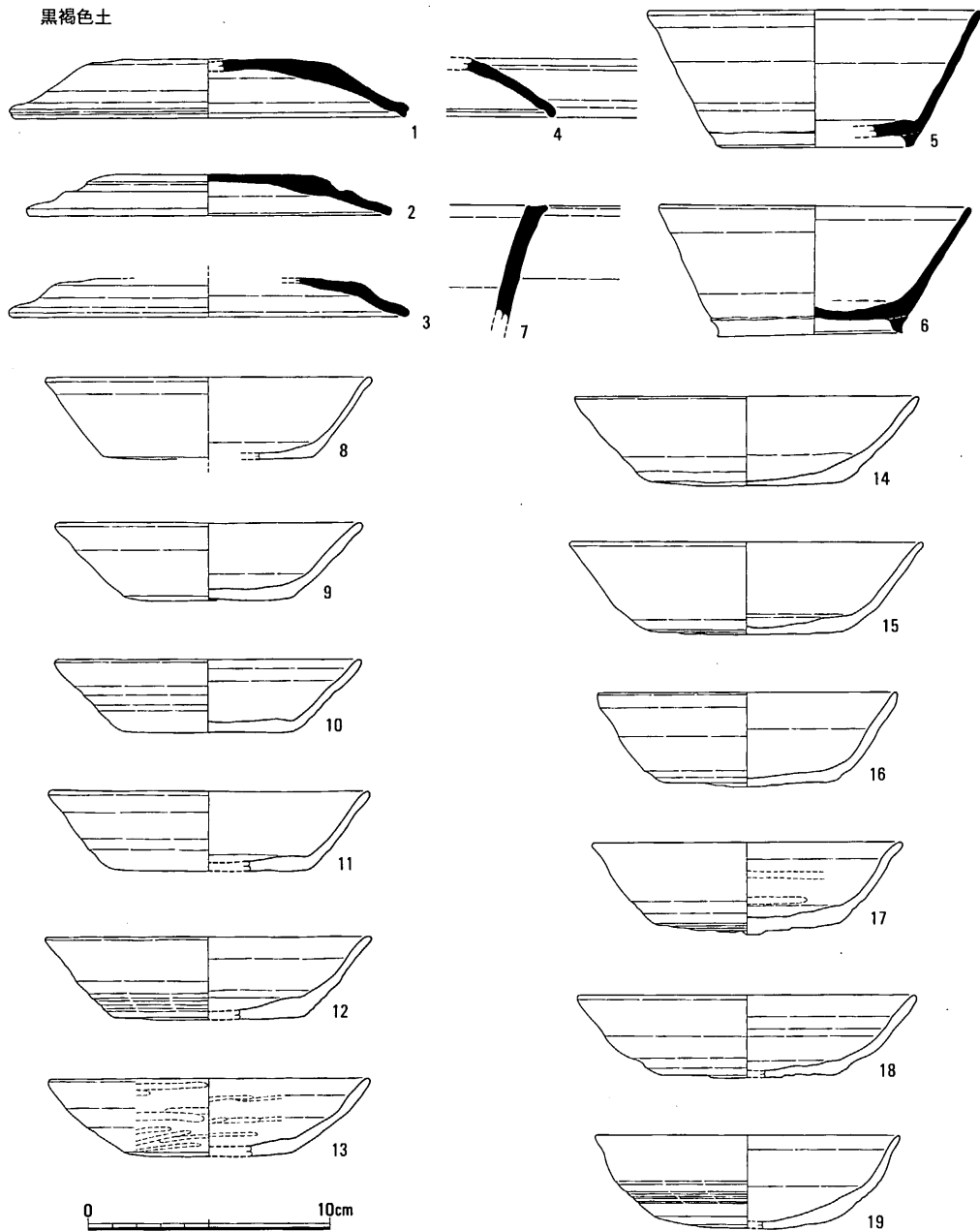
鉢b（7） 内外面は回転ナデ調整で仕上げられ、口縁端部は平坦面を作る。外面は漆黒色に発色する。

土師器

坏a（8～19） 口径12.2～13.4cm、底径6.6～8.6cm、器高3～3.9cmに復元され、底部切り離しは14が不明なほかはすべて回転ヘラ切りであり、8のみ弱いナデ調整が加わる。体部は回転ナデで仕上げられ、13と17にはミガキaが施される。底部と体部の境が明瞭で体部が直線的である古相な8から、底部が丸底気味となり体部が内湾する器形の19まで形態差が認められる。胎土の色調は8が淡橙色、11～13と16～18が橙色に発色し酸化焰焼成が顕著である。他は浅黄色を呈している。

皿a（20～24） 口径13.3～14.4、底径9～10.4、器高1.3～1.7に復元される。底部切り離しはヘラ切りである。器面は回転ナデ調整で仕上げられる。体部が直線的に立ち上がる資料と外反するものに分類される。胎土の色調は20、21が浅黄色、他が橙色に発色する。

黒褐色土



第27図 212SK027出土遺物実測図1 (1/3)

甕 a (25～27) 25は口径23.4cmに復元される。口縁部は横ナデ、体部は縦位のハケ目、内面は斜位のハケ目調整後ヘラケズリを行う。胎土中に角閃石を含んでいる。搬入品。26は口径18.4cmに復元される。口縁部は横ナデの後、外面は指頭調整後に縦位のハケ目が行われ、内面にハケ状工具を使った斜位の調整が行われる。体部内面はヘラケズリが行われる。27は口縁部横ナデ、体部外面に縦位のハケ目が行われ、内面は口縁部ハケ目、体部ヘラケズリで仕上げられる。内外面に煤が付着する。

黒色土器 A類

碗 (28、29) 28は口径18.2cmに復元され、外面は回転ナデ、下位は回転ヘラケズリ調整される。内面はミガキ後に黒色処理される。29も同様の技法を採る。

緑釉陶器

碗 (30、31) 30は口径13cm、高台径5.8cm、器高3.3cmに復元される。円盤高台から口縁の資料で器面は丁寧に細かなミガキを行った後、黄緑色に発色する釉を全面に施す。釉は光沢があり、微細な気泡を生ずる。胎土は灰白色を呈しやや硬質で、部分的に酸化焰焼成気味となる箇所があり浅橙色に発色する。京都産と考えられる。31は円盤高台の破片資料。胎土は浅黄色を呈し、黄緑色の釉が施されるが風化が著しく光沢を失っている。また、器面からの剥落も顕著である。京都産と考えられる。

暗褐色土層

須恵器

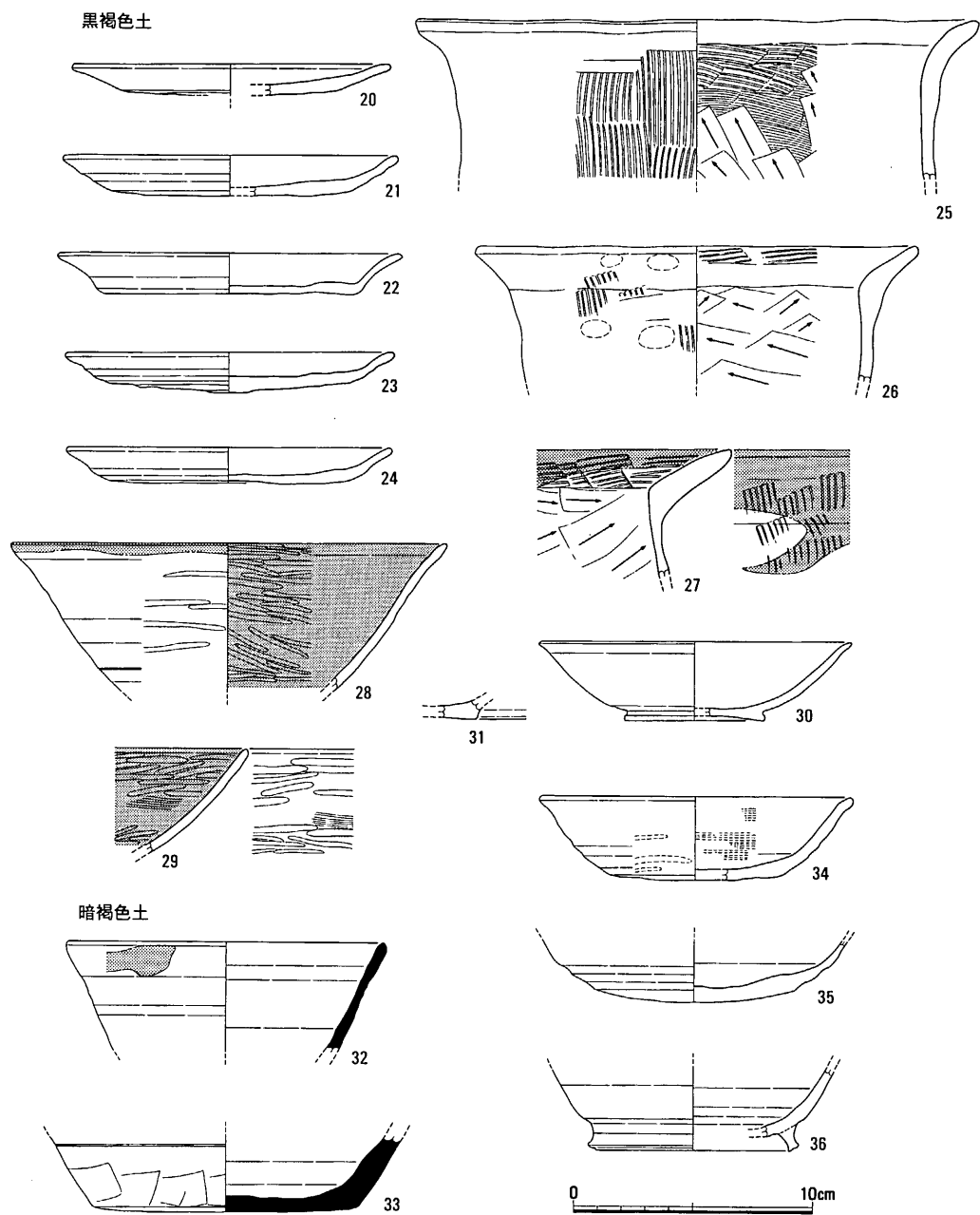
坏 (32) 口径13.4cmに復元され、体部内外面は回転ナデ調整される。胎土は青灰色を呈しており、堅緻である。口縁部外面には煤が付着し、内外面には白色を呈するヒゲ根状の植生痕が付着する。

壺 (33) 底径11cmに復元される壺の底部破片で、外面底部と体部は回転ヘラ調整で上げられる。内面には小礫を取り込んだ石灰様の白色物質が全面に付着している。

土師器

坏 a (34、35) 34は口径13cm、底径7cm、器高3.5cmに復元される。器面には緑色を呈する碎屑物が全面に付着しており、調整は明瞭でないが体部内外面は回転ナデ調整後にミガキ a が行われる。底部には径1.4cmほどの粘土瘤が付着する。胎土は橙色に発色する。35は底径が8.4cmに復元され、底部と体部の境界がやや不明瞭である。胎土は浅黄色から浅橙色を呈する。

碗 c (36) 高台径8.8cmに復元される。高台はナデつけられ、体部外面の下端はヘラケズリされる。



第28図 212SK027出土遺物実測図2 (1/3)

212 S K 030出土遺物（第29・30図、図版24～26）

遺物は灰褐色土層、暗灰褐色土層の2層に分けて取り上げた。以下、各層ごとに報告する。

灰褐色土層

須恵器

蓋 c（1） 天井部には径2.6cmを測る扁平な擬宝珠形の摘みが付く。胎土は灰色を呈する。

小蓋 a 3（2） 口径12cmに復元される。天井部外面上部は回転ヘラケズリ、外周と内面は回転ナデ調整される。

蓋 2（3） 口径14cmに復元される。天井部内外面は回転ナデ調整が行われる。

蓋 3（4～6） 4は器面をナデ調整し、胎土は灰白色を呈するが、口縁部は還元焰焼成が進んで青灰色に発色する。5は天井部回転ヘラケズリ、外周と内面は回転ナデ調整が行われる。器形の歪みが著しい。6は天井部回転ヘラケズリと不定方向のヘラナデが行われ、外周から内面にかけては回転ナデで仕上げられる。

小坏 c（7） 口径10.4cm、高台径6cm、器高4.1cmに復元される。高台貼り付け後に周縁ナデ、体部内外面も回転ナデで仕上げられる。体部外面には降灰が見られる。

坏 c（8） 口径14cm、高台径10.4cm、器高3.7cmに復元される。高台は底部際よりやや内側に貼り付けられる。高台外面底部をヘラケズリによって面取りする。体部内外面は回転ナデ調整である。胎土は灰色を呈する。

碗 c（9） 高台径は11.8cmに復元される。底部は回転ヘラ切り、高台貼り付けに伴って周縁をナデる。内外面は回転ナデ調整が行われるが、外面には回転ヘラケズリが痕跡として残る。胎土は灰白色を呈する。

皿 a（10） 口径18cm、底径14cm、器高2.4cmに復元される。底部回転ヘラ切り後、不定方向にナデられる。胎土は灰色を呈し、口縁部は還元化が進行し暗青灰色に発色する。

鉢 b（11） 内外面を回転ナデ調整で仕上げている。胎土は暗灰色を呈し、器面は漆黒色に発色する。

暗灰褐色土層

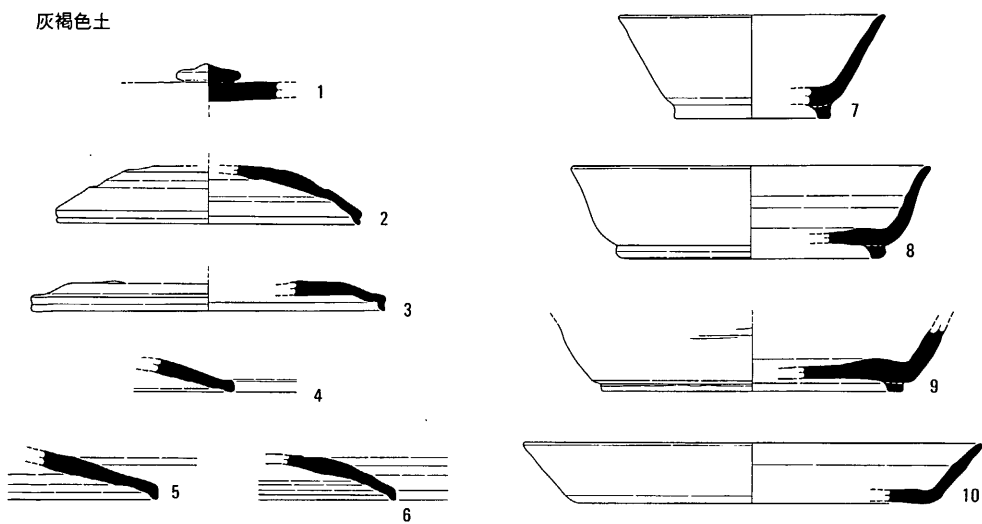
須恵器

蓋 c（12） 径2cmを測るボタン形の摘みが付く。胎土は灰色を呈する。

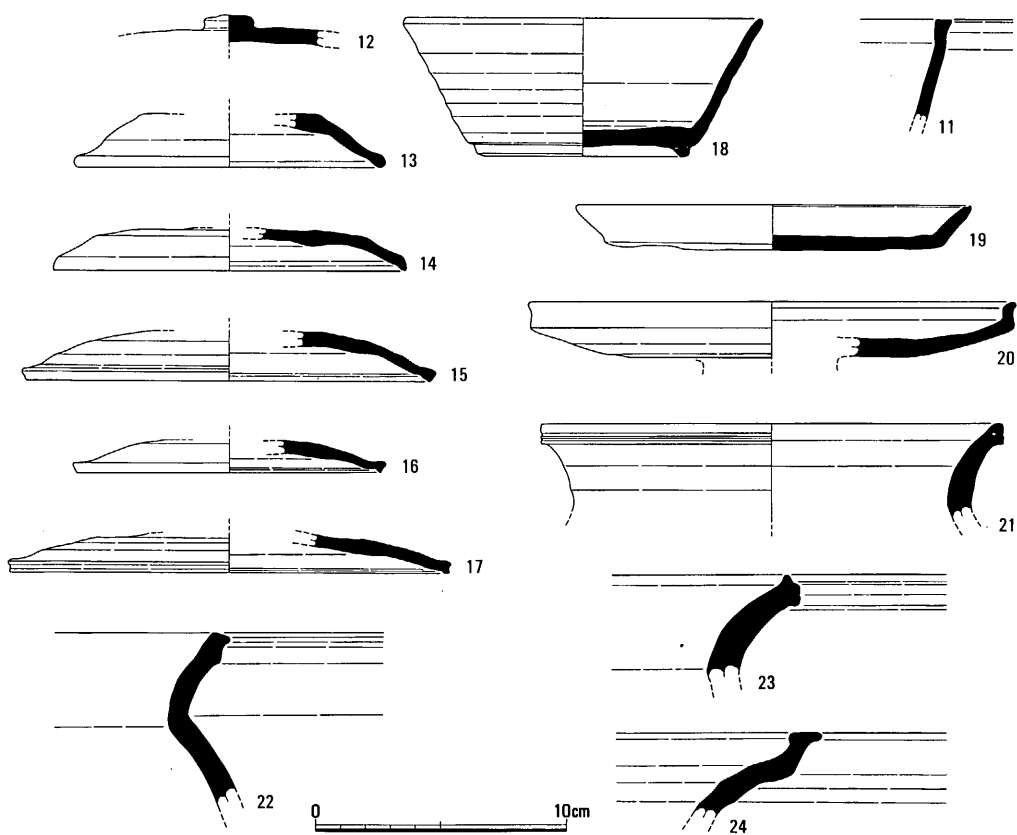
蓋（13） 口径12cmに復元され、天井部外面は回転ヘラケズリ、外周は回転ナデを行う。内面は回転ナデ調整が施される。胎土は灰色を呈し、小礫を多く含み、器形は歪んでおり、器面には焼成時に亀裂が生じている。

蓋 3（14～16） 14は口径14cmに復元される。天井部の外面は回転ナデを行うが不明瞭。内

灰褐色土



暗灰色土



第29図 212SK030出土遺物実測図1 (1/3)

面は回転ナデ調整が施される。胎土は灰色を呈し小礫を多く含み、口縁部内外面は還元化が進行して明紫色に発色する。器形は歪み、器面には焼成時に亀裂が生じている。15は口径16cmに復元される。天井部外面は回転ヘラ切り後不定方向のナデが行われ、外周は回転ナデ調整、内面中央部は不定方向のナデ、外周は回転ナデで仕上げられる。胎土は灰色を呈しており、口縁部には煤が薄く付着し黒変する。16は口径12cmに復元される。成形、調整技法、胎土は15に準ずる。口縁部は還元化が進行し暗灰色に発色する。

蓋4 (17) 口径17.4cmに復元される。天井部回転ヘラ切り後、回転ナデ調整が行われ、内面は回転ナデで仕上げられる。口縁端部は下方へ引かれる。胎土は灰色を呈する。

坏c 1 (18) 口径14cm、高台径8.3cm、器高5.5cmに復元される。底部はヘラ切り後に高台周縁は貼り付けに伴う回転ナデを行うが、貼り付けの痕跡が外面に残存する。高台の幅は3～6mmと一定していない。体部内外面は回転ナデで仕上げられる。胎土は灰色を呈しており、堅緻である。

皿a (19) 口径15.4cm、底径13.3cm、器高5.5cmに復元される。底部はヘラ切り後に不定方向のナデ、体部内外面は回転ナデを行う。胎土は灰色を呈し、堅緻である。

高坏 (20) 口径14cmに復元される坏部の破片資料で、底面は回転ヘラケズリ後に外周は回転ナデを行う。口縁端部は平坦にナデられ、坏部内面は回転ナデで仕上げられる。胎土は灰色を呈し、器面は酸化焰焼成気味でにぶい褐色に発色する。

甕 (21・22) 両者はともに器面を回転ナデで仕上げる。20の胎土は灰色を呈し、堅緻である。口径18.2cmに復元される。22の胎土は酸化焰焼成気味でにぶい褐色に発色する。

壺 (23・24) 23は器面を回転ナデで仕上げる。酸化焰焼成気味で器面は橙色に発色している。胎土は堅緻。24も器面を回転ナデで仕上げる。胎土は灰色を呈し、堅緻である。

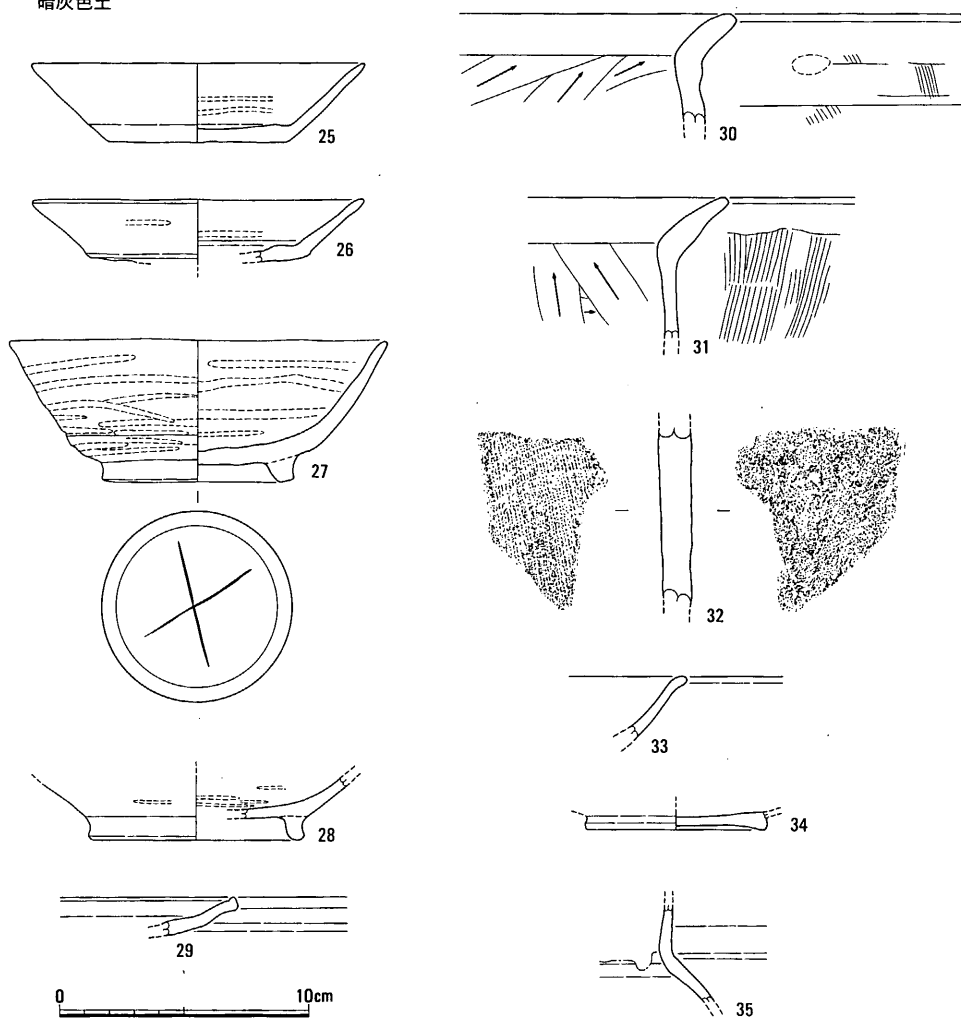
土師器

坏a (25、26) 25は口径が13.2cm、底径7.4cm、器高3.1cmに復元される。底部回転ヘラ切り、体部は回転ナデの後、内面にミガキaを施す。外面下半は摩耗が著しい。胎土は橙色に発色する。26は口径13.2cm、底径8.7cm、器高2.5cmに復元される。底部はヘラ切り、体部内外面は回転ナデ調整後、ミガキaで仕上げられる。胎土は橙色に発色する。

碗c (27、28) 27は口径15cm、高台径7.6cm、器高5.7cmに復元される。底部ヘラ切り後、高台貼り付けに伴うナデを周縁に行う。体部外面下端はヘラケズリが行われ、内外面は回転ナデが施され、ミガキaで仕上げられる。高台内には「×」印のヘラ記号が焼成前に刻まれる。胎土は淡橙色に発色する。28は高台径は8.6cmに復元される。内外面は回転ナデ調整後にミガキaで仕上げられる。胎土はにぶい橙色を呈するが、内面は黒灰色に発色する。

高坏 (29) 坏部の破片資料であり、底面は回転ヘラケズリ後に外周は回転ナデ調整で仕上

暗灰色土



第30图 212SK030出土遺物実測図2 (1/3)

げられ、口縁部は摘み上げられる。胎土は橙色に発色し、口縁には煤が薄く付着する。本資料は蓋の可能性も考えられる。

甕 a (30、31) 口縁部は横ナデし、体部外面は縦位のハケ調整を行うが、30は疎らに施しており、1次調整の指頭圧痕が微かに残る。体部内面は斜位のヘラケズリで仕上げられる。胎土は橙色に発色する。

製塩土器

焼塩壺 (32) I 類の胴部破片で、現存高は7.3cmを測る。外面は乱雑な指頭調整、内面は細かい布目圧痕が残る。胎土は橙色に発色し、軟質な焼成で6～10mm大の礫及び白色粒子を多く含む。

緑釉陶器

碗 (33) 口縁部破片。口縁端部は外反する。内外面は丁寧な細かいヘラミガキの後、薄緑色の釉を薄く施釉する。胎土は軟質で白色を呈する。京都産。

皿 (34) 底部破片。円盤高台を丁寧にヘラミガキし、薄緑色の釉を薄く施釉するが、剥落が顕著である。胎土は軟質で白色を呈する。京都産。

青磁

水注 (35) 長沙窯系青磁の水注であり、頸部から体部肩にかけての破片。回転ナデ調整した器面に、不透明半光沢で浅黄色に発色する釉を体部外面及び内面頸部に掛ける。胎土は黄橙色に発色する。

4) 包含層出土遺物

茶褐色土層 (第31図、図版27)

土師器

小皿 (1) 口縁部から体部の破片資料。体部は2段の横ナデ調整、口縁の端部は短く内折する。胎土は橙色に発色するが部分的に白色粘土と絞胎を成す。京都産。

須恵質土器

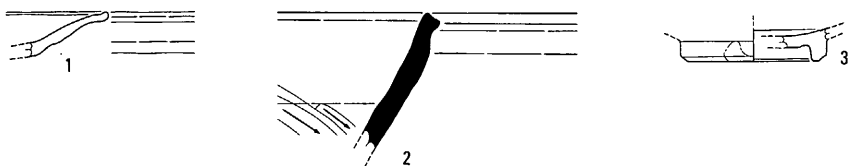
捏鉢 (2) 口縁部の破片。内外面は回転ナデ調整、内面下位には斜位のナデが施される。口縁端部は平坦にナデられ、外面直下には幅1.2cm程度の凹線を巡らす。石英粒を含んだ胎土は青灰色を呈し、口縁部内面から外面上半にかけては還元化し暗青灰色に発色する。

青磁

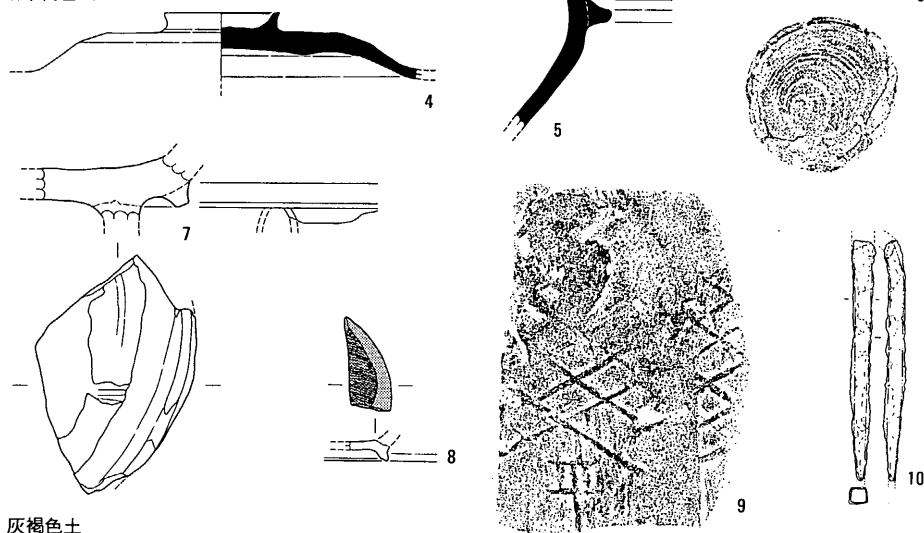
碗 (3) 龍泉窯系青磁の高台部破片であり、オリーブ灰色に発色する釉が高台畳付まで施されるが、高台外面は一部露胎となる。見込みには圈線が1条巡る。胎土は明白色で堅緻。

Ⅳ工類。

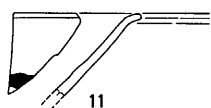
茶褐色土



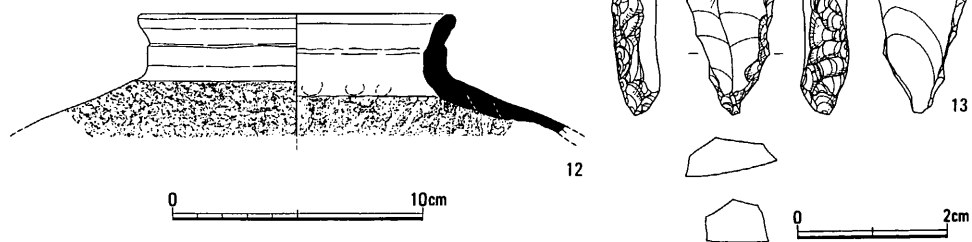
暗茶褐色土



灰褐色土



調査区内



第31図 包含層・調査区内出土遺物実測図（1/1・1/3）

暗茶褐色土層（第31図、図版27）

須恵器

蓋 b（4） 天井部には回転ヘラケズリ後に径4.6cmの環状摘みが貼り付けられる。天井部内面はナデ、周縁は回転ヘラケズリで仕上げられる。胎土は赤褐色を呈しており、天井部に降灰が見られる。肥後荒尾窯址群産。

壺 e（5） 肩部の破片資料であり、内面は回転ナデ調整が行われる。外面下方はヘラケズリが施されるが降灰が付着して詳らかでない。内面は青灰色を呈し外面は酸化焰焼成が進行し小豆色に発色する。

土師器

坏（6） 底部回転糸切り後に低い高台が外面垂直、内面斜めにナデつけられる。高台径は6.1cmを測る。体部内面は回転ナデで仕上げられる。胎土は灰白色を呈し、細砂粒、石英を含む。瀬戸内西部系。

香炉身（7） 香炉身の底部から脚部の一部と考えられる破片である。器面が摩耗しているうえ、緑色を呈する碎屑物が付着しており、調整は詳らかでない。胎土は浅橙色を呈し、器面は橙色に発色する。底部外面端部には断面逆台形の高台が貼り付けられ、横ナデ調整される。内側には脚が貼り付けられた痕跡が破断面として残るが、橙色を呈する器面が幅約0.8cmで残存しており、この部分は透穴になる可能性がある。本資料は久留米市ヘボノ木遺跡第10次調査S K921出土資料（久留米市教育委員会1984）と近似した器形を有する。

黒色土器B類

碗（8） 底部破片。高台は低く、断面三角形の端正な作りである。器面には隙間無く細かなミガキが丁寧に施される。楠葉B類。

瓦類

平瓦（9） 文字瓦 I - 8 a 類であり、「平」が1箇所残る。

鉄製品

釘（10） 鉄釘。頭部と先端部が欠損しており、錆化が進む。断面は四角形を呈し、現存長8.6cm、厚さは0.6cmを測る。

灰褐色土

白磁

鉢（11） 口縁部から端部にかけての破片である。体部は直線的に外反して立ち上がり、口縁部は屈折して端部は平坦にする。口縁端部はナデ、以下はヘラケズリで仕上げられる。胎土は黒色微粒子を含んだ灰色を呈し、堅緻である。釉は灰オリーブ色に発色し、比較的厚く

施されるが、外面口縁部直下にはピンホール状の釉切れが観察される。釉は半光沢で内面下端にはオリーブ色に発色する鉄絵が描かれる。未分類資料である。

5) 調査区内出土遺物（第31図、図版27）

調査区内出土遺物とは、調査時に検出したものの、平面的、層位的な出土位置が把握されなかった遺物を指す。また、13は遺構（212 S E 004）から出土した遺物であるが、遺構の時期と著しくかけ離れた資料であったため、本項で報告することとした。

須恵器

壺（12） 口径12.6cmに復元される壺 a あるいは c 類と考えられる。口縁部は横ナデ、体部外面は格子叩き、内面は指頭調整で仕上げられる。胎土は石英粒を多く含み、灰白色を呈しやや軟質。外面は青灰色に発色する。

石製品

ナイフ形石器（13） 後期旧石器時代のナイフ形石器が出土した。212 S E 004 覆土の暗灰色土中から混在した状態で確認された。他に当該期の遺物が認められないことから、このナイフ形石器は本来、生活址外あるいは製作址外に残された単独存在の石器であったと考えられる。13は黒曜石製のナイフ形石器である。先端部の欠損は古いもので、使用時に残されたものと考えられる。石刃技法による縦長剥片を素材とし、調整加工は二側縁に施される。左側縁には裏面からの二次加工が施される。右側縁の調整は下半部に施され、上半部は素材剥片のエッジのままである。右側縁の調整も裏面からの二次加工が主体となるが、基部は正面と下端からの加工が施される。裏面に二次加工は見られず、全面が主要剥離面となる。左側縁の刃角度は鈍角だが、右側縁は下半が鈍角、上半は鋭角となる。このナイフ形石器は平面形態や素材剥片、側縁加工から木崎編年の第Ⅱ期（木崎1988）に位置づけが考えられる。

Ⅳ. 小 結

今回の調査では奈良時代後期から平安時代後期にかけての各種遺構が発見されたが、改めて太宰府土器型式をもとに各遺構の年代観を出土遺物と遺構の重複関係から求めると以下のようによまとめられる。

道路	土坑
212 S D010 XII 期	212 S K002 平安時代後期
212 S D015 XII 期	212 S K007 XII 期
212 S D028 XII～Ⅲ期	212 S K016 XII 期
212 S K029 XII 期	212 S K017 Ⅲ期
212 S K033 Ⅵ～Ⅹ期	212 S K018 Ⅶ期
溝	212 S K019 Ⅳ期以降
212 S D031 XII 期以降	212 S K023 平安時代後期以降
212 S D040 平安時代	212 S K024 XII～Ⅲ期
井戸	212 S K025 V～ⅥA 期
212 S E001 平安時代中期	212 S K026 XII 期
212 S E003 XII 期	212 S K027 ⅥB 期
212 S E004 Ⅸ～Ⅹ期	212 S K030 V～ⅥA 期
212 S E006 XII 期	212 S K032 ⅥA 期
212 S E008 XII 期	212 S K034 奈良時代後期
212 S E012 Ⅹ期	その他の遺構
212 S E013 V 期	212 S X005 Ⅳ期
212 S E020 V～Ⅹ期	
212 S E021 Ⅲ期以降	
212 S E022 Ⅸ期	
212 S E035 XII 期以降	

本稿では、大宰府条坊跡第212次調査の発掘調査で検出された各種遺構群の変遷、また、条坊跡との関連が指摘された東西路の性格と課題について整理しておきたい。

調査区内での最古の遺構は、井戸212 S E013及び土坑212 S K034である。212 S E013はV期には埋没したと考えられる。次期には廃棄に伴うと考えられる土坑が、調査区北側に集中

して存在する。土坑はⅤ～ⅥA期の212SK030から、同期の212SK025、ⅥA期に比定される212SK032、ⅥB期の212SK027の順で構築される。特に212SK027出土の一括廃棄遺物中には搬入品（京都産緑釉陶器）が共伴しており、当該期の資料が少ない中であって注目されるところである。

東西路は、南側側溝が1条、北側側溝が2条検出された。各側溝の主軸方位は212SD010が $N-105^{\circ}-E$ 、212SD015が $N-95^{\circ}-E$ 、212SD028が $N-108^{\circ}-E$ を指し、角度的には212SD010と212SD028が近似する値を示すものの、いずれの側溝も政庁中軸線（狹川1996・1998）に対して直交し得ない点が問題となる。検出された範囲（東西11.5m）の狭さに起因するのか、朱雀大路との交差点に近接するための構造的な問題か、課題は残る。側溝心々間の距離は212SD010と212SD015間は7.0～8.5m、212SD010と212SD028の間は6.0mを計測し、過去の調査例（狹川1996・1998、太宰府市史編纂委員会1992）から見ると規模はかなり大きい。これは隣接する菅原道真邸推定地との関連性が指摘されるところであり、井戸・土坑から出土した舶載陶磁器等供膳具の様相からも、高級官人の居住域であった可能性が高い。道路の構築時期は、212SD015がⅤ～ⅥA期の212SK025を壊して構築されていることから、この辺りの時期が上限年代と考えられる。また、道路面と推定する範囲には、側溝とは切り合い関係がないものの、奈良時代後期の212SK034が作られている。最終埋没時期は出土遺物から212SD010、212SD015がⅫ期、212SD028がやや下ってⅬ期（土坑212SK029・212SK033も同時期と考えられる）、すなわち11世紀末から12世紀前半の時間幅で捉えられ、道路面にはⅬ期の遺物を包含する212SK017が早くも構築され、側溝の埋没とはほぼ同時に道路としての機能が終焉を迎えたことが考えられる。

また、注意されるのは調査区の北側で発見された溝212SD031である。出土した遺物は些少であるがⅫ期の範疇に収まるものが主体であり、条路側溝と同時期の埋没と考えられる。本址と212SD015の間に構築される土坑212SK024、212SK026、212SK026は宅地と道路を区画する何らかの施設の痕跡である可能性も指摘されよう。道路が機能していた時期、すなわちⅦ期～Ⅻ期に比定される井戸と土坑は、検出された条路と調査区の西側に想定される朱雀大路に面しておおむね平行に構築され、その後背地は削平を受けている点が考慮されるものの空閑地となっており、区画内での空間利用の一端が把握された。また、調査区南側から発見された溝212SD040は遺存状態の良好な遺構西側肩から政庁中軸線まで15.25mの距離があり、現段階では朱雀大路西側側溝の可能性を指摘するにとどめる。

調査区で最も新しい遺構は調査区南側で発見された12世紀中葉の段状遺構212条SX005である。主軸方位は $N-13^{\circ}-E$ を指し、政庁中軸線から振れるものの、現段階では朱雀大路と有機的に関連する施設と考えるのが妥当であろう。（香川達郎）

引用・参考文献

- 狭川真一 1996 「Ⅴ. 調査のまとめ」『大宰府条坊跡Ⅸ』太宰府市教育委員会
- 狭川真一 1998 「Ⅵ. 総括」『大宰府条坊跡Ⅹ』太宰府市教育委員会
- 久留米市教育委員会 1984 「ヘボノ木遺跡第10次調査」『東部土地区画整理事業関係文化財調査報告書第3集－久留米市文化財調査報告書第39集』
- 石松好雄・高橋 章 1978 「太宰府出土の瓦について（二）」『研究論集』4 九州歴史資料館
- 森田 勉 1995 「焼塩壺考」「滑石製容器－特に石鍋を中心として」『大宰府陶磁器研究－森田勉氏遺稿集』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会
- 中世土器研究会編 1995 『概説中世の土器陶磁器』真陽社
- 太宰府市史編纂委員会 1992 『太宰府市史 考古資料編』太宰府市
- 鋤柄俊夫 1994 「平安京出土土師器の諸問題」『平安京出土土器の研究』財団法人古代学協会
- 木崎康弘 1988 「九州ナイフ形石器文化の研究」『旧石器考古学』371 旧石器文化談話会

V. 出土遺物の付着物に関する自然科学分析

はじめに

福岡県太宰府市に所在する大宰府条坊跡は、久保ほか（1993）によれば福岡平野最奥部を流れる御笠川と鷺田川に挟まれた低位段丘上に立地する。発掘調査では、奈良時代後期（8世紀後半）から平安時代後期（12世紀前半）に至るまでの井戸や土坑が検出され、さらに平安時代の大宰府条坊の一部と考えられている東西路に伴う側溝なども検出されている。

本稿は、上記の東西路の南側側溝（212S D010）の覆土中より出土した土師器片及び瓦片について、その表面に認められる付着物の由来を明らかにすることを目的とする。付着物は、212S D010出土遺物の約2割程度に認められるもので、遺物の表面の一部または全面に広がり、やや汚れたオリーブ色を呈している。この付着物は、遺物の破断面にも認められていることから、少なくとも遺物の廃棄後に付着したものであることが分かる。また、付着物の認められた遺物の年代は8世紀後半～9世紀代とされているが、212S D010の最終埋没時期は11世紀末～12世紀初頭と考えられていることから、これらの遺物が、側溝の底に溜まった堆積物という環境下で200年以上も埋まっていたことが推察される。このような環境と時間が付着物の形成に関与したとも考えられる。

発掘調査所見では、その外観と色調から付着物を「コケ状物質」とした。このことから、今回の分析にあたり、まず実体顕微鏡などによる観察を行い、付着物が「コケ」や「カビ」などの生物に由来するものであるかどうかを確認した。この観察において、付着物が生物に由来するものではなく、細かな砂を含む泥状の物質であることが看取されたことから、その分析方法として、付着物の断面の薄片作製による偏光顕微鏡観察と付着物の粉末試料によるX線回折分析を行い、付着物に含有される鉱物などを確認する方法を選択した。

1. 試料

試料は、212S D010の覆土より出土した土師器小皿（資料1）、土師器甕（資料2）、平瓦（資料3）、丸瓦（資料4）の各破片の表面に認められた付着物4点である。

212S D010の覆土は、上層が流水による堆積とされている砂層が貫入する暗灰色土の薄層であり、下層は黄褐色粘土や暗褐色土のブロックからなる厚さ約60cmの人為的な埋土とされている。上記資料はいずれも下層の人為的な埋土層から出土している。

資料1は器形・胎土の特徴から8世紀後半～9世紀代の所産とされている。付着物は、オリーブ様の緑色を呈し、器内外面に部分的に砂粒とともに認められる。資料2も資料1と同時期のものとされている。付着物は資料1のものと同様の色調を呈し、器内外面に部分的に

認められるが、内面の方がより顕著である。資料3及び4も上記2点の土器と同時期のものと考えられている。これらの試料の付着物も資料1や2のものと同様の色調を呈し、全面に認められる。

2. 分析方法

(1) 薄片作製観察

試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して薄片を作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用いて観察し、付着物中に含まれる鉱物片などの確認を行った。

(2) X線回折

付着物質を土器片から採取し、105℃で2時間乾燥させた後、メノウ乳鉢で微粉碎した。この微粉碎試料をアセトンを用いてスライドガラスに塗布し、X線回折測定試料とした。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施した（足立1980、日本粘土学会1987）。

検出された物質の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔及び相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をX線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐、未公表）により検索した。

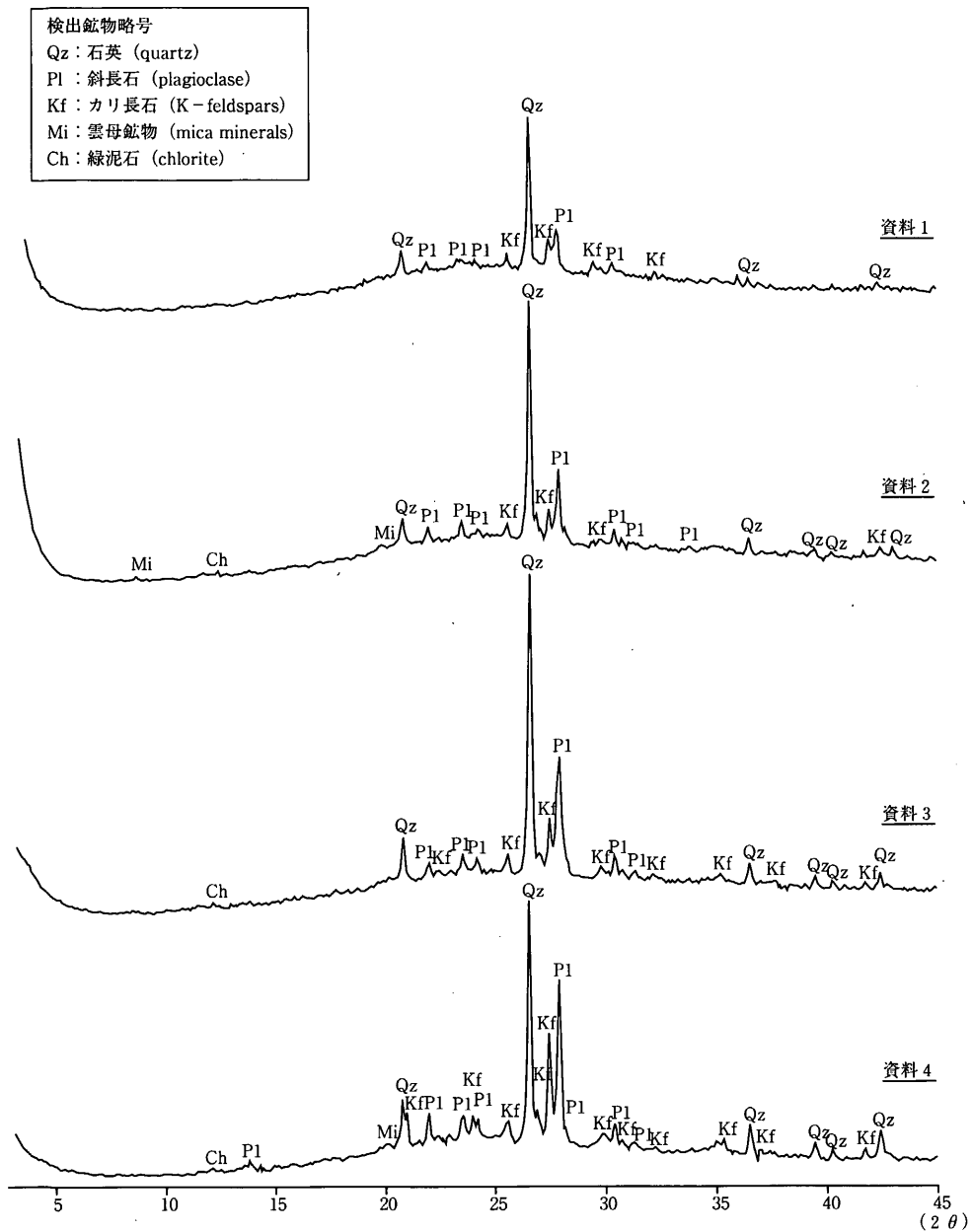
装 置：島津製作所製XD-3A	Time Constant：1.0sec
Target：Cu (K α)	Scanning Speed：2°/min
Filter：Ni	Chart Speed：2 cm / min
Voltage：30KVP	Divergency：1°
Current：30mA	Receiving Slit：0.3mm
Count Full Scale：5,000C / S	Scanning Range：3～45°

3. 結果

(1) 薄片観察

薄片下における特徴は、各資料の付着物ともにほぼ同様であり、資料による違いは認められない。以下に特徴を述べる。

付着物の厚さは、最大で約0.8mm、最小で約0.1mm程度である。付着物中には、石英や長石などの鉱物片や薄手平板状のバブル型火山ガラス片からなる極細粒砂が比較的多く含まれ、さらに風化した黒雲母や角閃石に由来すると考えられるシルトサイズの微細な碎屑物を多量に含んでいる。ただし、基質は、直交ポーラ一下では暗黒となることから、非晶質の物質で



第32図 付着物のX線回折図

ある。

下方ポーラー下での観察では、上記のシルトサイズの碎屑片に緑色を帯びたものが認められるほか、非晶質の基質自体も緑色を帯びている。

(2) X線回折

各資料の付着物のX線回折図を第32図に示した。資料1において検出された鉱物は石英(quartz)、斜長石(plagioclase)、カリ長石(K-feldspars)の3鉱物、資料2では石英、斜長石、カリ長石、雲母鉱物(mica minerals)、緑泥石(chlorite)の5鉱物、資料3では石英、斜長石、カリ長石、緑泥石の4鉱物、資料4では石英、斜長石、カリ長石、雲母鉱物、緑泥石の5鉱物であり、いずれの鉱物も土壌あるいは堆積物中に一般的に含まれている鉱物である。

4. 考察

薄片観察により付着物を構成するのは、細粒の鉱物片と非晶質物質であることがわかった。このうち非晶質物質は、粘土様を呈する付着物の外観と付着物中の碎屑物に火山ガラスが認められたことから、アロフェンやイモゴライトなどの非晶質粘土である可能性がある。したがって、付着物の由来としては、石英や斜長石、角閃石、黒雲母及び火山ガラスなどからなる砂粒やシルト粒を含んだ粘土質の堆積物である可能性がある。太宰府市周辺の地質において、これに類似した特徴を持つ堆積物としてA s o - 4 火砕流堆積物をあげることができる。A s o - 4 火砕流堆積物の粘土化が進行し、石英などの異質物が混入すれば、今回の付着物と同様の物になると考えられる。久保ほか(1993)の地質図では、本遺跡南方の二日市付近にA s o - 4 火砕流堆積物の分布が確認できる。ここで、この堆積物の粘土化したものが、どのような過程を経て土師器や瓦に付着することになったのかが問題となるが、少なくとも検出された遺構内で付着したものではない。順序から推定するとA s o - 4 火砕流堆積物が由来となって土師器や瓦に付着する堆積環境が別であり、大宰府条坊の東西路南側側溝に持ち込まれたものと考えられる。これは大宰府条坊跡の発掘調査成果から総合的に検討されるべき課題であると考えられる。

なお、付着物の緑色を帯びた色調については、以下のように考えられる。前述のように薄片観察では、付着物中に含まれているシルトサイズの碎屑物に緑色を帯びたものがあることと基質にも緑色を帯びた部分があることが認められた。一方、X線回折法によって検出された結晶性鉱物の中に、資料2、3、4で確認された緑泥石がある。X線回折図中ではいずれの資料においても痕跡程度に認められるのみであるが、緑色の因子になり得る可能性がある。

以上のことから、付着物の緑色は、鉱物あるいは非晶質粘土に含まれる金属元素などに由来する可能性がある。緑色の由来となる鉱物及び非晶粘土中の金属元素の詳細な特定には、EPMAやX線分析顕微鏡などの測定ポイントを決められる分析も必要と考えられる。

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

文献

足立吟也 1980 「6章 粉末X線回折法 機器分析のてびき3」 p.64-76 化学同人

久保和也・松浦浩久・尾崎正紀・牧本 博・星住英夫・鎌田耕太郎・広島俊男 1993 20万分の1地質図幅「福岡」
地質調査所

日本粘土学会編 1987「粘土ハンドブック第二版」1289p. 技報堂出版.

条坊第212次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種 別	時 期	地 区
1	212S E001	井戸	平安時代中期	H 4
2	212S K002	土坑	平安時代後期	G 4
3	212S E003	井戸	平安時代後期	M 5
4	212S E004	井戸 S E004→S X005	平安時代中期	E 3
5	212S X005	段状遺構 S X005→暗茶褐色土	XⅡ期以降	3ライン
6	212S E006	井戸	平安時代後期	M 6
7	212S K007	土坑 S K007→S E006	平安時代後期	L・M 6
8	212S E008	井戸 S E008→S E003	平安時代後期	M 5
9	欠番			
10	212S D010	溝	平安時代後期	N・Oライン
11	欠番			
12	212S E012	井戸	平安時代中期	J 4
13	212S E013	井戸 S E013→S E012	奈良時代後期	J 4
14	212S E013	井戸	奈良時代後期	J 4
15	212S D015	溝 S D015→S D028	平安時代後期	Qライン
16	212S K016	土坑	平安時代	J 3
17	212S K017	土坑	平安時代後期	P 4
18	212S K018	土坑	平安時代前期	M 4
19	212S K019	土坑	XⅡ期以降	K 4・5
20	212S E020	井戸	平安時代後期	L 4
21	212S E021	井戸	平安時代後期	G 3
22	212S E022	井戸 S E022→S E020	平安時代前期以降	L 3・4
23	212S K023	土坑	平安時代後期	R・S 6
24	212S K024	土坑	平安時代後期	S 5・6
25	212S K025	土坑 S K025→S D028	平安時代後期	R・S 3・4
26	212S K026	土坑 S K026→S K024	平安時代後期	S 5
27	212S K027	土坑	平安時代後期	S 3・4
28	212S D028	溝	平安時代後期	P・Qライン
29	212S K029	土坑	平安時代後期	Q 5
30	212S K030	土坑 S K030→S K025・S K027・S D031・S K032	奈良時代後期～平安時代前期	S 3・4
31	212S D031	溝 S D031→S E035	平安時代後期	S・Tライン
32	212S K032	土坑 S K032→S K025	平安時代	S 4
33	212S K033	土坑	平安時代前期	Q 6
34	212S K034	土坑	奈良時代	O 3
35	212S E035	井戸	平安時代前期	S・T 5
36	欠番			
37	欠番			
38	欠番			
39	欠番			
40	212S D040	溝	平安時代	E・F 2

条坊第212次調査 出土遺物一覧表

S-1

須恵器	蓋3、坏×皿
土師器	丸碗c、坏a、坏b、小皿a1（ヘラ）、甕a
製塩土器	焼塩壺
黒色土器A	碗
瓦類	破片（格子）
石磁	碗：Ⅳ（1）
石製品	砥石、剥片（黒曜石）

S-1 褐色土

須恵器	坏c
土師器	碗c、丸坏a、坏d、小皿a2、甕a

S-1 明灰褐色土

須恵器	坏、甕
土師器	碗c2、坏a、坏d
黒色土器A	破片

S-2 黒褐色土

須恵器	坏a×皿、蓋3、甕
土師器	碗c、丸坏a、坏a、小皿a1（ヘラ）、小皿a2、甕a
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗
瓦類	破片（縄目）

S-3 黄褐色ブロック土

須恵器	坏c、皿a、蓋3、蓋4、甕b、甕
土師器	碗c、丸坏a、坏a、坏b、坏×皿、小皿a1（ヘラ）、甕a、甕b（角閃石）、精製甕、把手、甕
製塩土器	焼塩壺
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c
瓦器	碗（畿内）
須恵質土器	捏鉢（畿入）
緑釉陶器	碗（東海）、皿（京都）
越州窯系青磁	碗：Ⅰ（1）
白磁	碗：Ⅱ（2）、Ⅳ（3）、Ⅴ（1）、Ⅴ-1（2） 皿：Ⅵ（2） 甕他：広東系（2）、破片（4）
瓦類	平瓦（格子）、丸瓦、破片（縄目）
石製品	破片（滑石）、剥片
土製品	焼土塊

S-3 暗褐色土

須恵器	坏c、蓋3、蓋4、甕e、甕
土師器	碗c1、丸坏a（ヘラ）、坏、小皿a1（ヘラ）、小皿a2、甕a、甕b、甕a（角閃石）
黒色土器A	碗
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁	碗：Ⅰ（1） 甕：破片（1）
白磁	碗：Ⅱ-4a（1）、Ⅴ（1）、Ⅴ-1（1） Ⅺ-6×7（未分類）（1） 皿：破片（未分類）（1） 甕他：小甕（1）、破片（8）
中国陶器	甕：破片（1）
瓦類	破片（縄）

S-3 黒色土

土師器	丸坏（油煙）、甕a（角閃石）
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	碗：Ⅰ（1）
金属製品	釘
その他	種子（モモ）

S-3 黒褐色土

須恵器	蓋3、甕b
土師器	丸坏a、坏d、小皿a1（ヘラ）、甕a
黒色土器A	碗c
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	碗：Ⅲ-1b（1）
須恵質土器	捏鉢
白磁	碗：Ⅴ-1a（1）、Ⅴ-1（1）、Ⅴ×Ⅵ（1）
瓦類	丸瓦
石製品	滑石製石鍋A×B群
土製品	焼土塊

S-4 明灰褐色土

須恵器	坏c、高坏、蓋2、蓋3、甕
土師器	丸碗a、碗c2、坏a（イト混入）、坏d、皿a、小皿a1、甕a、甕×甕
黒色土器A	碗
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁	碗：Ⅰ（1）、Ⅱ（2）
緑釉陶器	碗（京都）
灰釉陶器	壺、破片
白磁	碗：Ⅳ（2）、Ⅴ-1（1）
瓦類	平瓦（格子）、丸瓦（縄目）

S-4 暗灰色土

須 惠 器	坏、蓋3、甕
土 師 器	丸坏a、坏a、小皿a、甕a、甕b
製 塩 土 器	焼塩甕、煎煮土器
黒色土器A	碗a、碗c
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁	碗：I-1a(1)、I(2)
瓦 類	平瓦(格子、文字VI-3)
石 製 品	ナイフ形石器(黒曜石)

S-4 暗灰色粘土

須 惠 器	甕
土 師 器	碗c、皿、甕
黒色土器A	碗
黒色土器B	碗
越州窯系青磁	碗：II(1) 鉢他：碗×皿I(1)

S-4 褐色土

須 惠 器	坏、蓋3、壺f×e、壺(肥後)、甕
土 師 器	碗c2、坏c2、皿、坏×皿a、甕
製 塩 土 器	焼塩甕
黒色土器A	碗c、甕
黒色土器B	碗c2
越州窯系青磁	碗：I(1) 鉢他：碗×皿I(1)
白 磁	壺他：碗×皿(1)、破片(1)
石 製 品	滑石製石鍋(再加工)、把手
瓦 類	平瓦(格子、縄目)
土 製 品	カマド

S-4 暗灰褐色粘土

須 惠 器	坏a、甕
土 師 器	坏c、碗c2、甕a
黒色土器A	碗c、甕
越州窯系青磁	碗：II(1)

S-4 暗灰色粘土

黒色土器A	碗c2
瓦 類	丸瓦(格子)

S-4 覆土

木 製 品	板材、角材
-------	-------

S-6 灰褐色土

須 惠 器	碗×坏、甕
土 師 器	碗c、小皿a1、甕a
黒色土器A	碗c、甕
黒色土器B	碗c
瓦 類	平瓦(格子、縄目)

S-6 暗褐色土

須 惠 器	碗c、坏c、蓋3、甕
土 師 器	碗c、坏a、小皿a1、甕a、甕b、壺、器台、鍋
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁	碗：I(1)、I-1(1) 鉢他：碗×坏I(2)
龍泉窯系青磁	碗：破片(2) 他器種：壺(1)
白 磁	碗：II(1)、II-2(1)、V(1) 壺他：破片(1)
中国陶器	他器種：破片(2)
瓦 類	平瓦(格子、縄目)

S-6 暗褐色砂礫

須 惠 器	坏c(混入)、甕(混入)、壺(混入)
土 師 器	碗c、丸坏a、坏a、坏d(混入)、小皿a1(ヘラ)、甕a、甕b
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗
越州窯系青磁	鉢他：碗×坏(1)
長沙窯系青磁	甕(1)
中国陶器	甕：破片(1)
瓦 類	平瓦(格子、縄目)

S-7 黒褐色土

須 惠 器	坏a、甕
土 師 器	丸坏、坏a、小皿a(イト)、蓋3、甕a、甕b
黒色土器B	碗c
青磁(未分類)	壺(1)
灰釉陶器	皿(東海)
白 磁	碗：V-4c(1)、XI(1) 壺他：破片(2)
瓦 類	平瓦(縄目)、丸瓦(縄目)
土 製 品	瓦玉

S-7 黄褐色土

須 惠 器	坏、壺、甕
土 師 器	坏a、坏c、小坏a、皿a1(ヘラ・イト)、甕a、器台、鍋
黒色土器A	碗、甕
黒色土器B	碗
白 磁	碗：IV-1b(1) 壺他：破片(2)
中国陶器	他器種：破片(3)
瓦 類	平瓦(格子、縄目)

S-8 暗褐色土

須恵器	壺f×d、甕、精製甕
土師器	丸坏a、坏a、坏c、坏d、小皿a1、小皿a2、高坏、蓋c、甕a、甕a（角閃石）、甕b、甕×鍋
黑色土器A	碗
黑色土器B	碗c
越州窯系青磁	I（3）、Ⅲ-1（1）、Ⅲ-1b（1）
灰釉陶器	碗
瓦類	破片（縄目）

S-8 灰褐色土

須恵器	坏×皿
土師器	丸坏a、坏d、甕a
黑色土器A	碗c
黑色土器B	碗
長沙窯系青磁	水注（1）
瓦類	平瓦

S-10 暗灰色土

須恵器	坏a、坏c、小坏c、皿a、蓋c、蓋1、蓋3、高坏、蓋×鉢、蓋e、甕
土師器	碗c1、丸坏a、坏a、皿a、小皿a1、小皿a2、甕
黑色土器A	碗c
黑色土器B	碗c
瓦器	碗
越州窯系青磁	碗：Ⅱ系（1） 皿：Ⅲ（1）
龍泉窯系青磁	碗：I-2（1）
同安窯系青磁	碗：I-b（1）
須恵質土器	捏鉢
緑釉陶器	碗（東海）、碗×皿（東海）
国産陶器	近世陶器（混入）
白磁	碗：Ⅱ（2）、Ⅳ（2）、Ⅶ（1）、V-1（1）、破片（3） 皿：Ⅱ-1（1）、Ⅱ-1a（2）、V-4×Ⅷ-3（1）、未分類（1） 壺他：破片（7）
中国陶器	壺：Ⅳ（1） 他器種：破片（1）
瓦類	平瓦（格子、縄目）、丸瓦（格子、縄目）
石製品	滑石製石鍋、平玉石、磨石

S-10 暗黄褐色土

須恵器	坏c、皿a、高坏、蓋c、蓋2、蓋3、壺e、甕b
土師器	碗c2、丸坏、坏a（へう）、坏d、高坏、小皿a1、皿a（イト）、壺、甕a、甕b、甕（角閃石）、精製甕、器台、把手
製塩土器	焼塩壺
黑色土器B	碗c
瓦器	碗c
越州窯系青磁	碗：I（1）、I-2a（1）、I-2aア（1）、I-2aウ（1）、I-5（1）、Ⅲ-1（1）
緑釉陶器	皿（京都）
灰釉陶器	碗（東海）、壺（東海）
国産磁器	近世磁器小碗（混入）
白磁	碗：Ⅱ（3）、Ⅱ-1a（1）、Ⅳ（5）、Ⅵ-1b（1） 皿：Ⅲ-1（1）、V-2（1）、Ⅵ-1b（1）、破片（2） 壺他：破片（8）
中国陶器	壺：破片（1） 甕：破片（1）
須恵器（輸入）	朝鮮系無釉陶器：壺×甕
瓦類	平瓦（格子、縄目）、丸瓦（格子）
金属製品	銅製鋸
石製品	磨石
土製品	カマド

S-10 暗褐色砂

須恵器	坏a、蓋c、蓋2、蓋3、壺、甕
土師器	碗c、丸坏a、坏a、坏d、皿a、皿（京都）、蓋c、蓋3、甕a
黑色土器A	碗c
黑色土器B	碗
瓦類	丸瓦（格子、縄目）、平瓦（格子、縄目）

S-12 暗褐色土

須恵器	皿、蓋c、蓋2、蓋3、碗c、壺f×d、壺、壺（肥後）、甕
土師器	丸坏c、坏a、坏c、坏d、小坏a、蓋3、高坏、甕a、甕b
黑色土器A	碗1、碗c2
黑色土器B	碗
越州窯系青磁	碗：I（2）、I-2aウ（1）
長沙窯系青磁	碗（2）、水注（2）
輸入陶磁器（未分類）	壺（1）
緑釉陶器	碗（防長、篠）
灰釉陶器	碗
白磁	碗：I-1（1）
瓦類	平瓦（縄目）、丸瓦（格子）
石製品	磨石

S-12 明褐色土

須恵器	坏c、壺×壺
土師器	坏a、坏c、坏d、皿a、蓋3
黒色土器A	破片
灰釉陶器	碗(東海)
瓦類	平瓦(格子、縄目、文字I-2)

S-12 灰色粘土

須恵器	坏、壺f×d、甕a
土師器	坏a、甕a
黒色土器A	碗c
瓦類	平瓦(格子、縄目、文字Ⅷ)、丸瓦(縄目)

S-12 暗褐色粘土

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a、煮炊具
黒色土器A	碗c

S-13 灰褐色土

須恵器	皿a、蓋3、甕
土師器	碗c1、坏a、坏d、小坏a、甕a
黒色土器A	碗c2
緑釉陶器	碗×皿(京都)
瓦類	平瓦(縄目)
土製品	カマド

S-13 暗褐色土

須恵器	坏c、蓋c、蓋3、壺、甕
土師器	坏、皿、壺a、甕a(角閃石)
製塩土器	焼塩壺
黒色土器A	碗c
瓦類	平瓦(格子、文字Ⅷ)、破片(縄目)

S-13 暗灰色土

須恵器	坏a、坏c、蓋c、蓋3、壺d×f、壺蓋、甕、鉢b
土師器	碗c1、坏c、坏d、坏(油煙)、皿a、壺、甕a(角閃石)
製塩土器	焼塩壺
黒色土器A	碗c1
越州窯系青磁	碗：Ⅱ-2b(1)
瓦類	丸瓦(縄目)、平瓦(格子、文字Ⅷ)

S-14 暗褐色土

須恵器	甕
土師器	坏a(混入)、甕
製塩土器	焼塩壺

S-15 暗黄褐色土

須恵器	碗c、坏c、皿a、高坏、蓋1、蓋2、蓋3、蓋c3、壺b、壺e、甕、鉢b
土師器	丸坏、碗a、碗c、坏c、坏d、高坏、皿a、皿b、小皿a1、蓋c、蓋3、甕a、甕a(角閃石)
製塩土器	焼塩壺
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗
瓦器	破片
青磁(未分類)	碗(1)
緑釉陶器	碗
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(格子)、軒丸瓦
金属製品	鉄釘、円板(鉛)
石製品	石鍋(滑石)
土製品	カマド、不明土製品

S-16 暗褐色土

須恵器	碗c、坏×碗a、蓋3、壺e、甕
土師器	丸坏、坏a、皿a、甕a
製塩土器	焼塩壺
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c
国産陶器	近世陶器(混入)
白磁	壺他：破片(1)
瓦類	平瓦(格子)
土製品	土鍾

S-17 黒褐色土

須恵器	坏c、高坏、蓋3、甕
土師器	丸坏a(へら)、坏×皿(イト)、小皿a1
黒色土器B	碗
越州窯系青磁	碗：Ⅱ-2(1)、Ⅰ系(1)
白磁	碗：Ⅱ(1)、Ⅳ(1)、Ⅴ(1)、Ⅴ-1(1)、破片(2)
瓦類	破片(格子)
金属製品	銅塊
石製品	石鍋(滑石)

S-17 黄褐色粘土

須恵器	坏c、蓋3、蓋c、壺、甕
土師器	丸坏a、坏a(イト、へら)、小皿a1(イト<へら)、皿a、皿(京都)、壺、煮炊具
黒色土器A	碗
黒色土器B	碗c2
越州窯系青磁	Ⅰ(1)
緑釉陶器	碗×皿(京都)
国産磁器	近世磁器(混入)
白磁	碗：Ⅱ(1)、破片(1) 皿：Ⅵ-2b(1) 壺他：破片(1)
瓦類	破片(縄目)、硯(瓦を転用)
土製品	焼土塊

S-18 暗褐色土

須恵器	坏c、蓋3、壺f×d、甕
土師器	碗c1、坏a（ヘラ）、坏d、皿（畿内）、甕a
黒色土器	壺×甕
越州窯系青磁	壺：小壺（1）
瓦類	破片（縄目）
土製品	焼土塊

S-19 暗褐色土

須恵器	碗c、壺、甕
土師器	丸坏、碗c、坏d、坏×皿a（イト、ヘラ）、甕
黒色土器A	碗c
瓦器	碗
長沙窯系青磁	碗（1）
白磁	碗：Ⅱ-2×3（1） 壺他：破片（3）
中国陶器	甕：破片（1）
瓦類	平瓦（格子、縄目）、丸瓦（格子）
石製品	石鍋（滑石）、凹石

S-20 暗褐色土

須恵器	坏c、蓋c、蓋3、壺、甕a
土師器	丸碗a、碗c1、坏a（ヘラ）、坏c、皿a（ヘラ）、蓋c、甕a
製塩土器	焼塩壺
黒色土器A	碗c2
黒色土器B	碗
越州窯系青磁	碗：I（2）
長沙窯系青磁	碗×皿（1）
緑釉陶器	碗×皿、碗×皿（東海）
灰釉陶器	碗×皿（東海）
白磁	碗：I（2）
瓦類	破片（縄目）
金属製品	鉄釘

S-20 暗灰色土

須恵器	坏c、蓋c、甕a
土師器	碗c、坏a、坏d、坏c、蓋c、蓋3、甕a
黒色土器A	碗
瓦類	平瓦（縄目）、丸瓦（縄目）
土製品	カマド

S-20 暗灰色粘土

須恵器	甕
土師器	坏a（ヘラ）

S-20・22 暗灰色土

須恵器	坏c、蓋3、壺d×f、甕、円面甕
土師器	丸碗a、碗c、坏a、坏c、坏d、甕a
黒色土器A	坏d
越州窯系青磁	皿：I（1）
瓦類	平瓦、丸瓦（縄目）

S-21 黒褐色土

須恵器	甕
土師器	丸坏、坏a（イト）、小皿a1、甕
瓦器	碗
灰釉陶器	碗×皿
白磁	碗：Ⅱ-1a（1）
金属製品	鉄釘
石製品	丸柄

S-21 黒灰色土

須恵器	蓋c、甕b
土師器	丸坏a（イト）、坏a（ヘラ）、小皿a1（ヘラ、イト）、甕a、器台
瓦器	碗c
越州窯系青磁	碗：Ⅱ系（1）、破片（1）
灰釉陶器	碗×皿（1）
白磁	碗：I（1）、Ⅳ（4）、Ⅴ-4（1）、Ⅴ-2a（1）、Ⅴ-2（1）、Ⅺ（1）破片（7） 皿：Ⅱ-1a（1）、Ⅵ（1） 壺他：破片（1）
中国陶器	甕：破片（1） 他器種：甕Ⅱ（1）
瓦類	丸瓦（格子）
金属製品	鉄釘

S-21 灰色粘土

須恵器	甕
土師器	丸坏a（イト、ヘラ）、坏a（イト）
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗
石製品	石鍋（滑石）

S-21 黄褐色土

土師器	丸坏a（イト、ヘラ）、小皿a（ヘラ）、煮炊具
黒色土器B	破片
瓦器	碗
瓦類	破片（縄目）

S-22 暗褐色土

須恵器	坏a、坏c、蓋c、蓋3、甕a、甕b、壺
土師器	碗c1、坏a、甕a
黒色土器A	碗c2、坏a
越州窯系青磁	碗：I（1）
緑釉陶器	碗（京都）
白磁	碗：I（1）
瓦類	軒丸瓦（鴻臚館式）、丸瓦（縄目）

S-22 暗灰色土

須 恵 器	坏c、蓋4、壺、甕、硯、把手
土 師 器	坏a、坏c、坏d、坏d (漆紙付着)、皿a、甕a
黒色土器A	碗、坏a、甕
越州窯系青磁	碗：Ⅰ(2)、Ⅰ-3(1)
長沙窯系青磁	水注(2)
緑釉陶器	皿(東海)、碗×皿
灰釉陶器	皿
白 磁	碗：Ⅰ(1)
瓦 類	平瓦(縄目)、磚

S-22 灰色粘土

須 恵 器	坏c、蓋3、甕
土 師 器	碗c(金属器模倣)、大碗c、坏a、蓋3、甕a
黒色土器A	碗c
越州窯系青磁	碗：Ⅰ-2aウ(1)
長沙窯系青磁	水注(1)
緑釉陶器	碗(近江)、碗(東海)
白 磁	碗：Ⅰ-1(2)
金属製品	板状製品(銅)

S-22 暗黄褐色土

須 恵 器	蓋3、壺、甕
土 師 器	碗c、坏a、皿a、甕a
瓦 類	破片(縄目)
金属製品	鉄釘

S-22 灰色砂礫

須 恵 器	坏a、皿a
土 師 器	坏
黒色土器A	碗c1
金属製品	板状製品(銅)

S-22 暗灰色砂礫

須 恵 器	坏、甕
土 師 器	坏a、甕
黒色土器A	碗
そ の 他	種子(モモ)

S-22 覆土

木 製 品	板材、角材、曲物
-------	----------

S-23 明褐色土

須 恵 器	坏c
土 師 器	供膳具、煮炊具

S-24 明褐色土

須 恵 器	坏c、甕
土 師 器	坏d
瓦 器	碗c2
白 磁	碗：Ⅳ(2)

S-25 黄褐色ブロック土

須 恵 器	碗c、坏a、坏c、皿a、小皿、高坏、蓋1、蓋3、小壺、鉢b
土 師 器	坏a、坏d、皿a、小皿a1(混入)、甕a、甕(在地)、甕(角閃石)
製 塩 土 器	焼塩壺 煎熬土器
黒色土器A	碗c1
龍泉窯系青磁	碗：破片(2)
白 磁	碗：Ⅳ(2)、Ⅳ-1c(1)、Ⅴ-2b(1)、Ⅴ-1(2)、破片(2) 壺他：破片(8)、塑像×把手？(1)
中国陶器	他器種：破片(1)
瓦 類	平瓦(縄目)、丸瓦
土 製 品	カマド

S-26 黄褐色ブロック土

須 恵 器	供膳具
土 師 器	供膳具
白 磁	碗：Ⅳ-1(1)
瓦 類	破片

S-27 黒褐色土

須 恵 器	坏c、高坏、蓋3、蓋4、蓋c、蓋d×f、甕、鉢b
土 師 器	坏a、坏c、坏d、坏(油煙)、皿a、皿c、小甕、甕a(鍛入)、甕a
製 塩 土 器	焼塩壺
黒色土器A	碗c
緑釉陶器	碗、碗(京都)
瓦 類	平瓦(縄目)

S-27 暗褐色土

須 恵 器	坏c、蓋c、蓋3、壺、甕
土 師 器	碗c、坏a、坏c、坏d、皿a、精製甕、甕a、把手
製 塩 土 器	焼塩壺
瓦 類	平瓦(縄目)
土 製 品	カマド

S-28 黄褐色ブロック土

須 恵 器	坏a、坏c、皿、蓋c、蓋1、蓋3、甕a
土 師 器	碗c、丸坏a、坏a(イト)、坏d、小皿a1(ヘラ)、小皿a(イト)、把手
製 塩 土 器	焼塩壺
黒色土器A	碗c2
瓦 器	碗c2
白 磁	碗：Ⅱ-1×2(1)、Ⅳ(1) 皿：Ⅵ(1) 壺他：破片(5)
瓦 類	平瓦(格子、縄目)、丸瓦(格子、縄目)
金属製品	鉄製鎖

S-28 黒褐色土

須 恵 器	坏c
-------	----

S-28 暗灰色土

須恵器	坏c、蓋3、壺
土師器	丸坏（ヘラ）、坏a、甕b
黒色土器A	碗2
白磁	碗：Ⅱ（1）
瓦類	平瓦（縄目）、丸瓦

S-29 黒褐色土

土師器	甕a、供膳具
-----	--------

S-30 灰褐色土

須恵器	碗c、坏a、坏c、小坏c、皿a、蓋c、蓋2、蓋3、小蓋a3、壺b、鉢b
土師器	坏d、皿a、甕a、瓶
製塩土器	焼塩壺（円筒状）
瓦類	平瓦（縄目）、丸瓦（縄目）
土製品	カマド

S-30 暗灰褐色土

須恵器	坏c1、坏a（手持ちヘラ）、皿a、蓋c、蓋3、蓋4、高坏、壺a×c、壺d×f、壺e、甕b、鉢b
土師器	碗c、坏a、坏c、坏d、高坏、蓋3、甕a
製塩土器	焼塩壺
越州窯系青磁	碗：Ⅰ（1）
長沙窯系青磁	水注（1）
緑釉陶器	碗（京都）、皿（京都）
瓦類	平瓦（縄目）、丸瓦（縄目）
土製品	カマド

S-31 暗灰色土

須恵器	甕
土師器	供膳具、煮炊具
白磁	碗：Ⅱ（1）
瓦類	平瓦（縄目）

S-32 黄褐色ブロック土

須恵器	坏a、坏c、高坏、皿a、蓋3、蓋4、壺a、壺d×f、甕a
土師器	坏a、坏c、坏d、甕a、甕a（角閃石）
製塩土器	焼塩壺
瓦類	破片

S-32 暗灰色ブロック土

須恵器	甕
土師器	坏a、甕a
瓦類	破片（縄目）

S-33 暗灰色土

灰釉陶器	壺
白磁	碗：Ⅱ（1）

S-33 暗褐色土

須恵器	坏c、蓋3、壺f×d、甕a
土師器	碗c1、甕a、把手
黒色土器A	破片
緑釉陶器	碗（京都）
灰釉陶器	壺
白磁	碗：破片（1） 壺他：破片（2）

S-34 暗褐色土

須恵器	甕、供膳具
土師器	供膳具

S-35 黄褐色ブロック土

須恵器	供膳具
土師器	供膳具、煮炊具

S-35 暗褐色土

須恵器	坏c、皿a、蓋3、甕a
土師器	坏（油煙）、坏a×皿a、甕a、甕a（角閃石）
黒色土器A	碗1
黒色土器B	破片
瓦類	破片（縄目）

S-40 褐色粘土

須恵器	坏c
土師器	甕a

茶褐色土

須恵器	坏c、蓋c、蓋3、蓋4、小壺、壺、甕、鉢b
土師器	碗c1、丸坏a、坏b、坏c、坏d、坏c（XⅡ期～）、小皿a1、小皿a2、小皿（京都）、甕a、甕b
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗c
越州窯系青磁	碗：Ⅰ（4）、Ⅱ（4）
龍泉窯系青磁	碗：Ⅰ-4（1）、Ⅱb（1）、Ⅳエ（1） 皿：Ⅰ（2）、破片（1） 他器種：破片（13）
同安窯系青磁	碗：Ⅰ-1b（1）
高麗青磁	碗：Ⅱ（1）
青磁（未分類）	破片（1）
須恵質土器	控鉢
国産陶器	近世陶器（混入）
国産磁器	近世磁器（混入）
白磁	碗：Ⅱ-1c（1）、Ⅳ（15）、Ⅴ-1（2）、Ⅴ-4×Ⅶ（1）、Ⅴ（1）、Ⅺ-1b（1）、破片（22） 皿：Ⅱ-1b（1）、Ⅵ（2）、Ⅸ（2） 壺他：破片（41）
中国陶器	壺：Ⅳ（1） 他器種：破片（1）
須恵器（輸入）	朝鮮系無釉陶器：甕×壺（1）
瓦類	破片（縄目）
石製品	破片（滑石）、平玉石

暗茶褐色土

須 恵 器	坏c、甕b、蓋b（肥後）、蓋c、蓋3、蓋4、小蓋3、壺e、小壺、鉢a、鉢a（搬入）、円面硯
土 師 器	碗c2、碗c（瀬戸内西部）、丸坏a、坏a、坏d、高坏、皿a、小皿a1、器台、甕a、甕（角閃石）、香炉
製 塩 土 器	焼塩甕
黒色土器A	丸碗a、碗c
黒色土器B	碗c、碗（楠葉B）
瓦 器	碗
越州窯系青磁	碗：Ⅱ（1） 皿：Ⅰ-2b（1） 壺：Ⅱ系（1） 鉢他：破片Ⅰ系（2）、Ⅱ系（1）
龍泉窯系青磁	碗：Ⅰ（1） 他器種：破片（5）
同安窯系青磁	碗：Ⅰ-b（1） 皿：Ⅰ-2b（1）
青磁（未分類）	皿（1）
須恵質土器	捏鉢
緑釉陶器	破片
灰釉陶器	皿、壺
国産陶器	近世陶器（混入）
国産磁器	近世磁器（混入）
白 磁	碗：Ⅰ-1（2）、Ⅳ（12）、Ⅴ-1（2）、Ⅴ-2（1）、Ⅴ-4×Ⅳ（1）、破片（24） 皿：Ⅰ-1（1）、Ⅵ（2）、Ⅴ（1）、破片（23）
中国陶器	鉢：破片（1） 他器種：破片（2）
瓦 類	平瓦（縄目）、丸瓦（格子、文字Ⅰ-8a）
金属製品	鉄釘、不明銅製品
土 製 品	カマド

黄褐色土

須 恵 器	坏×碗、甕
土 師 器	碗、丸坏、甕b
黒色土器A	碗1
黒色土器B	碗

灰褐色土

須 恵 器	蓋2
土 師 器	碗、小皿a1
越州窯系青磁	碗：Ⅱ（2） 鉢他：破片（1）
同安窯系青磁	碗：破片（1）
緑釉陶器	破片
灰釉陶器	破片
白 磁	碗：Ⅴ-1（1）、破片（3） 皿：Ⅵ（1）、D群（1） 壺他：鉢（未分類）（1）、破片（14）
中国陶器	他器種：破片（1）、天目（1）
瓦 類	破片（格子）

調査区内

須 恵 器	坏c、高坏、蓋c、蓋3、蓋4、壺a×c、壺f、甕
土 師 器	碗、丸坏、坏a、坏c、坏d、小皿a1、蓋3、甕a、精製甕
製 塩 土 器	焼塩甕
黒色土器A	碗c
黒色土器B	碗
瓦 器	碗c
越州窯系青磁	碗：Ⅰ-2aア（1）、Ⅰ-2aウ×Ⅰ-5（2）、Ⅰ（4）、Ⅱ-2（1）、Ⅱ（1） 壺：Ⅱ系（2） 鉢他：破片（2）
長沙窯系青磁	壺（1）
龍泉窯系青磁	碗：Ⅱ-b（2）、破片（1） 皿：Ⅰ（1）
同安窯系青磁	碗：Ⅰ-b（1）
緑釉陶器	破片
国産陶器	近世陶器
国産磁器	近世磁器
白 磁	碗：Ⅰ-1（1）、Ⅳ-2（3）、Ⅳ（10）、Ⅴ-1（1）、Ⅴ-2（1）、Ⅴ-3（1）、Ⅴ-4b（1）、Ⅵ（1）、破片（1） 皿：Ⅱ-1a（1）、破片（6） 壺他：壺（1）、破片（34）
中国陶器	鉢：Ⅰ-1a（1）、破片（1） 甕：破片（1） 他器種：破片（3）
須恵器（輸入）	朝鮮系無釉陶器：甕×壺（1）
瓦 類	平瓦（縄目）、丸瓦（格子、縄目）
石 製 品	石鍋（滑石）、磨石、砥石
土 製 品	カマド、焼土塊

条坊第212次調査 遺物計測表

S - 1

須質 = 須恵質 長 = 長沙窯系 越 = 越州窯系 単位 = cm () = 復元数値 + a = 残存高

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
石 ・ 砥 石	1	R001	1							細粒花崗岩
土 ・ 丸 碗 c	1	a001		(15.2)	-	(12.4)	ヘラ			

S - 3 黄褐色ブロック土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須質・捏鉢	1	R001	1	(30.7)	11.3	(10.6)				
須質・捏鉢	2	R002	2	-	-	(11.2)				
瓦 器 ・ 碗	1	R004	3	-	2.8 + a	-				畿内系
緑 釉 ・ 碗	1	R003	4	-	2.7 + a	-				猿投窯
緑 釉 ・ 皿	1	R005	5	-	2.6 + a	-				
土 製 品	1	R006	写真							焼土塊
土 ・ 小 皿 a	1	a001		(8.8)	-	(6.6)	ヘラ	-	○	

S - 3 暗褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
白磁・碗Ⅱ - 4a	1	R001	6	-	3.5 + a	-				
白磁・碗Ⅺ	1	R002	7	-	3.2 + a	-				
白 磁 ・ 皿	1	R003	8	-	1.6 + a	-				未分類

S - 3 黒色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
鉄 ・ 釘	1	R001	9							

S - 3 黒褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須質・捏鉢	1	R003	10	-	5.7 + a	-				
白磁・碗 V × VI	1	R002	11	-	2.3 + a	4.8				
越・碗Ⅲ 1b	1	R001	12	-	2.6 + a	-				

S - 4 明灰褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土 ・ 碗 c 2	1	R001	1	(14.6)	6.3	8.0				
緑 釉 ・ 碗	1	R002	2	-	1.2 + a	(6.2)				京都系

S-4 暗灰色土

器 種	番号	R-	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
瓦・平瓦	1	R001	3							文字VI-3
ナイフ形 石 器	1	R002	第31図 13							黒曜石
土・丸碗a	1	a001		(12.4)	3.8	(9.8)	ヘラ	○		

S-4 褐色土

器 種	番号	R-	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須・壺	1	R001	4	(16.2)	9.9+a	-				肥後
石・石鍋	1	R002	5	-	-	-				滑石 転用品

S-4 覆 土

器 種	番号	R-	図番号	長 さ	幅	厚 さ	ほ ゑ	備 考
木・板 材	1	R001	11	91.6	22.4	4.0		井戸枠材
板 材	2	R002	12	90.6	23.2	2.4		井戸枠材
角 材	1	R003	13	69.2	6.0	5.4~4.2	○	井戸枠材

S-6 灰褐色土

器 種	番号	a-	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土・小皿a1	1	a001		10.0	1.6	7.6	ヘラ	○	○	

S-6 暗褐色土

器 種	番号	R-	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土・甕	1	R001	1	(29.0)	7.0+a	-				
土・丸底坏a	1	a001		(16.8)	(3.9)	(12.2)	ヘラ	○	○?	

S-6 暗褐色砂礫

器 種	番号	a-	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土・丸底坏a	1	a001		(17.2)	(4.3)	(14.0)	ヘラ			
土・丸底坏a	2	a002		(15.4)	3.2	10.6	ヘラ		○	
土・小皿a1	1	a003		10.8	1.7	8.2	ヘラ			

S-7 黒褐色土

器 種	番号	R-	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
灰 釉・皿	1	R001	1	-	1.6+a	-				黒笹K90窯式
瓦・瓦 玉	1	R002	2							

S-7 黄褐色土

器 種	番号	R-	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
黒 A・甕	1	R001	3	(12.4)	6.4+a	-				
土・小皿a1	1	a001		9.0	1.2	6.3	糸	○	○	
土・小皿a1	2	a002		10.2	1.4	7.2	ヘラ	○	○	

S-8 暗褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土・高 坏	1	R003	7	-	6.4 + a	-				砥石に転用
越・碗 Ⅲ-1	1	R001	8	-	2.6 + a	5.2				
越・碗 Ⅲ-1b	1	R002	9	-	4.7 + a	-				
土・小皿a1	1	a001		(10.4)	1.5	(7.8)	ヘラ	○	○	
土・丸底坏a	1	a002		(16.4)	-	(14.4)	ヘラ			
土・丸底坏a	2	a003		15.0	3.1	17.3	ヘラ	○		

S-8 灰褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
長・水注	1	R001	10	-	-	(14.7)				

S-10 暗灰色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
緑釉・碗	1	R002	1	-	1.4 + a	(9.6)				東海系
緑釉・碗×皿	1	R003	2	-	3.1 + a	-				猿投窯
越・皿 Ⅲ	1	R001	3	-	-	(7.3)				
石・平玉石	1	R004	4							
土・小皿a	1	a001		9.0	1.4	7.1	ヘラ	○	○	

S-10 暗黄褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
緑釉・皿	1	R002	5	-	1.3 + a	-				京都産
緑釉・皿	2	R003	6	-	1.3 + a	(6.4)				京都産
灰・碗	1	R005	7	(16.2)	5.1	(7.8)				東山H105号窯式
灰・壺	1	R001	8	-	2.4 + a	(9.9)				猿投窯産
白磁・皿 Ⅲ-1	1	R006	9	-	1.9 + a	-				
越・碗Ⅲ1	1	R004	10	-	2.3 + a	(6.6)				
銅・鉢	1	R007	11							
土・小皿	1	R008								分析資料1
土・甕	1	R009								分析資料2
瓦・平瓦	1	R010								分析資料3 縄目
丸 瓦	1	R011								分析資料4 縄目?

S-10 暗褐色砂

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土・皿	1	R001	12	-	1.3 + a	-				京都系
土・丸底坏a	1	a001		(15.4)	2.7	(12.4)	ヘラ	○		

S-12 暗褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須 ・ 壺	1	R006	1	(52.0)	14.0 + a	-				
須 ・ 壺	1	R005	2	11.2	9.8 + a	-				肥後
緑釉 ・ 椀	1	R004	3	12.4	4.5	6.2				篠
緑釉 ・ 椀	2	R002	4	-	1.4 + a	(7.0)				防長
緑釉 ・ 椀	3	R003	5	-	2.6 + a	-				
陶 ・ 壺	1	R001	6	(9.5)	1.4 + a	-				未分類

S-12 明褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
灰 ・ 椀	1	R001	7	-	1.9 + a	(7.0)				虎渓山1号窯式
瓦 ・ 平瓦	1	R002	8							文字Ⅰ-2

S-12 灰色粘土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
瓦 ・ 平瓦	1	R001	9							文字Ⅲ

S-13 灰褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
緑釉 ・ 椀 × 皿	1	R001	1	-	1.7 + a	5.0				京都産

S-13 暗灰色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須 ・ 蓋 3	1	R009	2	(15.2)	1.1 + a	-				
須 ・ 蓋 3	2	R010	3	(14.2)	1.2 + a	-				
須 ・ 壺 蓋	1	R008	4	(15.0)	3.2 + a	-				
須 ・ 鉢 b	1	R007	5	(19.6)	3.2 + a	-				
土 ・ 坏 d	1	R003	6	(13.6)	3.1	(7.4)				
土 ・ 皿 a	1	R004	7	(16.6)	1.7	(12.4)	ヘラ			底部ヘラ記号有り
土 ・ 甕 a	1	R005	8	(20.6)	5.2 + a	-				
土 ・ 甕 a	2	R006	9	-	5.9 + a	-				
土 ・ 小 壺	1	R002	10	-	1.7 + a	(6.0)				
黒 A ・ 椀	1	R001	11	-	3.7 + a	9.4				
瓦 ・ 平瓦	1	R011	12							文字Ⅲ

S-15 暗黄褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
二彩・碗	1	R003	13	-	-	-				
越・碗	1	R002	14	-	1.8 + a	(5.2)				未分類
土製品	1	R001	15	-	3.2	2.8				器種不明(土師質)
鉄・釘	1	R004	16	長 5.0						
鉛・円	1	R005	17	径 3.5	厚 0.6	重 61.32				
須・蓋 c 3	1	c 001		(11.6)	2.3	-				

S-16 暗褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土製品	1	R001	4							土鍾

S-17 黒褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
越・碗	1	R001	5	-	1.1 + a	-				I 類系
銅・塊	1	R002	写真							

S-17 黄褐色粘土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須・甕 × 壺	1	R003	6							転用甕
土・皿	1	R002	7	-	1.5 + a	-				京都系
緑釉・碗 × 皿	1	R001	8	-	1.3 + a	(6.2)				京都系
土・丸底坏 a	1	a 001		16.0	4.1	13.6	ヘラ			
土・小皿 a 1	1	a 002		(8.8)	1.1	(7.2)	ヘラ	○	○	
土・小皿 a 1	2	a 003		(10.2)	1.0	(8.0)	ヘラ	○	○?	
土・小皿 a 1	3	a 004		(11.0)	1.3	(8.6)	ヘラ	○	○	

S-18 暗褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
越・小壺	1	R001	9	(3.6)	1.7 + a	-				未分類

S-19 暗褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
石・凹石	1	R001	10							

S-20 暗褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
緑釉・碗 × 皿	1	R001	1	-	1.3 + a	(6.5)				東海系?
灰・碗 × 皿	1	R002	2	-	2.5 + a	(7.6)				虎溪山 1 号窯式

S-20 暗灰色粘土

器 種	番号	a -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土・坏 a	1	a 001		12.4	2.9~3.4	6.8	ヘラ	○	○	

S-21 黒褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
石・丸 軋	1	R 001	3							石質-サヌカイト

S-21 黒灰色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
鉄・釘	1	R 001	4							
土・丸底坏 a	1	a 001		(15.4)	-	(12.8)	ヘラ			
土・小皿 a1	1	a 002		(9.0)	1.1	7.0	糸	○	○	

S-21 灰色粘土

器 種	番号	a -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土・丸底坏 a	1	a 001		(16.2)	(3.8)	(11.4)	ヘラ		○?	
土・坏 a	1	a 002		(16.0)	(2.9)	(11.2)	糸		○?	

S-21 黄褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
土・小皿 a1	1	a 001		10.6	1.5	8.5	ヘラ	○	○	

S-22 暗褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
瓦・丸 瓦	1	R 001	5							鴻臚館式
土・坏 a	1	a 001		12.0	3.3	7.4	ヘラ			
黒 A・碗 c2	1	c 001		(15.4)	5.8	7.8	ヘラ			
黒 A・碗 c2	2	c 002		(15.8)	6.6~6.9	7.9	ヘラ			

S-22 暗灰色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
緑 釉・皿	1	R 004	6	(15.0)	2.6	(6.6)				猿投窯
緑 釉 × 皿	1	R 002	7	-	1.2 + a	-				二彩?
碗 × 皿	2	R 003	8	-	0.9 + a	-				
二彩陶・碗	1	R 001	9	-	2.3 + a	-				
土・坏 a	1	R 005	写真	-	-	-				漆紙付着

S-22 灰色粘土

器 種	番号	R-	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
緑 釉 ・ 碗	1	R002	10	-	1.6 + a	(8.0)				近江産
緑 釉 ・ 碗	2	R001	11	-	1.3 + a	(8.0)				猿投窯
緑 釉 ・ 碗	3	R003	12	-	1.2 + a	-				
銅 ・ 板 状	1	R004	13							

S-22 暗黄褐色土

器 種	番号	R-	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
鉄 ・ 釘	1	R001	14							

S-22 覆 土

器 種	番号	R-	図番号	長 さ	幅	厚 さ	ほ ぞ	備 考
木 ・ 板 材	1	R001	15	58.0	28.0	2.6		井戸枠材
板 材	2	R002	16	68.6	27.8	2.6		井戸枠材
板 材	3	R003	17	68.0	31.8	2.4		井戸枠材
角 材	1	R004	18	72.6	7.8	11.8		井戸枠材
曲 物	1	R005	19	径 46.6		14.2		水澄し

S-25 黄褐色ブロック土

器 種	番号	R-	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須 ・ 蓋 3	1	R002	1	(17.2)	1.9 + a	-				
須 ・ 蓋 3	2	R003	2	(19.0)	1.7 + a	-				
須 ・ 碗 c	1	R004	3	-	3.2 + a	(10.0)				
須 ・ 碗 c	2	R008	4	-	1.6 + a	-				
須 ・ 皿 a	1	R001	5	(18.6)	2.4	(15.4)				
須 ・ 高 杯 l	1	R007	6	-	1.7 + a	-				
須 ・ 小 壺	1	R005	7	-	3.5 + a	(8.6)				
須 ・ 鉢 b	1	R006	8	(18.0)	2.6 + a	-				
土 ・ 杯 d	1	R011	9	-	1.3 + a	(8.0)	ヘラ			
土 ・ 皿 a	1	R012	10	(13.2)	1.4	(9.6)	ヘラ	○		
土 ・ 甕 a	1	R010	11	(26.0)	4.6 + a	-				
黒A・碗c1	1	R009	12	-	2.2 + a	(7.4)				
白磁・塑像	1	R013	13							
土・小皿a1	1	a001		(9.6)	-	(7.6)				

S-27 黒褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須・蓋 3	1	R005	1	(16.0)	2.4	-				
須・蓋 3	2	R004	2	(14.8)	1.7	-				
須・蓋 3	3	R003	3	(16.4)	1.6 + a	-				
須・蓋 4	1	R006	4	-	2.5 + a	-				
須・坏 c	1	R008	5	(13.6)	5.6	(8.0)				
須・坏 c	2	R007	6	12.7	5.4	7.5				
須・鉢 b	1	R009	7	-	4.9 + a	-				
土・坏 a	1	R021	8	(13.4)	3.4	8.6	ヘラ	○		
土・坏 a	2	R017	9	(12.6)	3.2	7.0	ヘラ	○		
土・坏 a	3	R016	10	(12.6)	3.0	7.2	ヘラ	○		
土・坏 a	4	R013	11	(13.2)	3.3	(8.0)	ヘラ	○		
土・坏 a	5	R015	12	(13.4)	3.4	(7.8)	ヘラ	○		
土・坏 a	6	R014	13	(13.2)	3.2	(6.8)	ヘラ	○		
土・坏 a	7	R024	14	(14.0)	3.7	7.8		○		
土・坏 a	8	R023	15	(14.4)	3.8	8.0	ヘラ	○		
土・坏 a	9	R020	16	(13.2)	3.9	6.6	ヘラ	○		
土・坏 a	10	R019	17	(12.6)	3.8	7.6	ヘラ	○		
土・坏 a	11	R018	18	(13.8)	(3.4)	(6.8)	ヘラ	○		
土・坏 a	12	R022	19	(12.2)	3.8	7.6	ヘラ	○		
土・皿 a	1	R025	20	(13.3)	1.3 + a	(9.0)	ヘラ	○		
土・皿 a	2	R028	21	(14.0)	1.7	(10.0)	ヘラ	○		
土・皿 a	3	R029	22	(14.4)	1.7	(10.2)	ヘラ	○		
土・皿 a	4	R026	23	(13.8)	1.7	(10.4)	ヘラ	○		
土・皿 a	5	R027	24	(13.6)	1.5	(10.0)	ヘラ	○		
土・甕 a	1	R010	25	(23.4)	6.6 + a	-				
土・甕 a	2	R011	26	(18.4)	6.7 + a	-				
土・甕 a	3	R012	27	-	5.4 + a	-				
黒 A・碗	1	R031	28	(18.2)	6.2 + a	-				
黒 A・碗 c	2	R030	29	-	4.4 + a	-				
緑釉・碗	1	R001	30	(13.0)	3.3	5.8				京都産
緑釉・碗	2	R002	31	-	0.8 + a	-				京都産

S-27 暗褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須 ・ 坏	1	R004	32	(13.4)	-	-				
須 ・ 壺	1	R005	33	(11.0)	-	-				
土 ・ 坏 a	1	R002	34	(13.0)	(3.5)	7.0	ヘラ			
土 ・ 坏 a	1	R001	35	-	2.6 + a	8.4	ヘラ	○		
土 ・ 椀 c	1	R003	36	-	3.5 + a	(8.8)				

S-28 黄褐色ブロック土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
鉄 ・ 鎖	1	R001	18							

S-30 灰褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	内底ナデ	板状圧痕	備 考
須 ・ 蓋 c	1	R011	1	-	1.5 + a	-				
須 ・ 小蓋 a3	1	R006	2	(12.0)	2.3 + a	-				
須 ・ 蓋 2	1	R010	3	(14.0)	1.2 + a	-				
須 ・ 蓋 3	1	R004	4	-	1.3 + a	-				
須 ・ 蓋 3	2	R008	5	-	1.9 + a	-				
須 ・ 蓋 3	3	R009	6	-	1.8 + a	-				
須 ・ 小坏 c	1	R007	7	(10.4)	4.1	(6.0)				
須 ・ 坏 c	1	R002	8	(14.0)	3.7	(10.4)				
須 ・ 椀 c	1	R003	9	-	2.7 + a	(11.8)				
須 ・ 皿 a	1	R001	10	(18.0)	2.4	(14.0)				
須 ・ 鉢 b	1	R005	11	-	4.0 + a	-				

S-30 暗灰褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	ナ デ	板状圧痕	備 考
須 ・ 蓋 c	1	R012	12	-	1.3 + a	-				
須 ・ 蓋	1	R017	13	(12.0)	1.6 + a	-				
須 ・ 蓋 3	1	R016	14	(14.0)	1.3 + a	-				
須 ・ 蓋 3	2	R015	15	(16.0)	2.0 + a	-				
須 ・ 蓋 3	2	R014	16	(12.0)	1.7 + a	-				
須 ・ 蓋 4	3	R013	17	(17.4)	2.1 + a	-				
須 ・ 坏 c 1	1	R009	18	(14.0)	5.5	8.3				
須 ・ 皿 a	1	R008	19	15.4	1.9	13.3				
須 ・ 高 坏	1	R010	20	(14.0)	2.2 + a	-				
須 ・ 甕	1	R020	21	18.2	3.9 + a	-				
須 ・ 甕	2	R019	22	-	7.1 + a	-				
須 ・ 壺	1	R018	23	-	4.3 + a	-				
須 ・ 壺 e	1	R011	24	-	3.4 + a	-				
土 ・ 坏 a	1	R004	25	(13.2)	3.1	7.4	ヘラ	○		
土 ・ 坏 a	2	R003	26	(13.2)	2.5	(8.7)	ヘラ	○		
土 ・ 碗 c	1	R001	27	(15.0)	5.7	7.6	ヘラ			底部ヘラ記号有り
土 ・ 碗 c	2	R002	28	-	2.6 + a	(8.6)	ヘラ			
土 ・ 高 坏	1	R005	29	-	1.5 + a	-				
土 ・ 甕 a	1	R006	30	-	4.4 + a	-				
土 ・ 甕 a	2	R007	31	-	5.6 + a	-				
焼 塩 壺	1	R023	32	-	7.3 + a	-				
緑 釉 ・ 碗	1	R024	33	-	2.6 + a	-				京都産
緑 釉 ・ 皿	1	R021	34	7.0	0.7 + a	-				京都産
長 ・ 水 注	1	R022	35	-	3.9 + a	-				

S-33 暗褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	ナ デ	板状圧痕	備 考
緑 釉 ・ 碗	1	R001	19	-	3.2 + a	(6.2)				洛西産

茶褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	ナ デ	板状圧痕	備 考
土 ・ 小 皿	1	R001	1	-	1.8 + a	-				京都産
須賀・捏鉢	1	R002	2	-	5.6 + a	-				
龍・碗Ⅳエ	1	R003	3	-	1.3 + a	5.8				

暗茶褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	ナ デ	板状圧痕	備 考
須 ・ 蓋 b	1	R 002	4	-	$2.7 + a$	-				肥後
須 ・ 壺 e	1	R 003	5	-	$6.4 + a$	-				
土 ・ 坏	1	R 004	6	-	$1.4 + a$	(6.1)				瀬戸内西部系
土 ・ 香炉身	1	R 001	7	-	$2.6 + a$	-				
黒 B ・ 碗	1	R 005	8	-	$0.9 + a$	-				楠葉B類
瓦 ・ 平瓦	1	R 006	9							文字 I - 8 a
鉄 ・ 釘	1	R 007	10							
土 ・ 小皿 a1	1	a 001		8.9~9.3	1.2~1.6	7.1~7.5	ヘラ	○	○	
土 ・ 小皿 a1	2	a 002		8.8	1.2	7.7	ヘラ	○	○	
土 ・ 小皿 a1	3	a 003		(9.4)	1.3	(7.4)	ヘラ	○	○	

灰褐色土

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	ナ デ	板状圧痕	備 考
白 磁 ・ 鉢	1	R 001	11	-	$3.4 + a$	-				未分類

調査区

器 種	番号	R -	図番号	口 径	器 高	底 径	底部切り離し	ナ デ	板状圧痕	備 考
須 ・ 壺 a × c	1	R 001	12	(12.6)	$4.9 + a$	-				
土 ・ 小皿 a1	1	a 001		(9.0)	1.1	7.2	ヘラ	○	○	

圖 版



調査区全景 (写真上が西)



調査区全景 (北から)

図版 2



東西路全景
(写真上が南)



東西路212 SD 010全景
(東から)



東西路212 SD 015・28全景
(東から)

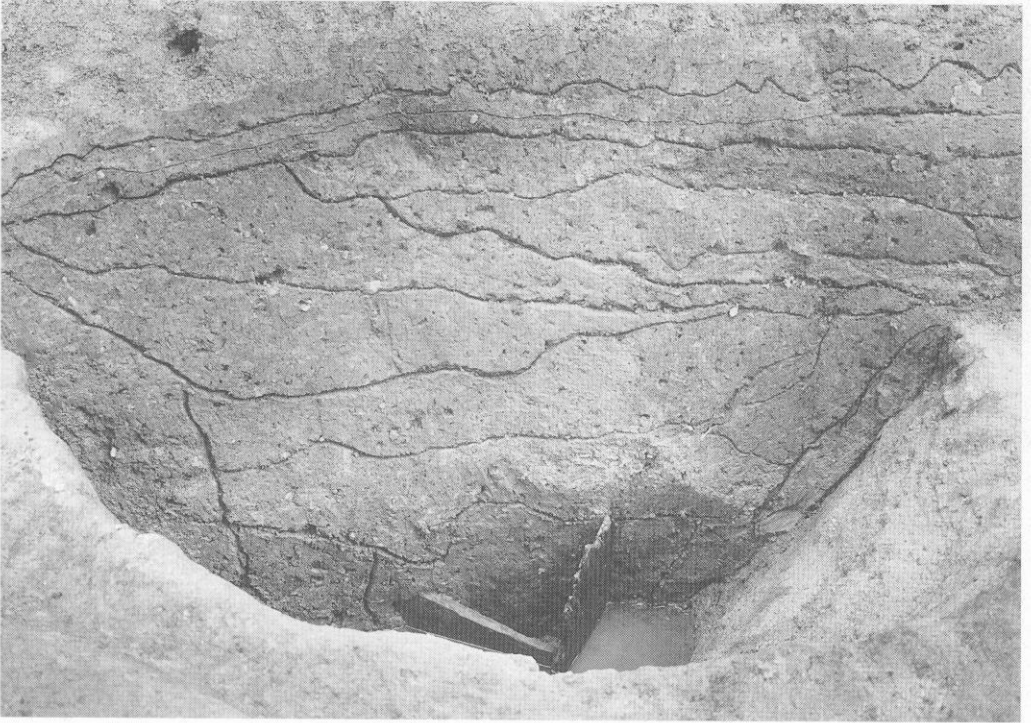


212 SD 040全景（北から）

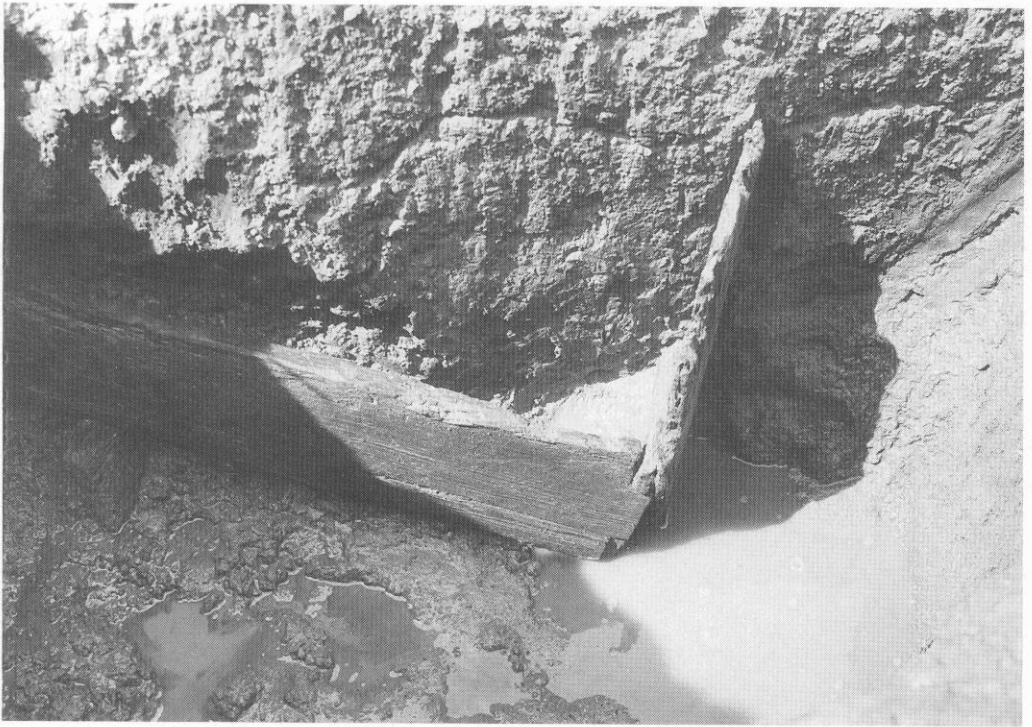


212 SD 031全景（東から）

図版 4



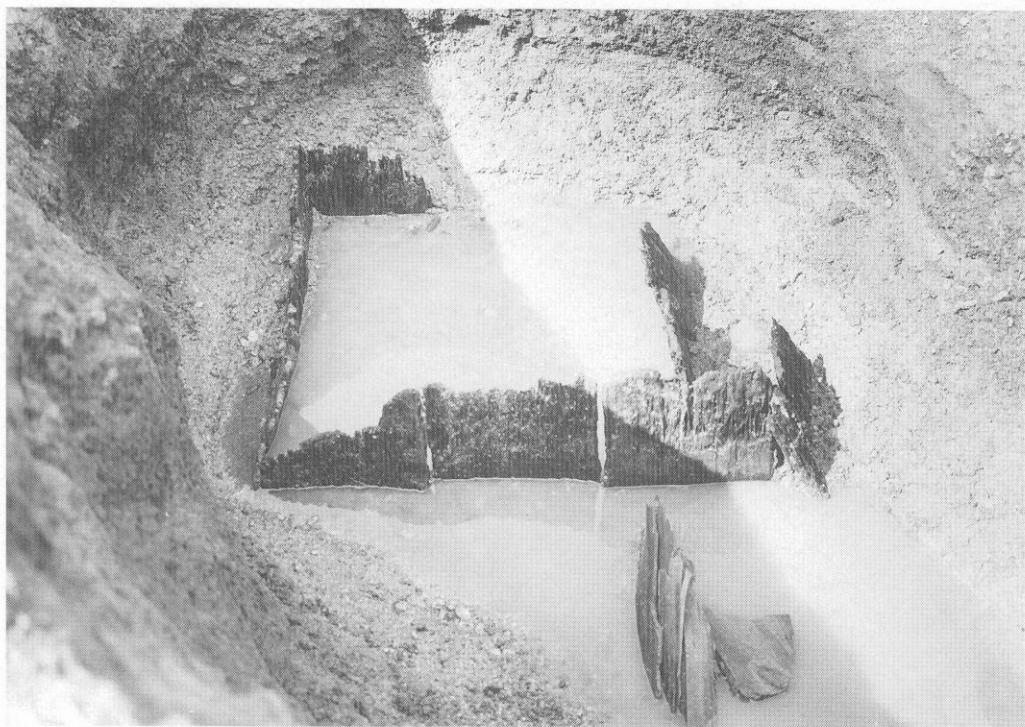
212 SE 004全景（北から）



212 SE 004井戸枠（北から）



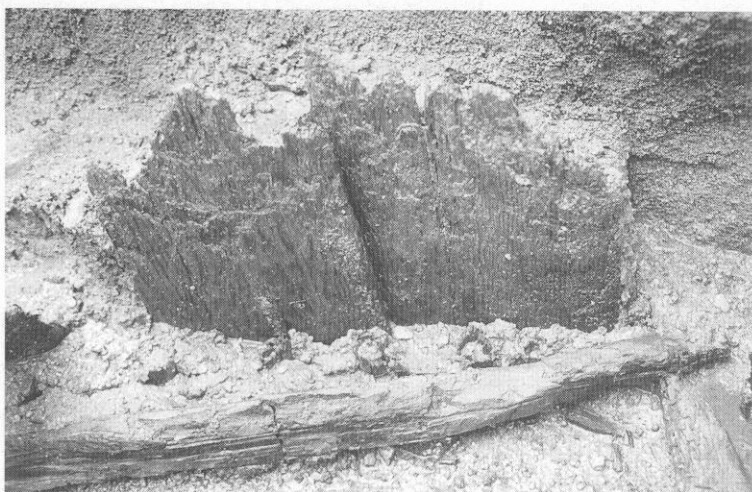
212 SE 012全景（北から）



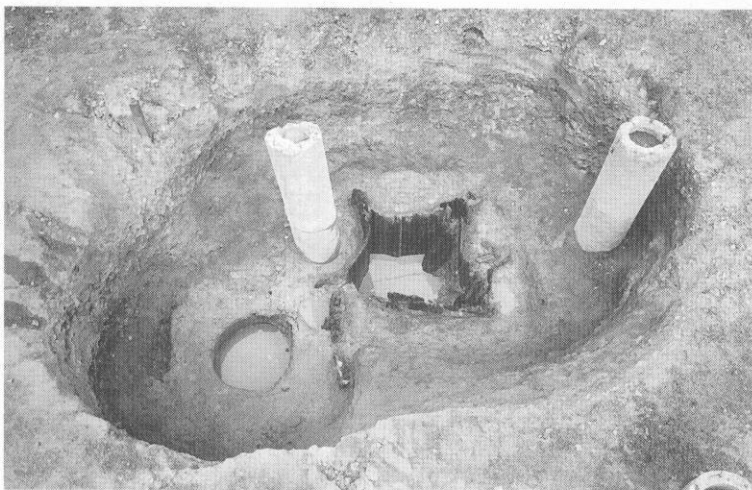
212 SE 012井戸枠（南から）



212 SE 021 全景
(北から)



212 SE 021 井戸枠
(東から)



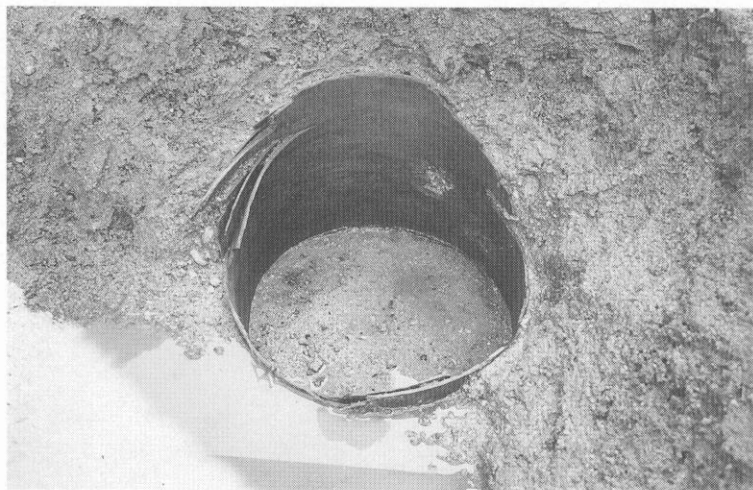
212 SE 020・022 全景
(西から)



212 SE 020 井戸枠
(西から)



212 SE 022 井戸枠
(南から)



212 SE 022 井戸底
水澄し (北から)



212 SK 025 全景
(西から)



212 SK 027 全景
(西から)



212 SK 030 全景
(写真上が西)



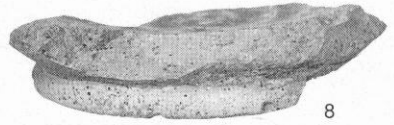
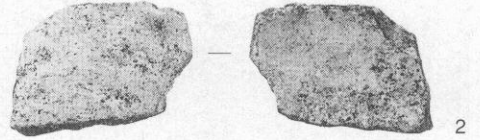
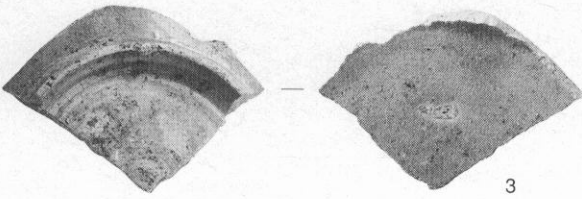
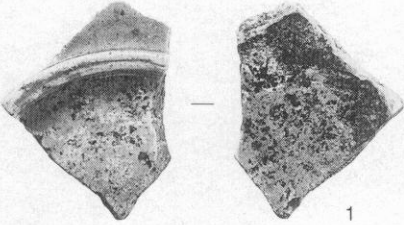
212 SX 005全景（北から）



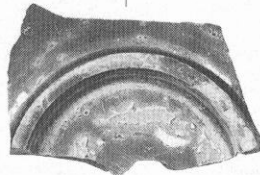
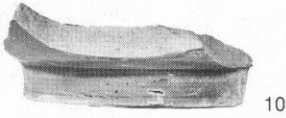
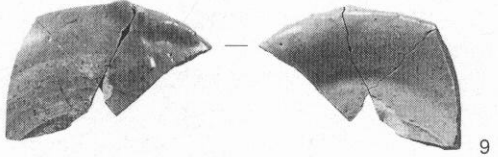
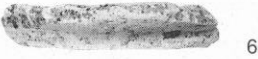
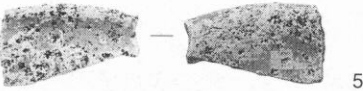
212 SX 005全景（北から）

图版 10

SD 010 暗灰色土



SD 010 暗黄褐色土

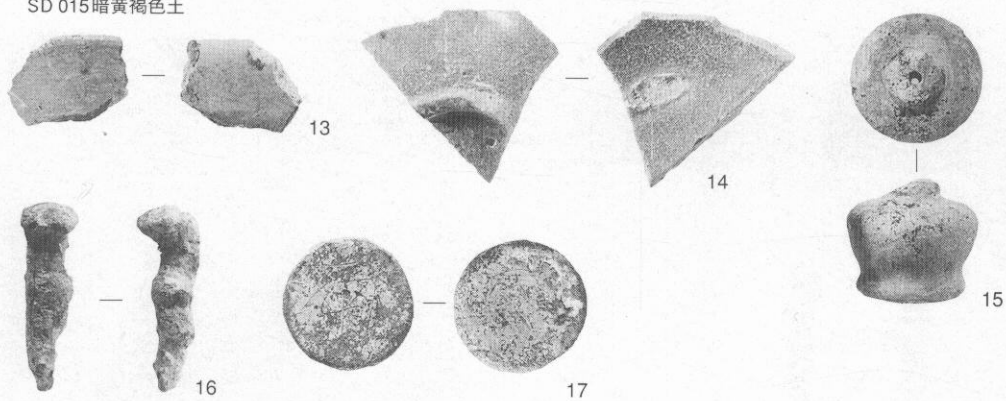


SD 010 暗褐色砂

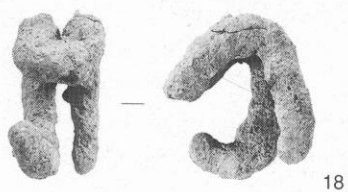


212 SD 010 出土遺物

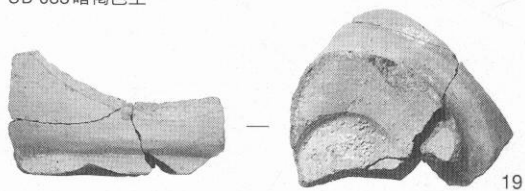
SD 015 暗黄褐色土



SD 028 黄褐色ブロック土

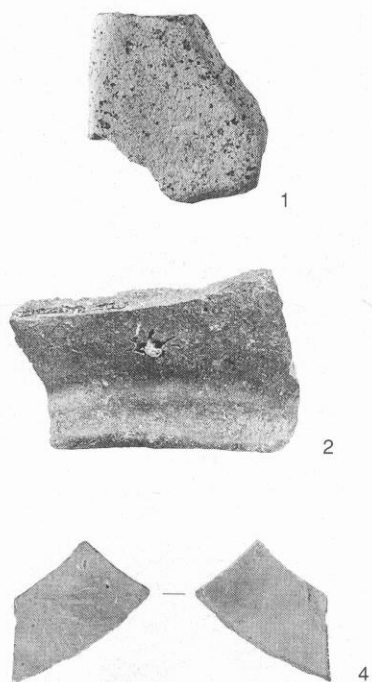


SD 033 暗褐色土

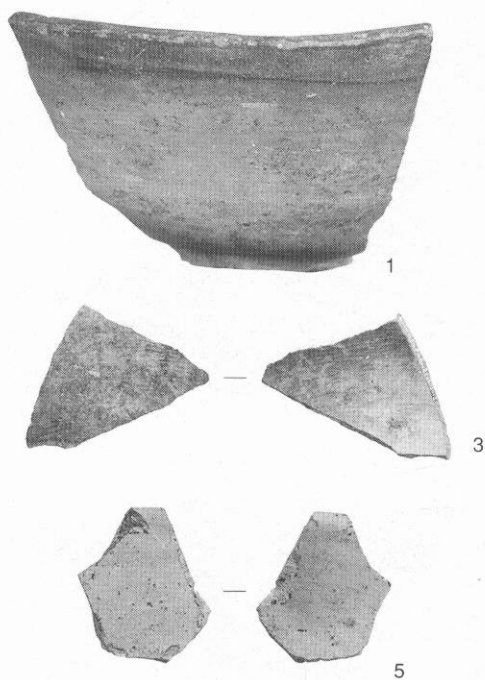


212 SD 015・028・033 出土遺物

SE 001



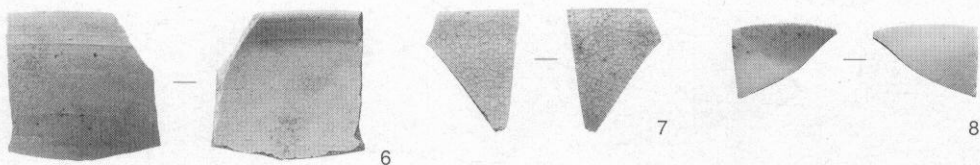
SE 003 黄褐色ブロック土



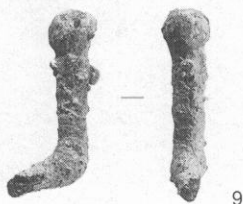
212 SE 001・003 出土遺物

図版 12

SE 003 暗褐色土



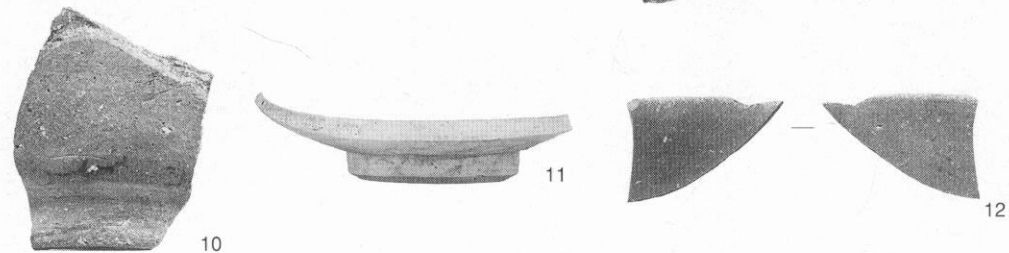
SE 003 黒色土



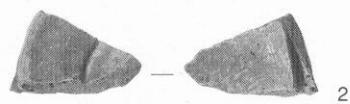
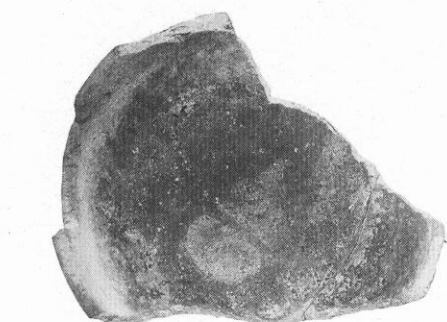
SE 003 黄褐色ブロック土



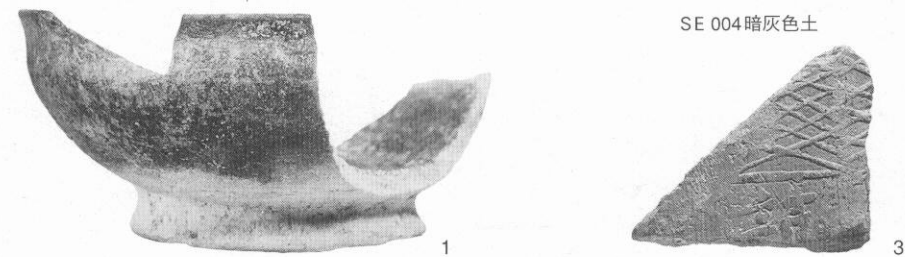
SE 003 黒褐色土



SE 004 明灰褐色土

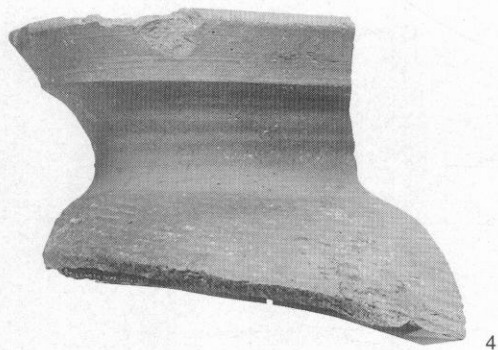


SE 004 暗灰色土

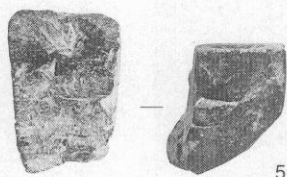


212 SE 003・004 出土遺物

SE 004 褐色土

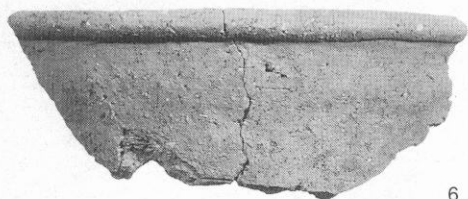


4



5

SE 006 暗褐色土

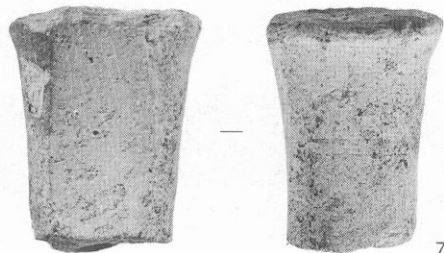


6

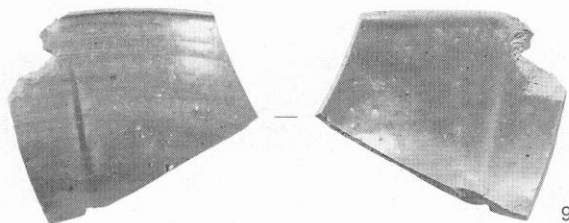
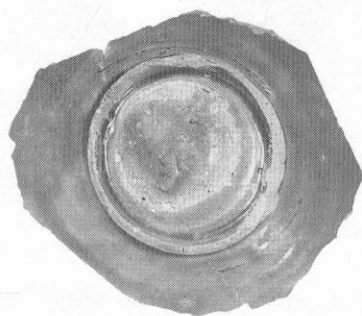


8

SE 008 暗褐色土



7

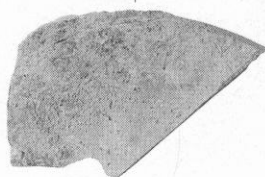


9

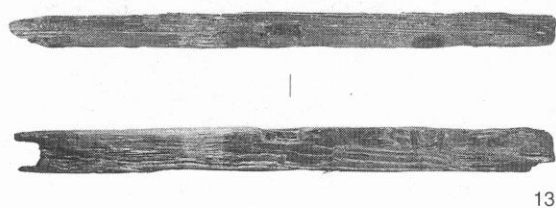
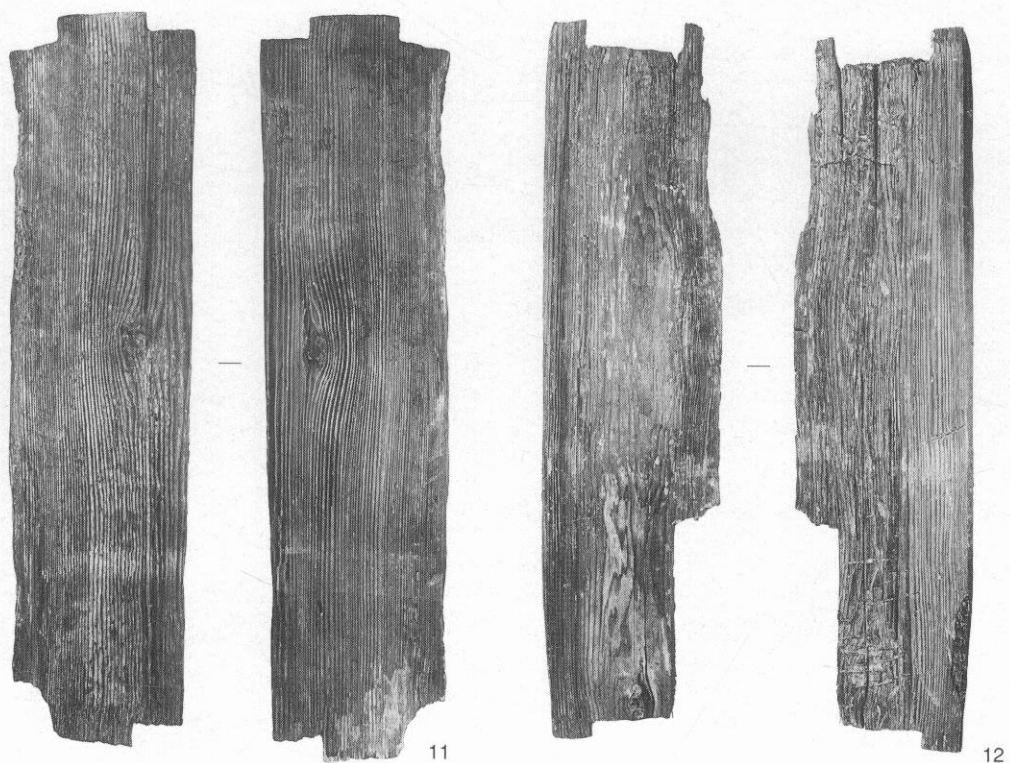
SE 008 灰褐色土



10



図版 14

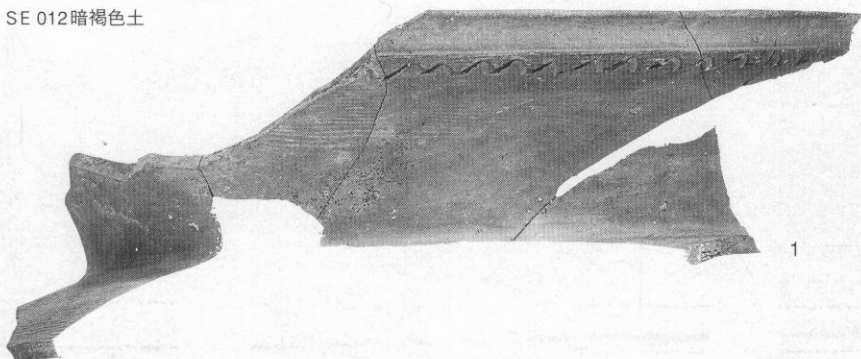


13 ホゾ穴部分



11+12木組み状態

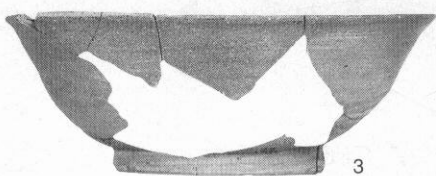
SE 012暗褐色土



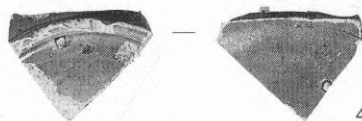
1



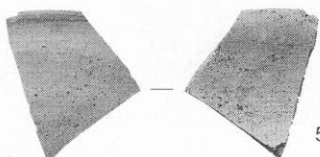
2



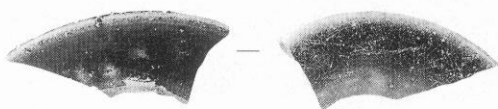
3



4



5



6

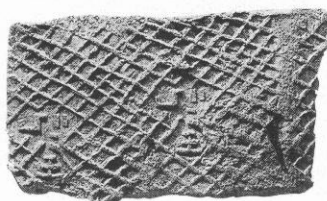


7



8

SE 012灰色粘土



9

212 SE 012出土遺物

图版 16

SE 013灰褐色土

SE 013暗灰色土



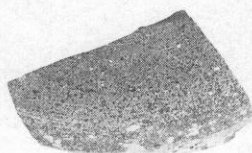
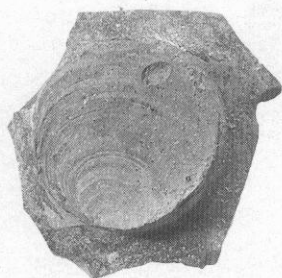
1



2



3



4



5



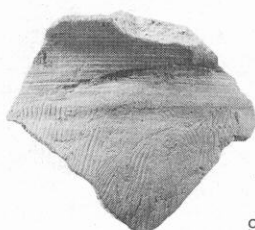
6



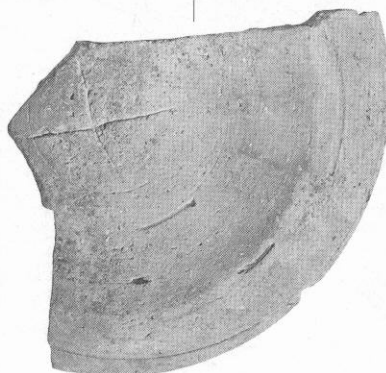
8



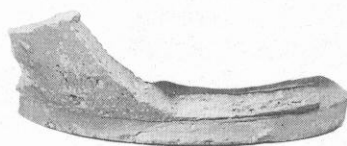
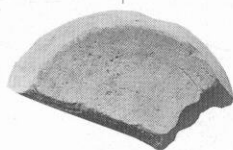
7



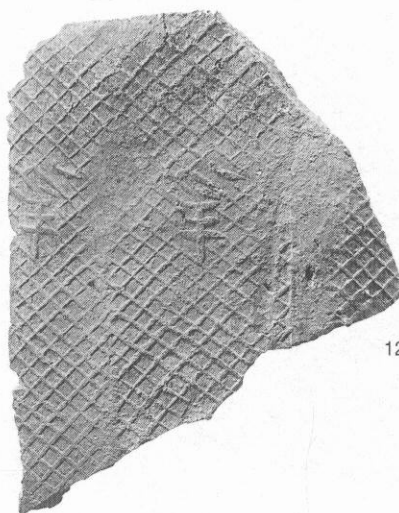
9



10



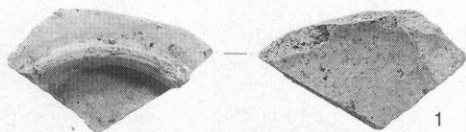
11



12

212 SE 013出土遺物

SE 020 暗褐色土



1

SE 021 黑褐色土

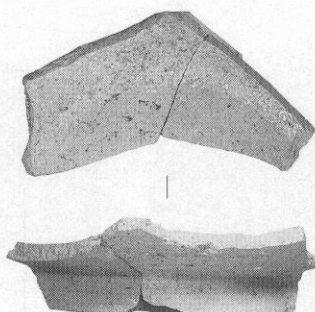


3

SE 021 黑灰色土

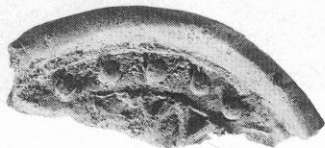


4



2

SE 022 暗褐色土



5

SE 022 暗灰色土

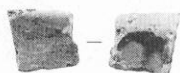


6

SE 022 暗灰色土



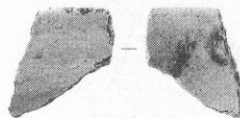
R-005



7

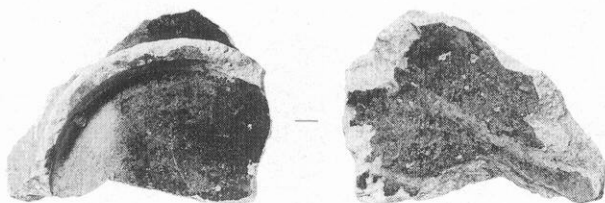


8



9

SE 022 灰色粘土



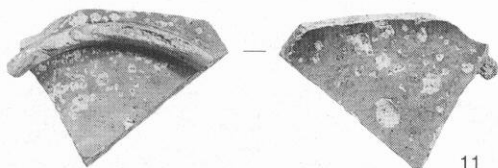
10



12

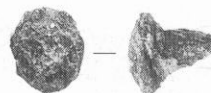


13



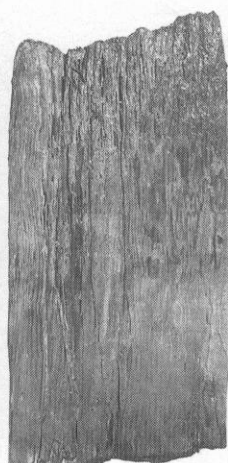
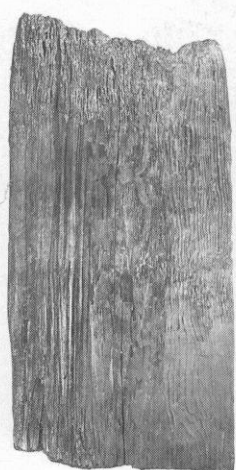
11

SE 022 暗黄褐色土



14

図版 18



15



16



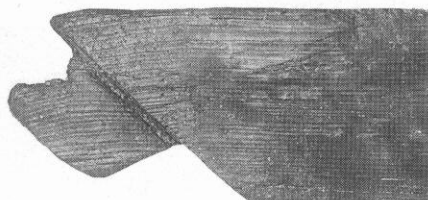
17



18

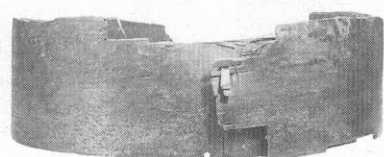
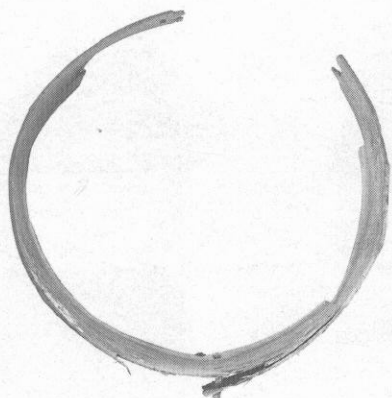


18 ホゾ部分



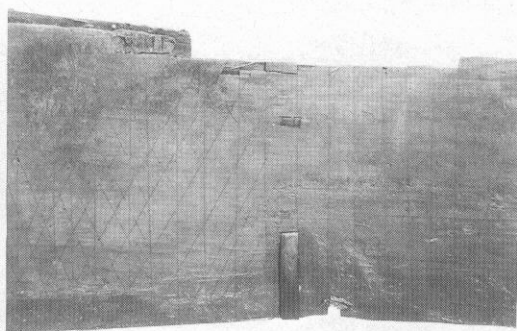
212 SE 022 出土遺物

SE 022

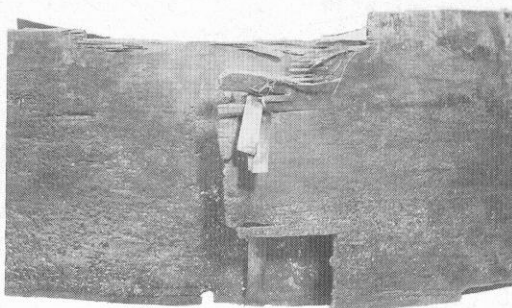


212 SE 022出土遺物

19

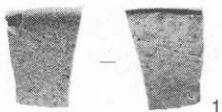


19内面

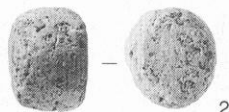


19接合部分

SK 007黒褐色土



1



2

SK 007黄褐色土



3

SK 016暗褐色土



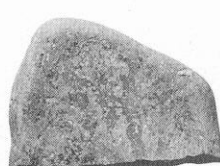
4

SK 017黒褐色土

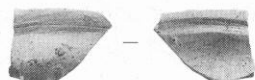


5

SK 017黄褐色粘土



6



7



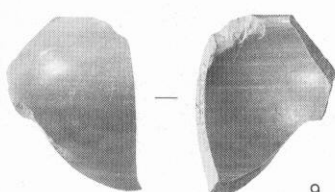
8

SK 017黒褐色土



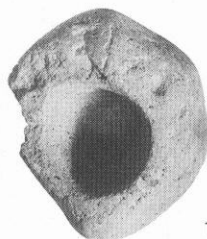
R-002

SK 018暗褐色土



9

SK 019暗褐色土

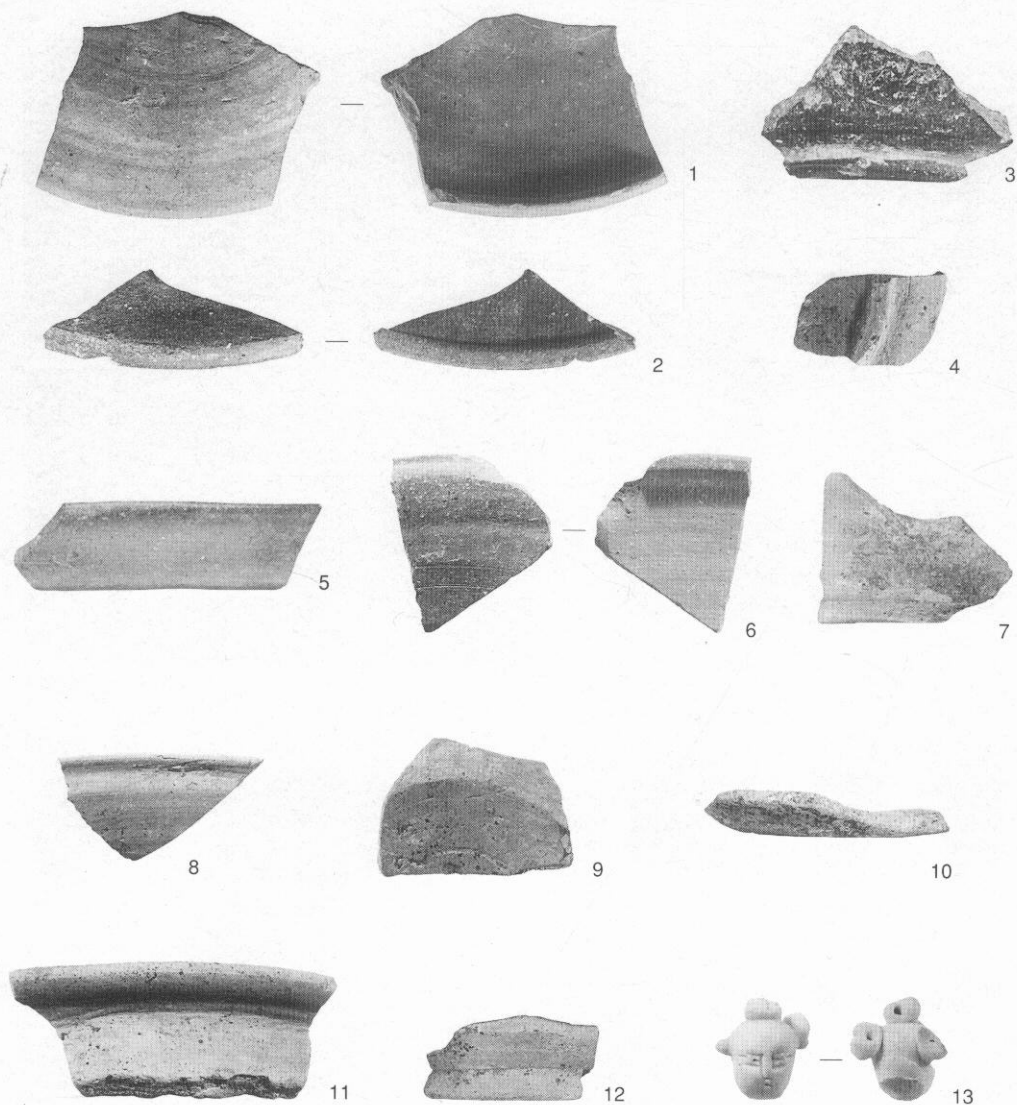


10

212 SK 007・016～019出土遺物

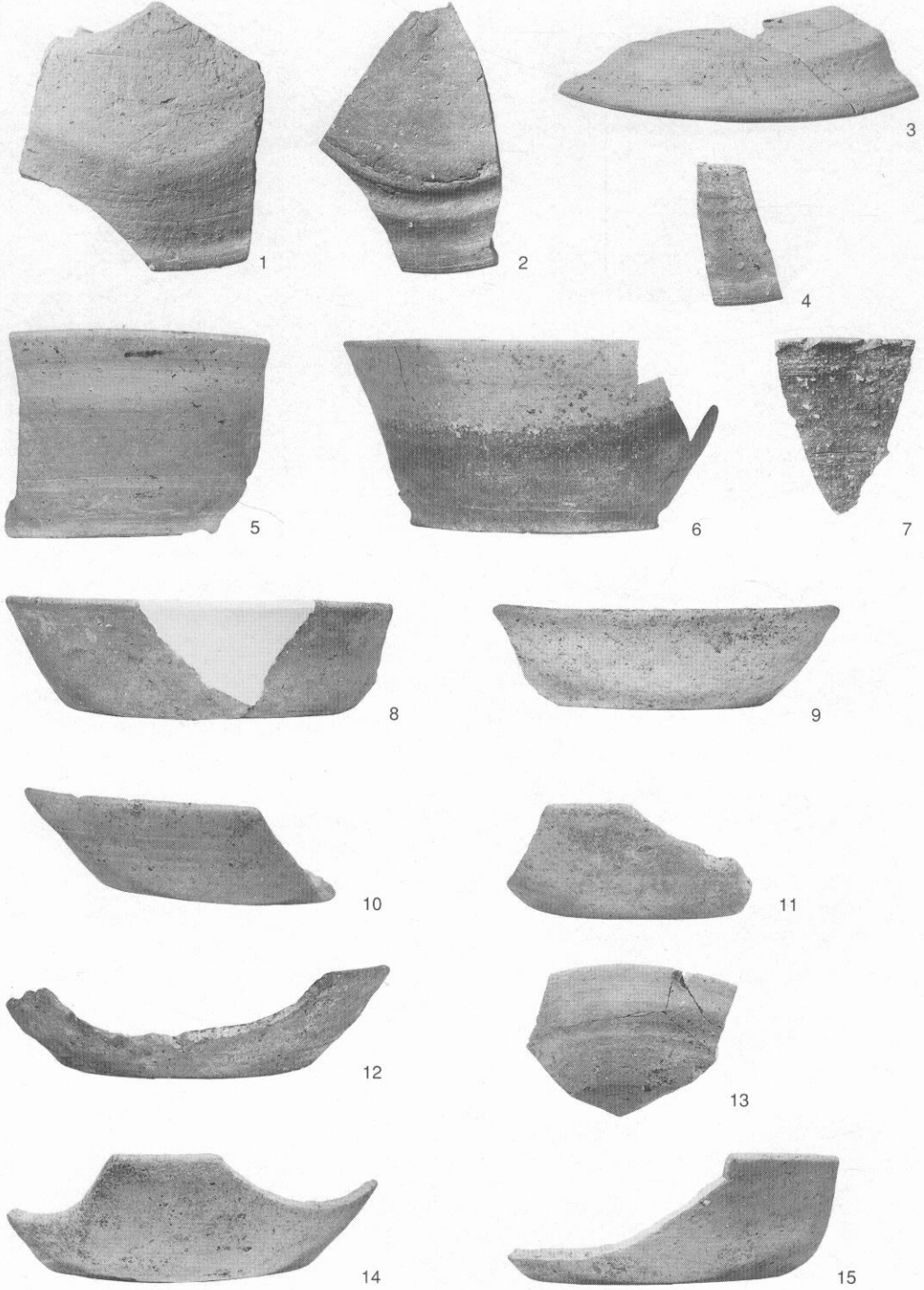
図版 20

SK 025黄褐色ブロック土



212 SK 025出土遺物

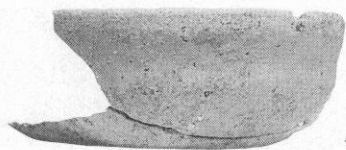
SK 027 黑褐色土



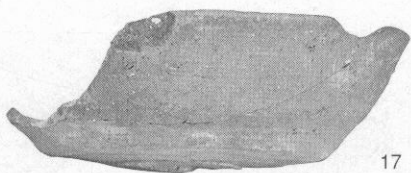
212 SK 027 出土遺物

图版 22

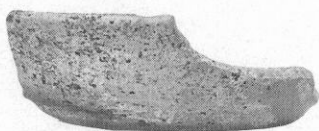
SK 027 黑褐色土



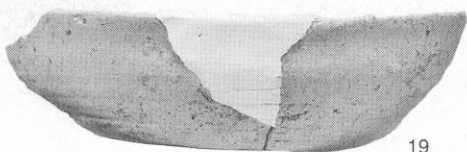
16



17



18



19



20



21



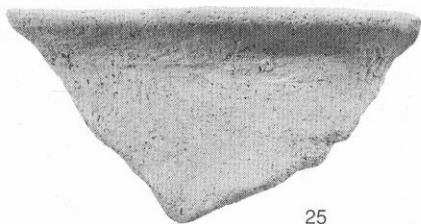
22



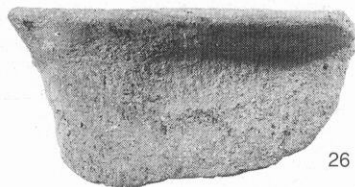
23



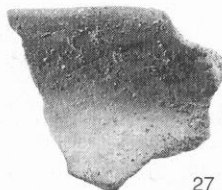
24



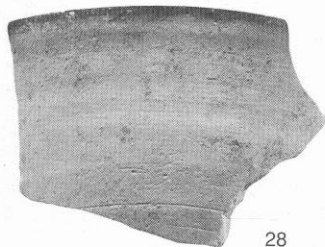
25



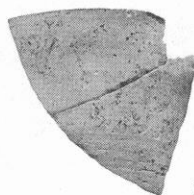
26



27



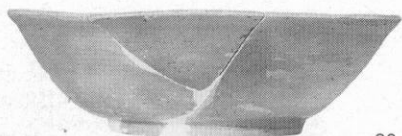
28



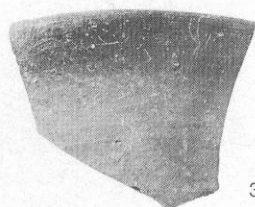
29

212 SK 027 出土遺物

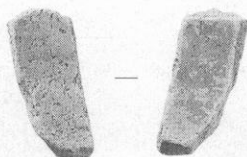
SK 027 黑褐色土



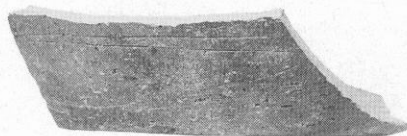
30



32



31



33

SK 027 暗褐色土



34



35



36

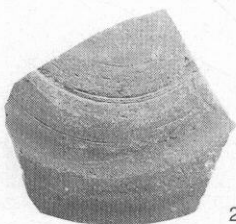
212 SK 027 出土遺物

图版 24

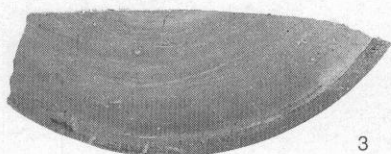
SK 030灰褐色土



1



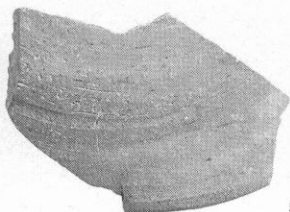
2



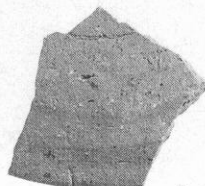
3



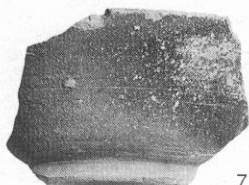
4



5



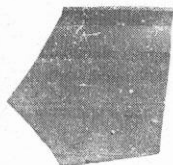
6



7



8



11



9

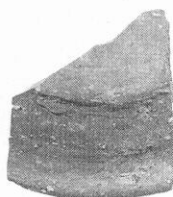


10

SK 030暗灰色土



12



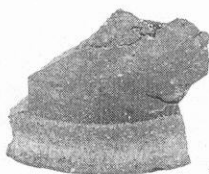
13



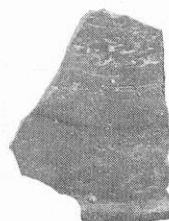
14



15



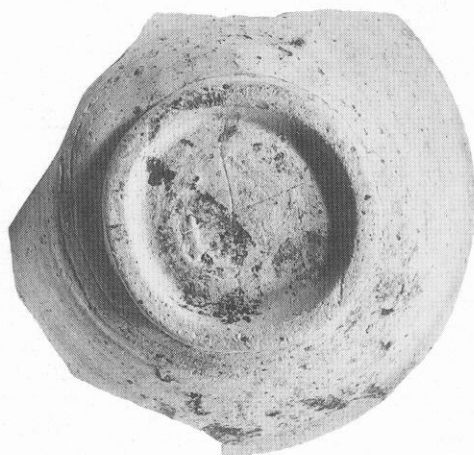
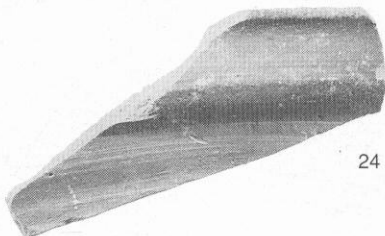
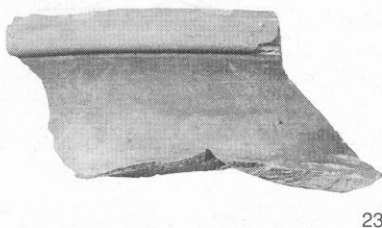
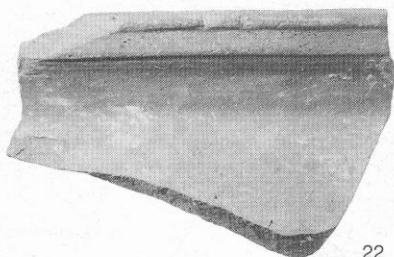
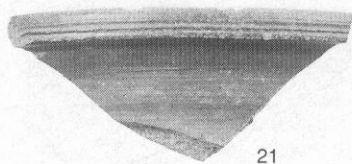
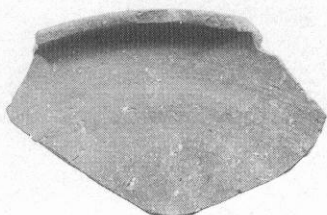
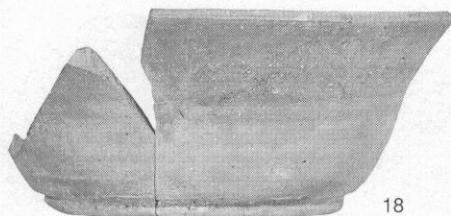
16



17

212 SK 030出土遺物

SK 030 暗灰色土



212 SK 030 出土遺物

图版 26

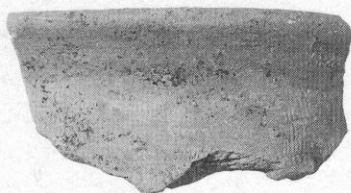
SK 030 暗灰色土



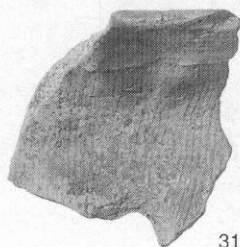
28



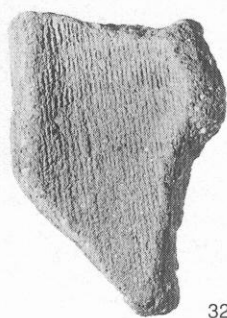
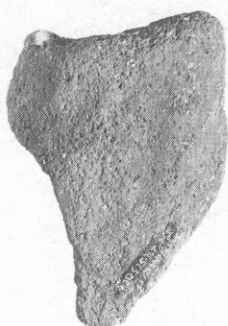
29



30



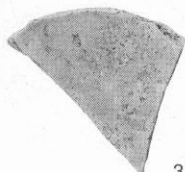
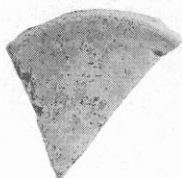
31



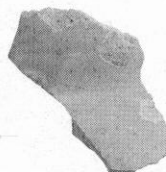
32



33



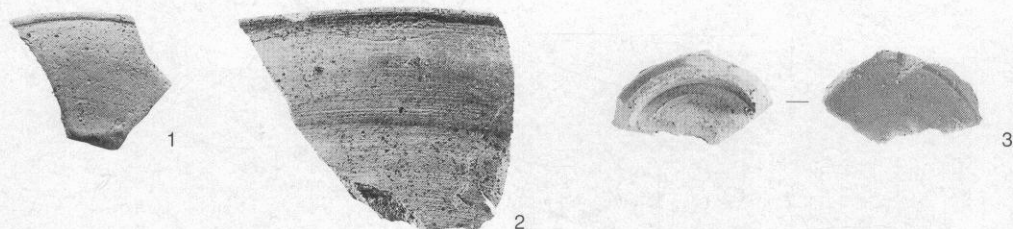
34



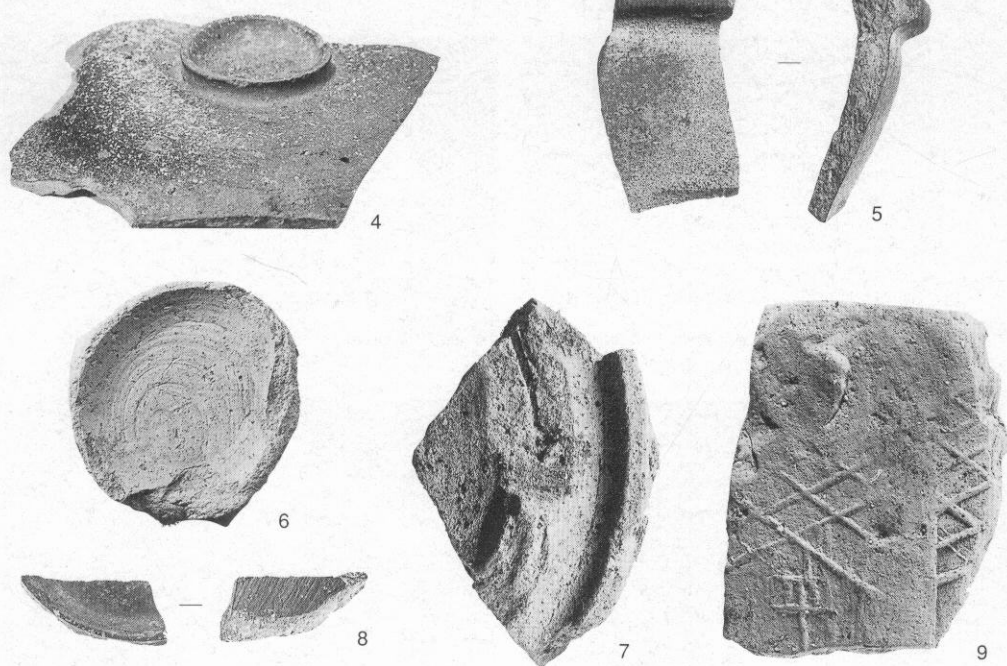
35

212 SK 030 出土遺物

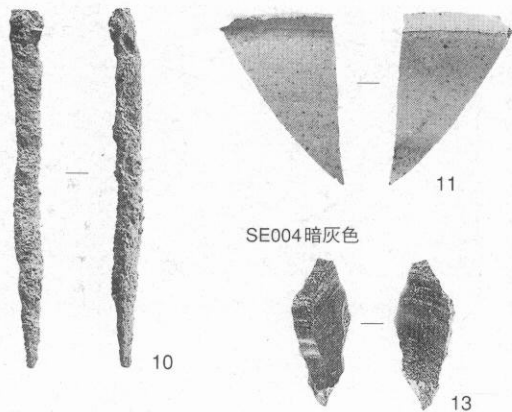
茶褐色土



暗茶褐色土

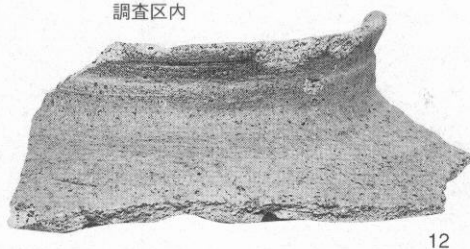


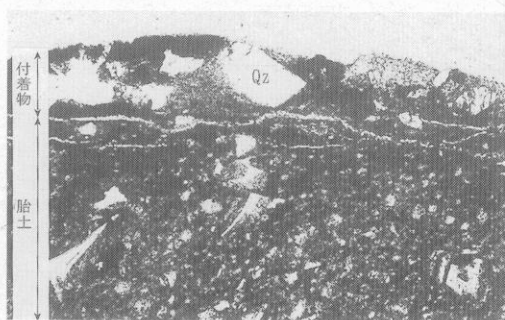
灰褐色土



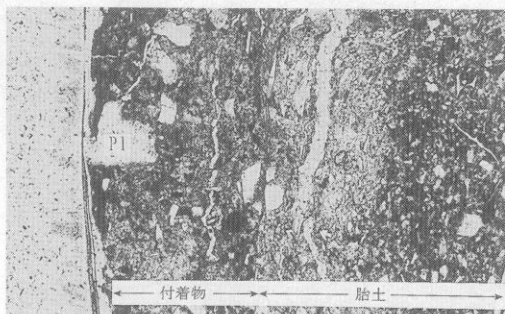
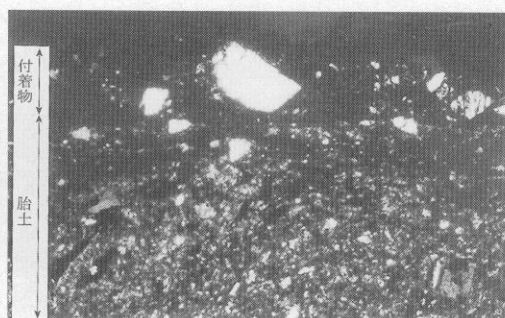
SE004暗灰色

調査区内

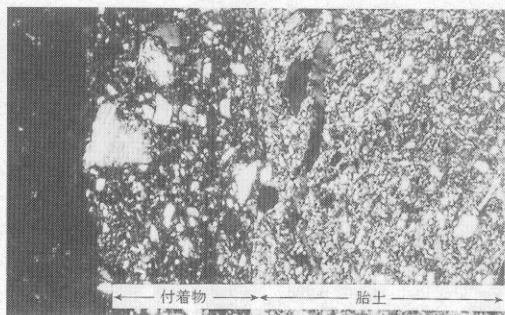




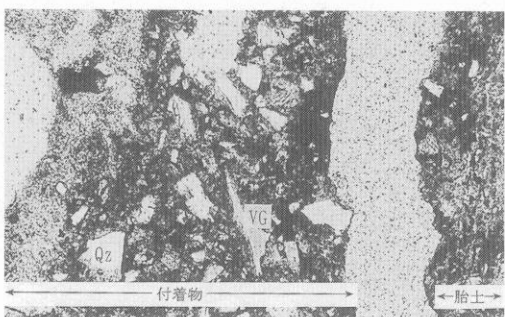
資料1 土師器小皿212 SD 010暗黄褐色土 R-008



資料2 土師器甕212 SD 010暗黄褐色土 R-009



資料3 平瓦212 SD 010暗黄褐色土 R-010



資料4 丸瓦212 SD 010暗黄褐色土 R-011



Qz：石英。Pl：斜長石。VG：火山ガラス。
写真左列は下方ボーラー、右列は直交ボーラー下で撮影した。

212次出土遺物の胎土付着物薄片下の状況

0.5mm

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうほうあと 18							
書名	大宰府条坊跡 XVIII							
副書名	地区道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	太宰府市の文化財							
シリーズ番号	第57集							
編著者名	香川達郎・中山 豊							
編集機関	太宰府市教育委員会・玉川文化財研究所							
所在地	太宰府市教育委員会 〒818-0198 福岡県太宰府市観世音寺1丁目1-1 TEL092-921-2121 玉川文化財研究所 〒221-0822 神奈川県横浜市神奈川区西神奈川1-8-9 TEL045-321-5565							
発行年月日	西暦2001年3月15日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
だざいふ じょうほう あと 条坊跡 第212次	ふくおかけんだざいふし 朱雀3丁目 2584-1	402214	210044	33° 30' 14"	130° 31' 01"	20000817 } 20001023	約425	地区道路整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大宰府 条坊跡 第212次	官衙	奈良時代後期 } 平安時代後期	道路 溝 井戸 土坑 段状遺構	1条 2条 11基 14基 1基	須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・国産陶器・貿易陶磁・瓦類・木製品・金属製品・石製品		条路側溝検出	

太宰府市の文化財 第57集

大宰府条坊跡 XVIII

－地区道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成13年（2001）年3月

編集 玉川文化財研究所
〒221-0822 神奈川県横浜市神奈川区西神奈川1-8-9

発行 太宰府市教育委員会
〒818-0198 福岡県太宰府市観世音寺1丁目1-1

印刷 (有)平電子印刷所
〒970-8024 福島県いわき市平北白土字西ノ内13